

長ずるばかりでなく、墨畫をよくし、また盆砂に於ては景雲堂と號して一派の開祖である。しかも前田家に於ては金山御用をも承はつて居たといふから、随分多能多才であつたと思はれる。陶器は何時頃始めたか分らぬ。『陶器考草』に載する武田信秀くみ子刀白の先夫君の書面には春日山の持地に陶窯を築き、また私宅にも窯があつたと記してある。私宅の方は蓋し錦窯であらう。民山窯の製品は普通「民山」の書銘をもち、東京帝室博物館所藏の徳利にも見らるゝ如く緻密なる繪を附けたものが多い。併し博物館のは幾分青九谷の風を、金澤に、春日山の書銘をもつものの中、縁を唐草、地を毘沙門龜甲で埋め、金彩をも用ひた極めて綿密な繪附の牡丹模様、香合などを屢、見る事がある。これは何時頃のものかと疑つて居たのであるが、武田氏に傳ふる六角の徳利を観るに至つてその明かに民山窯製品なるを知つた。蓋し民山窯は極密の繪附をするといふ點に於て後に九谷に起つた宮本屋窯の八郎手と稱するものの先驅となすのである。友月、弘化元年九月十一日、年七十三にして歿し、養子秀造、孫孝太郎のち信秀と改む業を繼いだ。

(六)鍋屋吉兵衛 民山窯の工人中筆頭に數へらるゝ者である。松下堂文筆と號し、家は世々陶畫師である。吉兵衛はひとり陶畫をよくするのみならず、彫刻、蒔繪等手に随つて成る風であつた。初は小松に住して友月の家に通ひ、のち金澤に移つた。

(七)原吳山 通稱紺屋伊右衛門、もと十間町に住み、銀座合ぎんざあひを勤めた家柄町人であつて、歌を田中躬之に、俳を梅田江波に、茶を裏千家宗俊に、香を湯川一井庵に、書を佐藤某に學んだ。號は青竹庵、歌道の方では猶文と稱した。永樂和全と交あり、木米に私淑し、松田平四郎の陶法書を手引として、窯を春日山の南鶯谷に築いて、樂燒、南蠻、交趾、御本うつし等の茶器を作つた。その銘は初め「震辰卯の意味で龜田鶴山が命じたのであるといふ。の印を用ひ、のちまた「吳山」の印を用ひた。曹洞宗傳燈院の境内に接するその舊地を訪ふに、窯跡の勾配、井戸など其儘に残り、建築物はすべて毀たれたけれども、松檟、多羅葉、露月と稱する椿など植ゑ込んだ庭は故人の數寄を偲ばせる。吳山の門人は山代の須田菁華氏などいろくあり、金澤高野如月庵もその一人である。「吳山は九里歩くりのあゆみといふ千石取の落胤であつ

て、上品な人であつた。鶯谷の窯を築いたのは明治十年頃「陶磁考草」に十三年とある。その後、堅物は山代で焼いて居た。嘗て共に京都にゆき、和全の家を訪ふに、和全は吳山の來たのを喜んで、折ふし作り上げた光悦うつしの茶碗に、光悦の状をも添へて、吳山に贈つたとは、如月庵の談である。吳山は七十一、二歳で歿し、今年二十五回忌に當るといふ。如月庵の藏する色紙形の香合には

青竹の垣や落葉の二葉三葉

と記し、明治廿四年辛卯冬日の年紀がある。歌は、

音もせてふるとは見えぬ春雨にこけむす庭の色ぞそひゆく

露おもみ尾花くず葉をふりわけてさくもさやけき蟲のこゑく

などその風尙を知るべきである。

(八)鶯谷庄米 庄米の傳はまだ調べぬ。たゞその號に米字を附して居るので、彼もまた木米の私淑者であらうと思ふのである。その作品は盃、茶碗、急須等が多く、多くは南蠻風、備前風といふべき手のもので、庄米の楕圓印を押すの

が普通である。青磁もあるといふが、われらはまだ見ない。初は鶯谷で焼き、晩年は善導寺の裏山あたりの瓦窯を借りて細々と焼いたのであつた。文字は無い男であつたといふけれども、東京得能博士の藏する夏茶碗の如きは風韻ある手蹟を見せて居る。或は何人か數寄者の手蹟でもあるのであるであらうか。善導寺所藏鈴形樂焼香合には「八十翁庄へ造」とあり、今より八九年前に歿したといふ。鶯谷の氏は鶯谷うぐいすに居つた頃、本氏大屋を書き替へたのであつて、矢張あうやと讀むべきであるといふ説もあるけれども、これもはつきりしない。

この外、金澤で木米の百兒手ひゃくごて、百老手の鉢などの偽物を作つたとりてや、(正木某)の事、鶯谷に登り窯を築き、うつし物をよくした横萩一光今京都に住む、金澤に人の作うに言はる、の山、光翁此の直話は此の事など、記せば限りもないけれども、此邊で切上げて置く。しかも尙ほ一異説として記して置きたいのは、木米が金澤在住中、越中に赴いたといふ説である。即ち木米は小杉焼の産地、小杉に築窯するつもりで、金澤を出發したが、高岡まで赴いて、そこで高嶺讓吉博士の祖父君に遇ひ、祖

父君の爲に築窯して小杉には到らずして引還した。高嶺氏の作品は青磁の手爐などあり、木米は主として仁清風の雜器を作つたらしいとは前田家の江間謙治氏の談である。これは全く耳新しい説であつて、更に研究を要するものである。

〔附記〕第十三章春日山窯の一章を印刷所に送つて後、ふと加藤氏の手録を検索する中、考草所載の書取以外の原吳山の書取を發見した。重複する所も多いけれども、参考すべき點が少くないから、更に又その全文を掲げることにする。

文化四年於春日山帝慶山 舊御藩町會所後用銀方ヨリ諸費御貸渡御仕入ヲ以陶器登リ窯ヲ築キ宮竹屋喜左衛門松田平四郎ノ兩人窯元代人ニテ職工京都青木佐兵衛陶工ナル者ヲ呼寄陶器製造一時盛ナリ奎平故アリテ京地ニ歸ル後下職ノ者越中屋兵吉 兩人職工トシテ製造場名代人宮竹屋喜左衛門等引請陶業仕來候得共文政年間ニ是亦廢業トナル奎平滯在中其砌私祖父與三兵衛町會所横目肝煎相勤居春日山陶器職場貸附方等

ノ主附ニ被仰付其由縁ヲ以木米製造品陶法書類等持傳罷在當今世柄ニ相成私從來ノ業務ニハ無御座候得共右書類ニ基キ該道ヲ練磨シ文久年度卯辰山麓鶯谷ニ隱居シ後園ノ土ヲ以テ手造樂燒ヲ製造シ茶客ノ需用ニ應ジ開業ヲナス茲ニ陶工日々盛ナルニヨリ明治十三年登リ窯ヲ新築シ堅燒物ニ着手シ爾來陶器營業ヲナスニ至ル

是に由つて之を觀れば吳山の陶法書は松田平四郎のそれと全然別物のやうに思はれる。しかし吳山本を筆寫した高野如月庵は吳山本は松田本を寫したものであると言つて居る。二者を比照せば更に意外の發見をするのかも知れぬが、憾むらくは今その便をもたぬ。

第十四章 文化六年以後

享和初年から文化四五年にかけて木米の身の上は實に多事多忙であつたが、文化六年以後は不思議な位事件に乏しく、殆ど特記すべき事がない。もしあ

れば妻子其他家族關係の吉凶禍福くらゐのものであつて、その外には竹田、山陽、雲華など友人間の交遊あるのみである。文政三年奥殿侯に書を上つた如きは寧ろ異數の事に屬する。蓋し金澤から木米歸るや、時に四十二歳であつたが、これより後は十分落ちついて暫くして、居た栗田の窯にかぢり附いたらしく思はれる。櫻井の窯が蝸川説の如く木米傳のものとなせば、木米何時かは彼地に出かけた筈であらうが、それは金澤以前か以後か分らぬ。まづ木米は金澤から歸つてからは、地方ゆきはさつぱりと斷念して、自己の研究に専念没頭したと見る方が面白いやうに思はれる。

交友關係は別に一章を立て、記述する。家族關係もその一人々々に就て稍、委しく説かねばならぬとすると、餘すところは、何年何月に何の陶、何を畫を作つたといふ事より外にない。しかしこれも畫蹟なり陶磁なりを論ずる時に自ら明瞭になるとすれば、こゝに立てた文化六年以後の一章は無内容となる外はない。しかし斯くては餘りに唐突に終焉に至つて、上來の諸章との釣合が保たれぬ事になるので、編年體に各種の出來事を列ねて、木米の後半生を

髣髴するのよすがとする。

文化六年はひとり木米に就てのみならず、世間に就ても何等事件がないが、翌文化七年にはおらいが生れたかと思はれる。おらいは木米の本妻お貞との間に出來た子である。おらいの事は京都でいろ／＼に傳へられ、或は木米の姉とし、妹とし、或は木米の貫ひ子とするなど、頗る真相を得るに苦しんだが、最後におらいの持つて居た木米夫妻の位牌を探り當て、やうやく木米の實子なることを明かにする事が出來た。即ち木米夫妻の位牌の裏面に註書して「來父母」の文字が見えるのであつて、しかも更に續けて「周吉父」「いふ父」とあつて、この二つは共に母の字を脱して居るから、お貞はお來のみの實母であることが分るのである。普通京大阪では、お來は大坂の富家殿村氏の妾であつたといつて居る。木米が多くの古名器を觀るを得たのは主として殿村氏が心掛けて世話をしたためであつて、殿村家にも勿論收藏が多かつた。木米はそこで一器を示さるれば随つてその模型を取つたと、斯ういふのである。抑、殿村家は平野橋の東詰にあつて、通稱米平^{こゝろ}とて、兩替が商賣であつた。その別莊

は京都にあつて、木米の書狀に「鳴川一越に御光來奉願」とあるを見れば、その頃から別莊は二條木屋町に在つたのであらう。お來と殿村氏との關係は單に世間の噂ばかりではなく、お來が晩年をその家に送つた京都の下村氏が證明せられ、また大阪の花月庵の老人などが之を裏書せられるのであつて、木米の書狀にも「先君御一周忌之爲御志膏燭御贈被下厚御禮」云々といふのがあり、年忌の配り物を受くからはその親戚の關係にあることは疑ないのであるが、殿村氏はわれらに木米の書狀全部を貸與せられたるに拘はらず、お來との關係はよくも分らぬとて詳細を物語られぬので、總てが曖昧模糊たるは遺憾の極である。殿村氏には京都に別莊ある外、天下茶屋にも別業があつた。お來はこの天下茶屋の別業に在つたのであつて、木米歿後木米の遺物の重なるものは大抵お來が引纏めて其處へ持つて行つたといふ風説もある。下村氏は殿村氏に木米常用の刀があるが、あれはお來が持つて行つたのであるとも語られた。花月庵老人の談に、木米の刀は木米自身が鍛へたといふ事である。當時大坂では大坂のみではないが朝顔を栽培することが大に流行し、糸屋町の炭五郎すゐごろう本名炭屋五郎兵衛、殿村氏と同じく大名に金を貸して遊んで居る

程の富隈者であつた。の如き就中有名であつたが、殿村氏も十人以上の朝顔作りを抱へて、番附の三役どころに居つた。而してその飾り鉢は木米の作で、百箇ばかりもあり、今もどうかすると大阪あたりでその鉢を見ることがあるといふ話である。竹田の「屠赤鎖々録」乙丑の年の記事を見るに、やはり大坂で朝顔を見た事を記して居る。併し乙丑は文化二年であるから、お來はまだ生れて居ない。さらばお來の殿村氏へ行つたのは何時頃であらうか。お來ははじめ藝妓であつたといひ、來葉といふのがその藝名であるともいふ。或時、來葉のお來がさる客人から襦袢の廣帯をこしらへて貰うた事があつた。七寶つなぎの地紋のある白地の帯で、木米はこれを見ると何か一筆畫いて見たくてたまらず、いやがるお來にやうやくその端を一尺許切らせて、端溪登舟圖を作つた。今京都著名の銅器師龍文堂の藏する横物が即ちそれであるといふやうな逸話もある。藝者であつたにしても、何れは十七八歳から後の事であらうから、文政の半以後の事であらう。一體お來を愛した殿村氏の名は何といふのであらう。「兼葭堂日記」の題簽を書いた殿村茂濟が或は其人ではな

いか。殿村氏の示された木米書状の名宛は何れも殿村厚明號桂であつて、これはお來を愛した人の子に當るのであらうと思ふ。お來に就ては尙ほ書くべきことがある。殿村氏所藏の木米の書状も示さねばならぬが、それは後に譲つて今は唯、お來の生れたこととお來の若い時代に就て一言するのみである。

木米は初子のお來を得て、どんなに喜んだであらうか。吾等は下村氏がお來は明治十二年六月廿一日七十歳で歿したといはれるのに據つて、文化七年をその誕生の年とするのであるけれども、若し京都陶器試験所(?)で刷つた蕨蕨版の略傳に見ゆる如く、文化五年に生れたとするならば、蕨蕨版には明治十年七月十歳にして歿したとある。しかしその歿年の十年でないことは下村氏の過去帳によつて明かである。唯、下村氏が七十歳と記憶せらるゝことが、七十二歳の誤でないとも限らぬから。これ木米金澤の地をすつるの年であるから、木米の歸京と何等かの關係がないとも限らぬ事となつて来る。まさかに初子の顔見たさに京くんたり歸つて行き、其儘金澤ゆきがいやになる木米とも考へられぬけれど。

享和二年兼葭堂が歿してから後は、文化元年に十時梅厓が死し、同三年には土佐、光貞、長町竹石が死し、翌四年には皆川淇園が死んだが、何れも木米には關

係ありとも思はれぬ。然るに文化七年には變屈者の上田秋成が七十八歳を一期として歿した。秋成は淇園の主催で東山書畫會が始まつた翌年即ち寛政五年ひよつこりと大坂から京に来て、村瀬栲亭と喚べば答へる知恩院袋町に居を構へたが、その國學における造詣はさておき、翌六年には『清風瑣言』の一書煎茶を説いて洛陽の紙價を高からしめた斯道の一先覺者である。秋成はまた陶器にも關係が深く、寶山の家の傳では寶山から陶を學んだ事にもなつて居り、現に秋成手製の急須といふものも世間に見える。仁阿彌道八が妻を迎ふるや、女房よんだ川へぼつこめ、川者三條しら河橋よ、舜も河濱の陶物つくり、聖人出世千秋うたふ、松風店をいはひましよ、さつても高い花髻、御自慢なされ、今での名工じや、署名は「瑞龍山下」と素絢のかいた鼠の嫁入の繪の上に書きつけたのも秋成であつた。秋成は吳春と昵懇で、吳春への手紙には「ちよんがれめが窺はれるが、素絢とも相談の間であつたと見える。」

併し秋成のみづから茶器を作らしたのは竹田によれば寶山でも道八でもなく六兵衛である。

丁卯（著者いふ、丁卯は文化四年）正月十三日阮秋成再び栲亭先生の所に造る。
十一年計も先生と朝より晝頃まで咄あり、余も側に侍す。清風瑣言の續篇
を録し、度由の話にて、此度は茶癡醉言と題して、面白き話を叢るよし也。席
上の話一二を記す。○故大佛の宮蘆庵の墓を通り給うて、ナムアマミダの五
字を句の首におきて、五首の歌を詠じ手向給ふ。されど餘齋（著者いふ、秋成なり）の意
には、屈竟の佛の字を落し給ふは残念なり、因て又五首をよみて、佛の字悉く
句尾に置いて詠ずと。先生笑曰、かやうの事は有るもの也、龍草廬の句に、金石
絲竹匏土革と云ふあり、七言故木の一字をもらす、扱も難義なること也。○
今世に流行する煎茶も先生餘齋兩人して圖を製し、其頃清水の陶工六兵衛
と云ふ者に命じて作らしむ。彼是と世話して漸く出來す。纔に十二三年
計の事なり。今は三都を始め田舎まで行れて、片隅の怪しき茶碗店まで急
焼風呂を沽らざるはなし。夫故餘齋六兵衛方にて茶器を取れば價に及ば
ず。餘齋のかけにて如斯に流行して、誠に多くの益を得しゆへ也。六兵衛
も四五年前に没故して、其後はこれに及ぶものなし。

古稀を過ぎた餘齋と、これも六十を越えた栲亭と火桶を圍んでの物語目に見
るやうで、しかもその席にじつと耳傾けた竹田の自記であるから、これ程確か
な記録は無い。竹田のち文政十二年四月二十九日船播磨洋を過ぎつゝ、『茶具
圖譜』の筆を執るに當つて此事を想起し、

村瀬栲亭翁嗜茶。語予曰、初與無腸老人謀、使清六始造急尾燒及風爐、當時好茶
者甚罕。一二十年來、從輩下延至民間田舎、無家不備茶具、以待過客也。甚哉、時人
趨風起流乎。蓋清六善陶、所造極佳。爾後名手競興、如木米老人、及道八久太諸名
家、清雅巧緻、名籍一世、異日、當傲陽羨茗壺系、而著一書、傳芳悠久也。著者いふ、文
論秋成の事である。

と記して居る。六兵衛は初代か二代か。モールス氏によれば、日本人の事を
も外國人の著を引く必要はないけれども、手近に六兵衛の歿年を知るべき材料がな
いのと、モールス氏の記載は六兵衛の家にその材料を得た由を明かにして居る爲、試
みに引く。初代六兵衛は天明六年即ち秋成京に入るの前七年業をやめた如く
書かれて居るけれども、竹田が六兵衛四五年前歿すと書いて居るので考へれ
ば、モールス氏の説の誤なることも、その初代なるべき事も、二代は文化十四
年に歿したから、

ぼ想像せらるゝのである。序ながら六兵衛を清六といふは清水六兵衛の約であ
用ひたかも知らぬ、盧同七碗歌に「五碗肌骨清、六碗通仙靈」と續いて居るのは偶然ながら面白い。さてさらば木米と秋成とは全然
交通がなかつたであらうか。秋成の住んだ智恩院袋町は、いはゞ木米が大和
橋のわが家から青蓮院前を経て日毎粟田の窯場に通ふ通りすがらの所であ
つて、しかも栲亭によつて秋成に接した竹田は木米の莫逆の友である。よし
竹田の木米に會したのは遙かに後年であつたとしても、六兵衛なき後はその
後継者として秋成たるもの如何んぞ木米を知らざらんやである。木米が南
蠻急須をうつすには必ずしも秋成に諮るを要しなかつたであらうけれども、
時に木米も煎茶の先覺者たる此翁の痼癖まじりの清談に聴き惚れ、又は『清風
瑣言』載するところの「鶉居珍玩南蠻製茶瓶」などを観るを欲しなかつたであ
らうか。

文化八年は吳春の歿した年であるが、また穎川の歿した年である。穎川歿
してその反響は何處にも見られぬ。陶人としての穎川の傳記は眞に一疑問
でなくてはならぬ。文化八年の出來事は、木米を中心として言へば吳春の死

よりも穎川の死よりも山陽の入京が寧ろ重く考へられる。しかし竹田とい
ひ、山陽といひ、その木米に交を結んだ年月に至つては全くわからぬ。また此
年は仁阿彌道八が粟田から五條坂にうつつて安南燒法を研究し出した年と
して記載せられ、横井博士等によれば道八は翌九年に至つて青華白磁の完全
なるものを製出するに至つたと稱せられる。青華白磁は言ふまでもなく染
付であつて、京都の製陶はこゝに一紀元を劃するのであるが、此道八染付の成
功といふことはどれだけ信を置いてよいのか、安心がなりかねる。なぜなら
ば仁阿彌の作には染付は極めて少いからである。完全なる染付、しかも初始
の名譽を負ふ染付を措いて、何とて後に道八は陶器にのみ力を盡くしたであ
らうか。固より道八の好むところは此にあつて彼になかつたであらうけれ
ども、それにしても餘りにその數が少い。いな寧ろ仁阿彌の作品らしい青華
白磁を見た事がないと眞面目なる一派の研究家は言つて居る程である。さ
らば京都染付の先驅者たりしものは誰であらうか。安政の版本『陶器考』は木
米を以てこれに擬する。四二、四三頁参照木米か。木米にはなるほど染付の愉快なも



碗茶煎紅髹



染付屏風箱香合



栗田雙米印



銘裏同



型土合香袋布臺

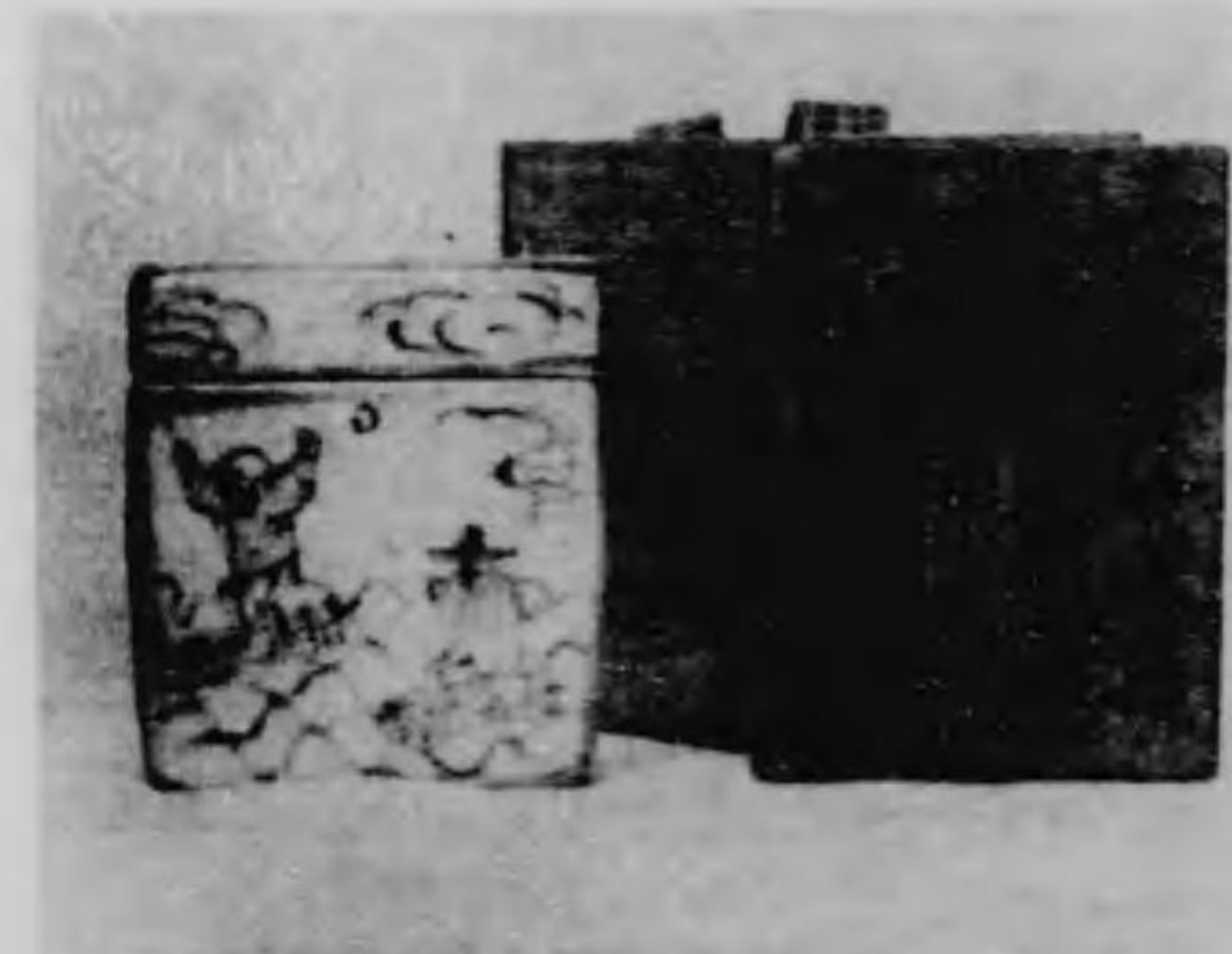
木 米

一六四

のがある。さうして木米がはやく金澤にありて、染付を作つたとするならば、文化九年はおろか、その五六年、更に溯つては三四年の頃に既に或る程度まで見るに足るものを作つたとせねばならぬ。併しその眞作紛ふべからずとして今問題とし得るものは、われらの知る限りに於ては文政己丑(十二年)仲秋の箱書を伴ふもののみであつて、遙かに^{挿圖}年代が下るのである。^{染付は少からず見ただけである。}もし東京帝室博物館に藏する「文化十酉仲冬木米」の銘ある祥瑞寫筒茶碗を以て眞作とするならば、その年代は道八の成功せりとなす年と相距ること僅かに一年、しかもその完全^{普通の意味なるに驚くのである}が、此作は忌憚なくいへば多くの疑點をもつて居るから、餘り問題とすることをおまぬ。果して然らば京都染付の創始者はたその年曆は誰であり、何時であらうか、これ當來研究すべき問題である。唯、木米も亦比較的初期の京都染付作家であり、或は『陶器考』のいふ如く第一創始者なるやも未だ知るべからずである。



碗茶煎紅礬



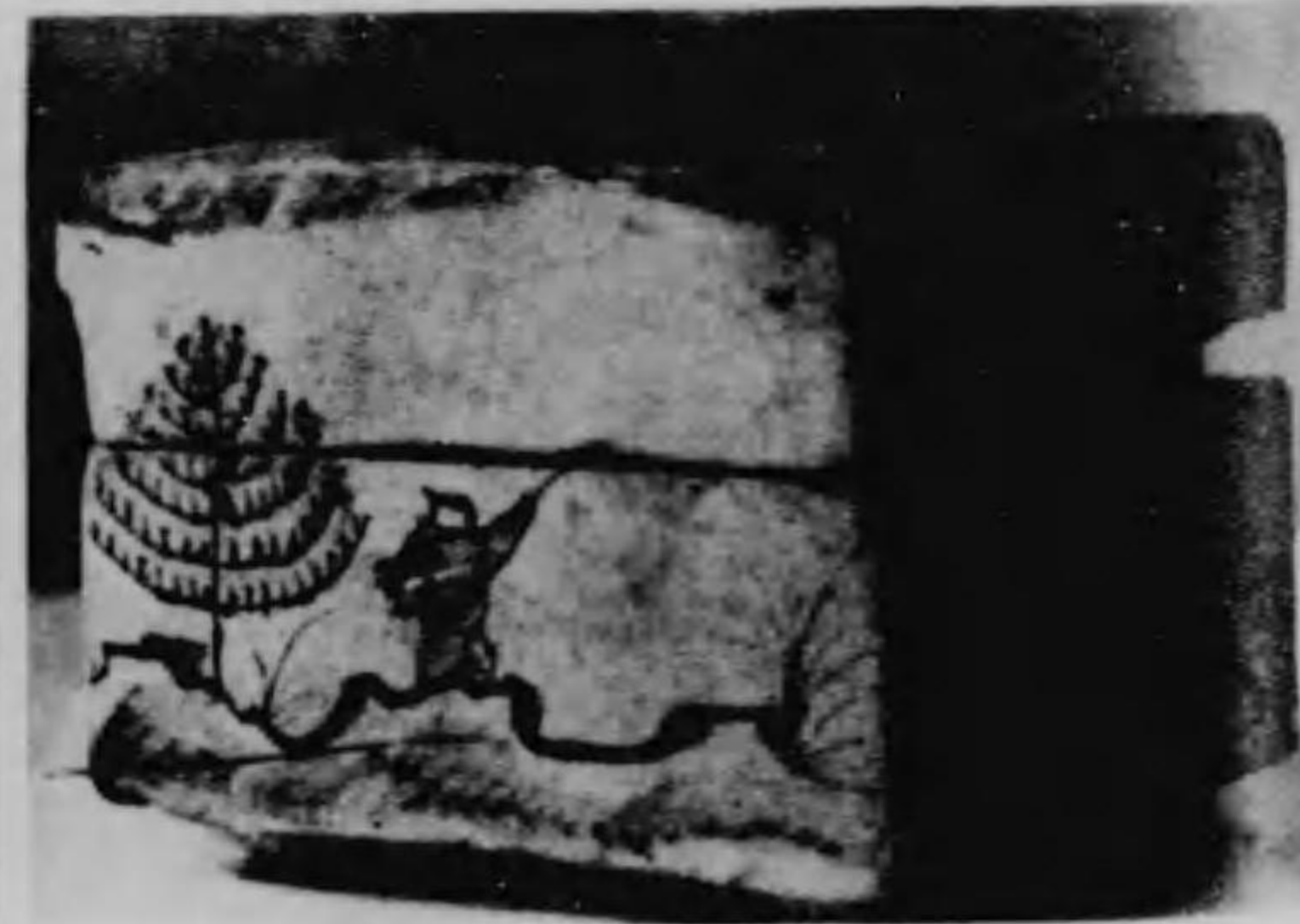
染付屏風箱香合



粟田豊米印



銘裏同



型土合香袋布臺

のがある。さうして木米がはやく金澤にありて、染付を作つたとするならば、
 文化九年はおろか、その五六年、更に溯つては三四年の頃に既に或る程度まで
 見るに足るものを作つたとせねばならぬ。併しその眞作紛ふべからずとし
 て今問題とし得るものは、われらの知る限りに於ては文政己丑(十二年)仲秋の
 箱書を伴ふもののみであつて、遙かに^{和州}年代が下るのである。^{染付は少から}
^{ず見ただけである。}もし東京帝室博物館に藏する「文化十西仲冬木米」の銘あ
 る祥瑞寫筒茶碗を以て眞作とするならば、その年代は道八の成功せりとなす
 年と相距ること僅かに一年、しかもその完全^{普通の意味なるに驚くのである}
 が、此作は忌憚なくいへば多くの疑點をもつて居るから、餘り問題とすること
 を好まぬ。果して然らば京都染付の創始者はたその年曆は誰であり、何時で
 あらうか、これ當來研究すべき問題である。唯、木米も亦比較的初期の京都染
 付作家であり、或は『陶器考』のいふ如く第一創始者なるやも未だ知るべからず
 である。

木米

一六四

第十五章 奥殿侯

文化十二年には光琳の百回忌が酒井抱一によつて京都で修せられた。しかし光琳と木米とは餘りに縁が遠い。翌十三年には鈴木芙蓉が歿したが、文化はその翌十五年四月二十一日改元して文政と改まる。この年木米五十二歳。岡田米山人、司馬仁漢、村瀬栲亭、寶山十三代安右衛門等此年死し、二年には若杉焼の本多貞吉三年には浦上玉堂が歿した。これらの人々の中には木米相識の間柄なるもある。文政元年はまた山陽が耶馬溪に遊んだ年として記憶せられる。けれども木米としてはこの五七年の間に最も記念すべき事件は奥殿侯に『陶説』を謄寫して上つた事でなければならぬ。上來屢引くところの『上奥殿書』は即ち右寫本『陶説』に添へて差出したものであつて、その全文は左の通りである。

上奥殿侯書

僕原非陶人。少遊於高需皮家。喜賞鑑古器。所謂古器者。銅器玉財錢貨之類也。凡此三者皆足以觀世政之盛衰。雖其製造之詳。莫得的知。而就博古圖諸書。其樣式欸識。略可窺見焉。僕往年遊浪花。寓木兼葭堂。始閱龍威祕書。其中有清人朱笠亭所著陶說六卷。讀之有會於心。因乞寫。謂我嬖書。欣誦不止。竊意鑄錢則有犯律之咎。彫玉則無昆吾之刀。冶銅器亦身不得與之俱壽。莫能目後人賞玩之時也。於是乎始有志陶業。三十年於此。然性質魯鈍。未覺一二之有得也。其功僅足以防饑凍耳。蓋陶製之有妙手。本邦今古乏聞其人。上古逸矣。唯當足利氏之時。有瀬戸四郎者。巧作苦甌器。傳稱高手。今按其釉法。蓋學建油。而不能成者也。雖然。因其遺法。瀬戸一縣燒造日用之器。其利博矣。次之。伊勢五郎大夫者。嘗受豐臣氏命。而入朱明。在饒州浮梁縣。製素肌玉骨青花器。傳技而歸。工造精妙。可入賞鑑也。又近世有仁和清兵衛。乾山尙古者。亦稱名工。仁清者能用陶車造器。爲當時茶家所貴重。惜其釉法曇色少澤耳。乾山者學西洋器之釉法。不能成。而纔得作坏鉢而已。雖然。不惜費。不惜暇。且做光琳畫樣。花紋頗雅。所以爲人愛玩也。雖然。此等數人。皆可稱名工也。蓋當時豐臣氏爲權謀。而設茶道。故人人風偃。至辨置茶器。不惜高價。故彼輩尤

爲世所推。號稱高妙。遂不復刻意於油法。而其法不傳後世。不足恠也。獨有此陶說一書。實可謂陶家之良軌也。僕有欲公世之志焉。甲子歲蒙官許。而家刻之。然猶恐有謬差。深藏篋笥。顧爲其書說古說今。說器之數條。其考據正確。爲斯業之龜鑑。神冊不誣也。獨至說明二條。則不能不容精矣。案笠亭者非陶人。數客浮梁。受聞陶冶之法而記之。故致此謬爾。然不可以寸瑕廢尺璧也。其人蓋隱君子。其高尚之素。就書中可概見已。參之與殿侯長卿君。嘗嗜風流。自琴詩書畫。至百技術。無不該通焉。來京師。護衛銅駝城。今茲四月任滿東歸。先是。官務之暇。屢召小人。辱問陶製事。時蒙渥遇。今也臨祖。聊表獻芹之志。以嚮所得陶說原本。艸寫一部而奉之。且略述陋見。併以錄呈云爾。文政庚辰夏四月粟田陶工木米謹識

「上與殿侯書」は木米の唯一の自叙傳であり、唯一の陶磁論であるが、それはさておき、これによつて見るに木米は與殿侯の知遇を蒙つて、屢、その第に出入したことが明瞭になる。紀州侯の招致、加州藩の招聘、これらは苟くも日本の陶器を語る者の普く知るところであるけれども、與殿侯の事は知る人が極めて稀である。これによつても木米版『陶說』の世に布くこと少きを思ふべきでは

あるまいか。

東海道五十三次、京から數へて十六驛目、江戸から數へて三十八驛目は三州の岡崎である。三州はこれ徳川氏發祥の地、故を以て同族松平氏の此國に封ぜらるゝもの二三のみでない。その一つに奥殿おくどのの松平氏がある。奥殿の地は岡崎から矢作川に近く、遠く沿うて北に走る足助街道を行くこと二里許の處。所謂大給松平氏の祖乗元より五代の孫眞次が寛永中こゝに封ぜられてから、乗次、乗成、乗眞、盈乘、乗祇、乗友、乗尹の諸代を経て乗羨のぶの代となるのである。木米の奥殿侯と稱する者はやがてこの乗羨であつて、彼は享和二年十二月家督を續いて、一萬六千石餘を領し、縫殿頭と稱し、朝散大夫に至り、その室は池田山城守政恭の娘であつた。乗羨の二條城木米のゆる銅駝城に在番となつたのは、文化十三年正月であつて、是れより屢、京の地に駐まつたのであつた。按ずるに二條城在番は大坂城在番をかぬる大御番頭の一役であつて、遠國職中の重職であるから、譜代大名乃至重代の家臣を以て之に充て、之を老中の支配下に置いて、すべて十二組の中二組づゝが各一年宛二條四月及び大坂八月の兩城を守

るのである。乗羨は初め三番組を率ゐたが、間もなく五番組に組替せられた。五番組は卯及び酉の年に二條城に在勤し、子及び午の年に大坂城に在勤するのであるから、さてこそ乗羨は文政二年己卯、京都に來つて、同三年庚辰、四月任を終へて、東歸せんとするのである。乗羨今度の在番は十一番組、戸田和泉守光弘と一緒にあつた。和泉は六千餘石の小名、しかも當時の京都所司代は乗羨の同族松平和泉守乗寛三州西尾城主であつたから、乗羨は十分羽振のよい位置にあつたと思はれる。

木米と乗羨との接觸は、しかしながら随分突飛なやうに思はれる。たとひ乗羨は木米の書いて居る如く風流を嗜むの人であつても、身在番の要職にありながら、官務の暇を利用して、陶工を召すといふ事は、尋常一様の風流ではない。木米乗羨の接觸は何人も恐らく一見意外とせぬ譯に行かぬであらう。併し乗羨の領地のある三河國と煎茶との關係を明かにすれば、乗羨のこの風流も亦釋然として氷解するやうに思はれる。

そも、煎茶は賣茶翁を以て開祖とする。賣茶一たびその通仙の法門を

京都に開いてから、都鄙共に翕然として之に傾いたが、就中三遠二州はその地煎茶の一中心たる名古屋に近い爲か、また遠州引佐ひなさの初山しよざんには賣茶の師化霖の居つた關係などもあるか、早く煎茶が流行して、八ッ橋賣茶の如き名人も出たのであつた。陶器の觀賞も従つて相應に發達したのであつて、後に明治に至つて永樂和全が岡崎に赴いた如きも大に理由のあることと思はれる。これ等の事を思へば、外の動機はさておき、今乘羨が京都在番を利用して、屢、木米を招き、陶に關して聽くところのあつたのも、不思議のやうで不思議でないのであるまいか。

乘羨の後は今大給子おきよ爵家となつて居る。われらは前田侯爵家で製陶圖を見たかつたと同時に、こゝで木米筆寫の『陶説』を見たいのである。そこで子爵家に尋ねたけれども、同家は幕末の頃信州田野口に移封せられ、明治初年廢藩置縣に際して先代が俄かに東京に出られた爲、古文書の類多くは散佚し、乘羨及び木米に關しても何等文獻の徵すべきものが無いといふ事である。

第十六章 文政五年以後

文政五年木米五十六歳である。文化六年以後十二三年間殆ど空欄であつた木米年表はまた此年から幾分賑かになる。われらは此章に於て文政十二年までを取扱ひ、天保はこれを晩年として別に一章を設けるつもりであるが、この文政五年以後の八年間の年表に著しいのは作品の多いことである。これは急に製作が多くなつたといふよりも、文政五年あたりから作るものに年曆を入れる習慣を生じたと見る方が至當であらう。金澤時代前後のものに銘に年曆を伴ふ者はまだ見たことが無い。晝には文化八年の落款あるものが世に知られて居るが、岩崎男爵家藏われらはその原本に接する機會がなく、眞贋を保證しかねる。文化十年の染付茶碗に至つては、これまた疑點を存するのと前にいふ通りである。しかもひとり甲戌即ち文化十一年の銘ある晝に至つては甚だ多いのであるが、これは何か本歌あつて後人の作つたものと覺し

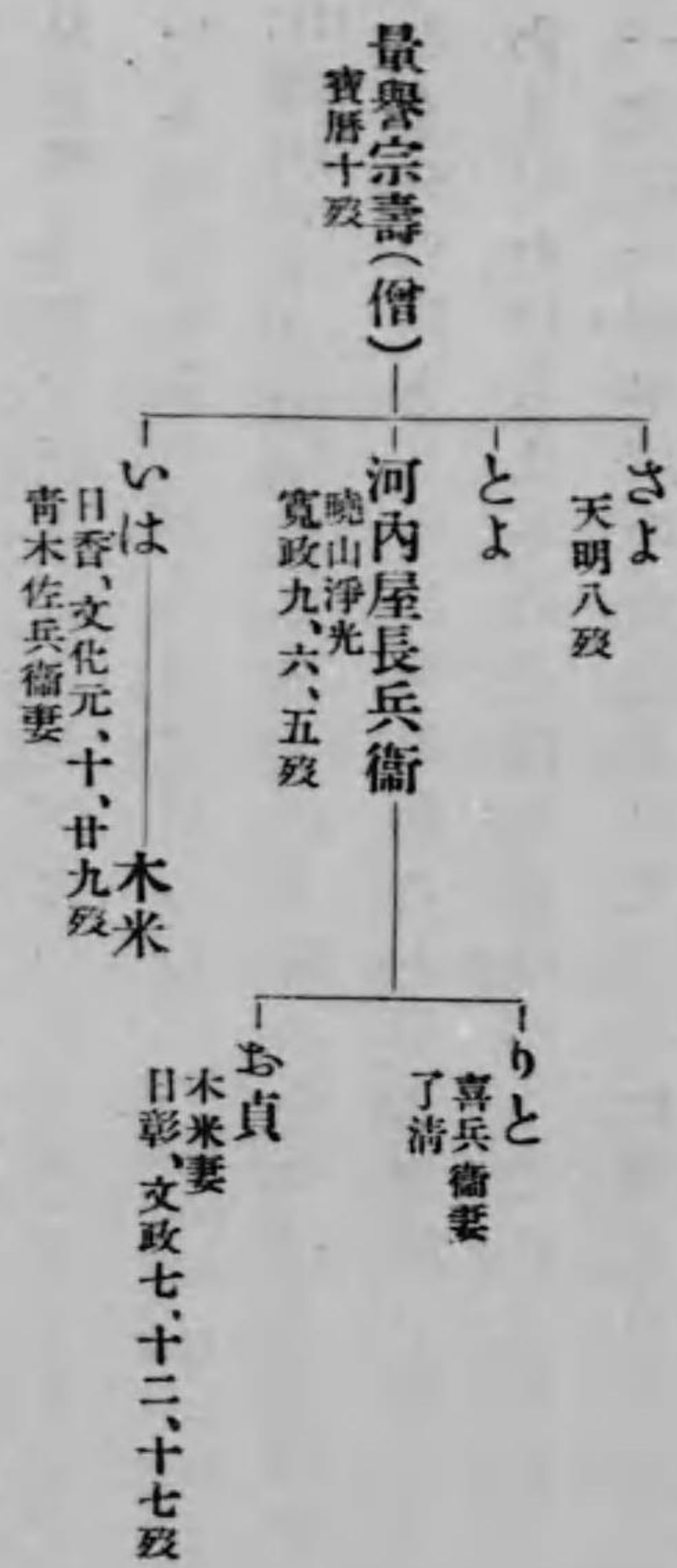
く、この年紀を伴ふものに限つて殆ど例外なく「爲葛城峰下伯龜雅生」といふ爲書きになつて居る。唯、一つわれらは文政元年の書銘ある香合の型の真正銘疑なきものを見たが、挿照これは製作といふよりも、全く別種のものとして考ふべきであるとするれば、文政五年前の作品にして年曆をもつものは殆ど無しといふも過言でない。ところが文政五年以後になると備中大原氏の山水圖を始めとして、毎年一二點は必ず畫か陶か陶の箱書かを年曆をもつものとして年表に記入することが出来る。思ふに木米は此年あたり自己の製作に對して始めて大いなる自信をもつ事が出来たのであらう。これ頗る注目すべき現象である。

翌文政六年四月六日には木米よりも前に『陶説』を鑿刻した葛西因是が歿したが、その享年は六十であつた。木米多少の感なき能はずであらう。江戸では立原翠軒が歿した年である。この年はまた木米と雲華竹田等との交通の中、その日まで明かに分つて居るのがあるのは愉快である。

文政七年には山陽の母梅麿女史が上京して、山陽の山紫水明處に宿り、四月

二十二日には木米も訪ね往いた。秋になつては青蓮院宮尊眞親王が隠れられた。しかも師走も半ばを過ぎて、木米忽ち妻を失ふの厄に會つたのは特記せねばならぬ。

茲に少しく内君の傳を説くに、内君名はお貞、その父を河内屋長兵衛といつた。長兵衛の何人なるかは知り難いが、この人は木米の母おいわの兄弟であるから、木米とお貞とは正しく世のいとこづきなるものである。



大雅の妻玉瀾の如き才女を例外として、普通の場合偉人豪傑と雖もその妻の性行は多く知られぬのであるが、お貞に就ても吾々は餘りに知ることが少い。

霞城の『九々鱗』には木米婢女に戯れてお貞嫉妬のほむらを燃やす事や、娘のお勝の縁組に就てお貞利慾に迷ふ事などを書いて居るが、由來小説家は脚色のために屢、事實を枉げることが多いから、必ずしも信ずべきでない。第一お勝といふ娘は木米夫妻の間に居らぬ。お勝はお貞の死した年僅かに二歳で、そのお貞に養はれたのは遙かに後の事である。尤も木米の手紙の中には夫妻喧嘩の仲裁を謝し、再びいさかひをせぬ印として品物を贈るといふ意味を書いたのがあるとは某氏の談であるが、われらはその手紙を見ぬから、これも保證の限りでない。蓋しお貞の一生は一面木屋の女將として日夜斡旋すると共に、一面仕事に熱中せる夫を且つ勵まし且つ慰むる事に力を傾けたと見なければならぬ。お貞が木米に嫁いたのは何年であつたか之を明かにすることがむづかしい。併し少くとも二十年は同棲したと考へねばならぬ。此間の氣苦勞は容易なものではなかつたであらう。たゞ夫の名人氣質に對する理解は年と共に進んだ筈である。いなもとくいと同志の間柄であつて見れば、これに對する同情の篤きは始めから言ふまでもない事であつたらう。而してお貞が何歳であつ

たにもせよ、今や木米妙技を以て天下に睥睨し、一人娘のお來はやうやく娘盛りに入らんとするを見つゝ死にゆくのであるから、まことに心名殘の惜しいことであつたであらう。木米もまたこの糟糠の妻の爲に色々醫藥の手を盡くした事と思はれる。當時京都の刀圭界には名ある者甚だ少くなかつたが、その筆頭は「典藥頭様」と文人社會で呼んだ福井丹波守であつて、勢ひ飛ぶ鳥も落ちんばかり「日本醫譜」の言葉を借れば、醫名一世を風靡し、上は王公大人より下從僕奴婢までその口に稱せざるなく、群侯の招致する者數を知らずといふ勢であつた。丹波守の傳は後に説くつもりであるが、木米はやく斯人に交を辱くし、時に手製の茶をもらふ事などあつたのであるから、今お貞も重き病に臥して、あはれ願はくば典藥頭様の投薬をと望むのであつた。

奉呈一翰候大寒難耐

候處御壯健御座被遊

大歡之至に奉存候先日

參上其節者明製

之層籠御惠被下木米
 生涯の得物ニ而茶寮
 之一絶ニ御座候此の程
 中は日夜愛玩に絶入申
 萬々奉謝候附而
 前晚淀の豪家より
 澱水車大の鮎の
 こんぶ巻を烹候與て
 遠方贈くれ申候
 取あへす試いゝし候處
 其烹よふ伊公の
 手段ニこさ候に付少々斗ニ
 候へ共爲御笑艸差上
 申度召あげ下され候へり

難有仕合奉存候

附而賤妻

此比中り

御持（マ）醫様之御枉駕

日夜朝暮御願申上候

御（マ）茲非御次手之節恐入候へ共

御詞被遊被下度奉願候頓首

御聞届被下候へり難有奉存候

木米

福井丹波守様御取次

目附もなく年もわからぬけれどもまづ此時のものと解すべきであらう。
京都福井貞一氏の蔵に係る氏は丹波守五代の孫。丹波守は木米の此狀に接して取るものも取り敢へず
 兩掛持たせて黒門元誓願寺南のわが宿を立ち出て、大和橋のほとりへ駈け
 つけたであらうけれども、天壽限あり、名醫の術も遂にその効を奏せず、世間は

此狀

越歳迎春のいとなみに忙しき十二月十七日といふ日お貞は二つの眼を閉ぢたのである。木米時に年五十八。お貞の年は分らぬ。墓はいま鳥邊山の木米の墓の側にあつて、表面に「陶工木米妻墓」と書し、左側面に「法名本實院貞光日彰信女、右側面に「文政七年歳在甲申十二月十七日没」と刻してある。細長い五輪塔總高二尺九寸許の形のよいのは木米の案に成るからであらう。挿圖 参照

お貞歿して後二年周吉が生れた。お來が生れて二十年に垂んとして始めて木米は男兒を得たのであつて、その母は妾のおまさである。おまさははじめ木米の下婢であつたと傳へるが、或はさうかも知れない。この女は文政十二年十月二十九日に歿したのであるが、これよりさき同月八日嬰兒妙現の歿して居るのによつて考ふれば、その病は或は今日いふところの産褥熱などにもやと思はれる。それは兎に角周吉を得た木米の喜びは非常なものであつたと見なければならぬ。世間傳ふるところによれば「周吉」の名は山陽の命ずる所であつて、その命名の辭を書きつけた山陽の書幅は、木米歿後お來が所持して居たといふが、今われらはその所在を突留めることが出来ない。従つて

周吉の名の意味を知ることが出来ぬ。或はこの年は木米六十歳であつて暦の六十干支が一周し終るところであるから、周の字を選んだかとも想像せられる。例の霞城の「九々鱗」には此時の事を面白く敘して居る。即ち祝ひの席には、穎川、寶山、棕隱、山陽、米平、お來、大坂の骨董商道庄の外竹田も、或は在つたかといひ、また別室には粟田口の善法の手取釜のうつし及び人物各、百五十を書ける群仙八角鉢一對など、木米の新作を陳列して見せ、宴終るや木米かねて用意の丹頂鶴一番を知恩院樓門前に携へゆき、自作の陶製小短冊を脚に結びつけて、我兒の命長かれと放つたなどいふのであるが、この中には頷かるゝ節もあれば頷き難い節もある。穎川はこれより先十五年に歿したのであつて、寶山も既に文藏の代でなく十五代熊之助の代である。竹田は確かに此夏京に入つて居るから、周吉の誕生が若し其頃ならば正に想像の如く祝ひの席に在つたかも知らぬ。

周吉の誕生によつて木米の爲に記念すべき文政九年は、山陽の爲には日本外史を完成した記念の年であり、道八の爲には仁和寺宮より仁阿彌の號を賜

つた記念の年である。さうして江戸では龜田鵬齋が七十五歳で死んで居る。鵬齋と木米との交渉は世間始ど之を口にするものがなく、われらもまだ之を確かめることが出来ぬが、『九々鱗』には一つの挿話を載せて居る。鵬齋京に遊んで或日本米を訪ふや、木米は鵬齋に揮毫を請うた。鵬齋健筆を走らすもの無慮百餘枚、木米は之に對して一分銀八十枚を贈つたが、鵬齋もさるもの、或日我も江戸兒の意氣を示さんと更に木米を訪ひ、急須一箇の謝禮として大判五枚を出すに、木米は事もなげたる面持なので、鵬齋いたく機嫌を損じたといふのである。

文政十年は木米還暦の年である。木米はそれこそ山陽でも招いて、愛兒の頭を撫てつゝ、劍菱など傾けたであらうと想像せられるけれども、こゝにもその誕生日が何月何日であるかさへ手がかりか無い。山陽が『陶説』の序を書いたのは此年の冬である。山陽の母梅颯が再び杏坪と相携へて上京したのも此年である。保全が紀州に赴いたのも此年である。

翌十一年は別に記すこともないが、十二年には木米更に新しい悲哀に會し

た。人生の禍福吉凶は眞に糾はれたる一條の繩の如しである。新しい悲哀とは妾のおまさの死である。而してこれは既に前に記したから轉じて木米の晩年を見よう。

第十七章 晩年

こゝに晩年といふのは、天保元年から木米の終焉の年天保四年までを指すのであるが、餘り面白い事はわかつて居ない。たゞ引續いて人の死のみを記さねばならぬのは甚だ心外である。木米今は妻も妾もない身であるのに、天保二年には娘のお來の主人にして、みづからの爲には恩人であり知己である所の殿村氏(米平)の訃に接した。これが九月の事で、それからちやうど一年経つて三年の八月には久太が歿した。久太の死によつて木米の窯場は一時火が消えたやうであつた事と思ふ。ところが不幸はまだ、これに止まらぬ。同じ九月には山陽が歿し、また青蓮院宮尊寶親王が他界せられた。木米たる

もの茫然自失せざらんとするも得なかつたであらう。果然木米の元氣はこの頃から著しく沮喪して、痼疾は屢、彼を惱すに至つた。彼の家族は今お來と周吉と周吉の次に生れたい鉢の三人のみとなつた。(お來は殿村氏歿後は京に歸つて木米の許にあつたと思はれる。)お貞の居る頃、おまさの居る頃には尙ほ家族は茶屋商賣を續けて行つたのであらうが、おまさ歿後は當然この商賣を廢めなければならなかつたと思はれる。木米は天保三年秋宅替をした。これは然るべき茶屋商賣の人を見つけて大和橋の家を譲つて、何處かへ移つたのである。それが或は今の赤萬膏藥の筋向ひあたりであつたかも知らぬ。木米の家が文政の末頃までも茶屋商賣をして居たか否かは疑ふ人もあるかも知らぬけれども、われらは續けて居たと考へたい。大坂の花月庵はお貞の歿する頃から木米の一知己となつた人であるが、この人の子が使として木米の家を訪ねる毎にいやな思ひをしたといふ話がある。それは木米の家の女中などが人の足音を聞きつけて出て見ると、遊び客ではなく、花月庵の使であるのでよい顔をしなかつた爲であるとは、今の花月庵老人が先代の直話を受

賣りの話である。

われは、この晩年の中の最晩年の一年(天保三年)に於ける木米の生活を窺ふに、殿村氏所藏の木米の手紙ほど有力な資料をもたぬ。て、今その全體を掲げてこれを剖析もし、綜合もして見たいと思ふ。

殿村氏の示された手紙は都合十八通ある。このうち一通は宛名がちがひ、一通は日附と宛名との部分が失はれて居るから、残り十六通を取つて、日附の通りに配列して見る。さうして内容を註記して見る。

- (一) 三月 四日附 大火見舞の事、大佛開帳太閤遺物觀覽並に野村氏子獅子興行の事、青蓮院宮拜領海苔楯分並にあぶりやうの事。
- (二) 五月 九日附 有馬侯歸府の事、富田親類不幸の事、北野百蒸會の爲、小茶碗出來の事、宇治茶の事。
- (三) 六月 十日附 關東御茶壺出發、宇治の使歸らざる事。
- (四) 六月十五日附 安南人形手茶碗交換、自作急須風爐割製の事、棚珂秘閣の事、茶を贈る事。
- (五) 七月 七日附 琵琶の事、淀川舟遊の事、五條坂窯入の事。
- (六) 七月廿七日附 禁紅急須出來、その磨きやうの事、風爐出來期限の事、法會日取の事。
- (七) 九月 四日附 宅替の事、先君一周忌贈物の事、大坂田中屋銅爐の事。

- (八) 九月三十日附 法會の事、來駕を待つ事。
 - (九) 十月 三日附 清水觀楓の事、煎茶一沸且は茶碗見の爲枉駕を待つ事。
 - (十) 十月 四日附 持病の爲南禪寺行見合せの事、青蓮院宮葬儀の事。
 - (十一) 十月 四日附 時雨の句の事、宇治茶の事、肉包の事、茶進上の事。
 - (十二) 十月 六日附 風邪見舞の事、提籠入風爐再遊の事、宇治茶の事。
 - (十三) 十月 九日附 歸坂を賀する事、風氣再發の事、小鯛鮓の事。
 - (十四) 十一月十四日附 掛物の事、賣茶翁茶碗の事、雜華津詠歌の事、御買取の品
 - (十五) 十一月廿三日附 有馬侯の事、長造の事、老身不快の事、交易の風爐の事、安
 - (十六) 十二月十六日附 包糖抽餅の事、注文陶器の事、老身執業不如意の事、京煎
- 以上十六通、その宛名を分類して見ると、桂陰君六通、村厚明君五通、村は郷に殿厚明君三通、殿村君、殿村先生、殿村桂陰君各一通となる。而してその同一人であることは言ふまでもない。

しかし三月を起點として十二月に至る右の配列は、順序として果して誤が無いかは十分吟味を要する。まづ米平の死は天保二年九月二十九日である

から、此等の手紙が同日後木米の死の日天保四年五月十五日まで約そ一年八箇月間のものである事は論を俟たぬ。たゞ三月及び五月の狀は天保三年でもあり得、四年でもあり得る。また九月末から十二月までの狀は天保二年でもあり得、三年でもあり得る。これが困るのである。ところが三月の狀は太閤遺物觀覽云々とあるので、三年であることが明白になり、此時、景文豊彦が豊公が廣福王府(妙法院)藏版「豊公遺寶圖略」遺寶全部を寫したのあつて、此書の出版も亦天保三年である。九月以後の狀も、内容の性質上はた六七月の狀との聯絡上、いづれも三年のものであると考へられ、若し誤つて二年のものが混じて居るとしても、さして意に介するに足らぬのであるが、唯、一つ聊か所屬を決しかねると同時に、間違つて困るものとして、讀者と共に考究して見たいのは五月の狀である。此狀が若し四年のものとするならば、或は絶筆でないとも限らぬ。三年のものとするも、北野煎茶百烹會の計畫は從來全く隠れたる一事實であるから、やはり特筆大書するの價値がある。

この狀の第一の手がしりは「富田御親類家御不幸之由」といふ一句であらう。もし此事件にして闡明せらるれば、議論の餘地は無いのであるけれども、今日

までのところ、殿村氏に之をたづぬる機会がないので、此一句は謎として封ぜられて居る。そこで第二の手がかりとしては當然われらは「名花満開之節御噂に五月五日六日頃有馬侯御歸府に付伏見迄者御出駕之由」の一句を見附けねばならぬ。有馬侯とは誰であるか。蓋し嘗て欽古堂龜祐が招聘せられた三田竈の所在地攝津國有馬郡三田に陣地を有し、三萬六千石を食んだ九鬼氏であらう。九鬼氏の當主は長門守隆國と云つて、寛政十年二月家督を襲いだ人であつたが、諸侯に金を貸して遊んで居たといふ殿村氏と九鬼氏との間には如何なる關係があつたのであらうか。それはさておき九鬼氏の參觀交替は「天保武鑑」によれば丑卯巳未酉亥の六月參府、子寅辰午申戌の六月御暇となつて居る。そこで天保三年は辰の年であり天保四年は巳の年であるから、之によつて木米五月の狀は何れの年に屬すべきか容易に知ることが出来る筈であるのに、こゝにも一つ難關がある。それは木米の用ひた「歸府」なる文字の意味が、參府御暇兩様に此場合取られさうに思はれる爲である。併し普通歸の字のある以上御暇入部と見て差支ないであらう。即ち恐らく此狀は天保

三年のものであらう。若しかう解釋すれば宇治茶との關係も都合よく附くのであつて、思ふに殿村氏は九鬼氏の入部を、宇治まで出迎へることを止めて、大坂に待ち受け、九鬼氏が休息または宿泊するを待ち受けて宇治の新茗を獻じようとしたのであるまいか。

かくて五月の狀が三年のものとなれば、前記十六通の配列はあれでよい事になる。そこで重複する嫌ひもあるが、更めてこの手紙に縋つて他の方面の材料をも幾分加へつゝ、木米の死前一年の生活を想像して見ると次のやうな事になる。

木米天保三年は六十六歳になつた。我慢の強い男ではあるけれども、寄る年浪には勝たれず、兎もすれば意氣銷沈の氣味である。それでも仕事は廢せず、二月三日には東都鷺先生の爲に細かな山水圖を半折に畫いて、興に乗じて宋、范仲淹の鬪茶歌を丁寧に畫上に書き添へ、世間は大佛開帳、太閤遺物觀覽と騒ぐ花の頃にも子母方爐等幾多の陶器を作つたが、さても残念なのは北野百烹會の中止である。木米は昨秋米平の歿する頃ふと思ひ立つて、かの賣茶翁

が「松籟頻聞城北野、茶煙輕颺洛西雲」など口吟しながら屢々煙を立てた北野の森にわれも一生の思ひ出煎茶百烹會を催さんものと、小茶碗六百用意にかゝつたのであるが、好事魔多し、さて出来上つて見れば思はくとは似も似ぬまづい出来である。何事もよい加減では済まされぬ性として、今度は懶い體を起して隣家と談合し、三月の末から五月の初にかけてまた六百碗作り直し、ほつと一息ついたものの老身の倦怠は之が爲一層甚しくなる。斯かる時は書を讀み、時に友を會して煎茶一沸を試みるも心慰む業であるけれども、わけて愉快なのは古器を鑑してその幽韻に憧るゝ事である。観るは固より可し、併し持つは更に楽しい。年來垂涎措かなかつた殿村氏所藏の安南人形手茶碗二種を思ひ切つて交換してほしいと申込んで見るに、案ずるより生むが易く同意とある。さて六月の日の永さ、大坂より上る飛脚の待遠ささ。

七月に入つて珍らしく大坂に遊ぶ。澱水に舟を横へて茶を煮れば心娛む。盆後は此年京都は風が吹いて雨が降らず、火の用心の聲町々に聞えて、交換一件の出し物に添へるべき自製品の中、金襴手の急須は粟田の本窯で早く出来

上つたけれども、つい裏の窯で出来る筈であつた風爐は却つて七月の末になつても出来ぬ。七月の末からは引越騒ぎ、その騒ぎの中に年來股肱と頼んだ久太の死んだのは愈々騒ぎを大きくする。九月の初にやうく物取片附けて、二日ごろには家の中に輓轡も立つたが、その二十三日にはまた山陽が歿するといふ騒ぎ。

九月二十八日は米平の一周忌で、大坂から殿厚明が上京する。米平の未亡人木米の家、出位、清教、信女、天保十年六月廿九日とあるは此人であらう。も上京して列席したであらうが、木米も親戚として列席する。寺は木米の粟田の窯と目と鼻の間なる南禪寺の塔頭慈聖院であつて、この禪師、木米の所謂安達入道は眼光鋭く、木米を睨めてさあ早く窯を焚かぬかと急ぎ立てる程の煎茶仲間であり、日外大坂から歸つて扣舷泛棹の清遊を、木米物語るに、さも羨ましげに感じ入つたのも此僧である。

殿厚明は十月に入つても尙木屋町の別荘に滞在して、二日には木米と相携へて清水觀楓に出かけた。ことしは閏が十一月にゐるのだから季節の早い

爲紅葉にはまだ早かつたが、清楚な料理に二人は鼓舌する。此夜は青蓮院宮御葬儀。殿厚明は例の安達入道をたよつて拜見に出かけたが、木米は持病でこれに伴はず、ひとり夜着引きかぶつて、宮から海苔を頂戴して殿厚明に裾別したのも、つい此の春の事であつたのにと涙は新しく襟を傳つたことであらう。安達入道は木米が顔を見せぬのを氣遣つて、其夜すぐに見舞つたが、心配する程の事もなく、纏て枕を上げて、五日には今度はまだ入れ代りに風を引き大坂へも歸りかねて居る殿厚明の爲に提籠入風爐の文字を鑄り、その夜十二過ぎから二度窯に入れなどしたが、厚明の歸坂するといふ九日の前夜からまたぶり返して、船暈の如く胸若しく、折角貰つた紀州名産小鯛の鮮も食ふや食はずに居る。

十一月に入つても健康は十分に回復しない。月半ば頃殿厚明が上京して賣茶翁手製の樂茶碗を見せて呉れて、觀賞時を過したが、鑑賞といへば此より先き八月末か九月初大坂の花月庵が古銅の風爐を江戸から持歸つてその網を作るべく木米に預けて行つたやうな事もある。此網は木米確かに作つた。

その出来上つたのは九月新居に轆轤が立つた時か或は殿厚明の風爐を再窯に入れた頃でもあらう。

十一月二十三日の状には、野樸未快老身瘦地茗園脱去色香かなしき事に候」といひ更に十二月十六日の状には「愚米老身に及此四五年以前と者苦絶入候」といひ衰への様子が眼に見えるやうに思はれる。例の交易の風爐は閏月三四日までには焼立てると一旦通知したもののなか／＼思ふやうに運ばず、次の手紙では更に年内中には覺束なく來春正月中旬以後に焼くことにすると言つて居る。これではいくら安達入道が眼を光らせても仕方がないのである。唯、その中にも煎茶の一儀は一日も忘れ難く、京師斯道の流行に伴うて訪ひ來る人も多く、旁病を忘れる日も多かつたであらうが、それらの人々と別途にこの頃に至つて眞葛長道と關係を結んだのは大に注目し値する。而して此事には殿原明が間に立つて居る。殿原明ばかりでなく、有馬侯も關係があるらしく見えるのは面白い。たゞ文辭簡にして十分その事情を明かにし難いのは惜しいけれども、要するに久太は歿して、嗣周吉はまだ幼い。わが身の老羸

を思へば米法陶冶の事甚だ憂ふべきものがある。こゝに有意か偶然か長造を得てこれを「仕込」んでわが道の後継者たらしめんと決心したものと見える。此十二月の状に有馬侯が再び現はれるのは、五月の状を天保三年のものと解する上に愈好都合である。何故ならば侯が参府して江戸に在るとするよりも、五月郷國に就いて十二月尙ほ其處に在ると考へる方が一層妥當らしく思はれるからである。

次に吾等はいよゝ殿村氏宛の木米の状を列擧する事にする。この澤山の手紙の字詰を一々原本通りにするのは徒らに頁を加へるに似て居るといふ評も出るかも知らぬが、われらは之によつて少しでも原本の面影を傳へようとするのである。木米の手紙は逸早く松風氏が心附かれたやうに「扱又」て押して行く所に大なる特色がある。讀者宜しく熟讀玩味すべきである。文中圈點を施したのは勿論著者のさかしらであつて原文に見えるのではない。

(一)

春宵一刻千金

之時節ニ及候

御平安御清勝御座

被遊候や珍重之御儀

奉存候彼此繁多

御無禮申上御免可被下候

扱又當節前者

其御地大火事之由

承方角等承合し候處

貴宅邊之由乍併

御驚與奉存候乍序

御見舞申上候

扱又今春者大佛殿

開帳御宮庭前等

拜見又太閤遺物

茶器之類監覽

可成之由ニ候扱又

木米

野村氏子獅興行を
仲句可成候哉扱又
嵐山之櫻花右兩時
向節滿開與被存候
此比上京之程奉御待候
猶及時山川之
雅談承度頓首
三月四日

木米

桂陰君几下
再白淺草苔二葉
青蓮院御宮様より頂戴
仕少シニ候得共至而極品
故進上申候表より少しあぬり

二九四

まやうゆう附又あぬり
其後裏よりあぬり
召上られ候へも風味
清越也

(三)

當月八日出之御書狀同
九日朝五ツ時當着仕
早々拜讀仕候梅雨鬱
陶之天色候處無御障
御清福御座被遊珍重之
御儀奉存候名花滿開
之節御噂に五月五日六日
比者有馬侯御歸府ニ付
伏水迄者何御出駕之由

第十七章 晩年

一九五

其心得ニ存居候處無據御用
 御座被入候由將又先比承
 候得者富田御親類家
 御不幸之由ニ而御繁用
 之由萬事奉察候然者野子事
 當○春○初○旬○北○野○天○神○
 之○森○ニ○而○煎○茶○百○烹○仕○度○
 舊秋より存付候處小茶碗
 數六百許出來間違之
 筋在之三月廿日より當五月
 四日迄隣家與申合手製ニ
 拵立十分之事ハ拙作故無之
 候得共吾思所者無事
 出來申候日夜此一事ニ

取掛り老身癡愁傷之
 至奉存候

第一用事煎茶之一段
 今日九日關東御用御茶壺
 京師御發足也然者兎道
 茶師新茗賣出之事
 日限未申參候龜茶ニ者
 ぬけ物有之候得共鷹類ハ
 拔賣者一切不仕候賣出日限
 有之候間出口走リ御書狀ニ
 急々御入用之由故御狀到來
 其場より彼江口與申人
 元宇治茶師也此仁
 呼ニ遣御狀趣相樂候處

木 米

私病跡を見請致無事承知
吳私方之着雨具一夜泊に宇治に
茶佳品之物吟味早々罷越候也
然ル所同日八半時御書狀御下部
自參拜見仕候處有馬候

明十日京回被遊兩本願寺

東山御巡見之由日限一日之
手違ニ而定而御困與奉存候

御下部之仁

悉しからぬ多用之顔色見積

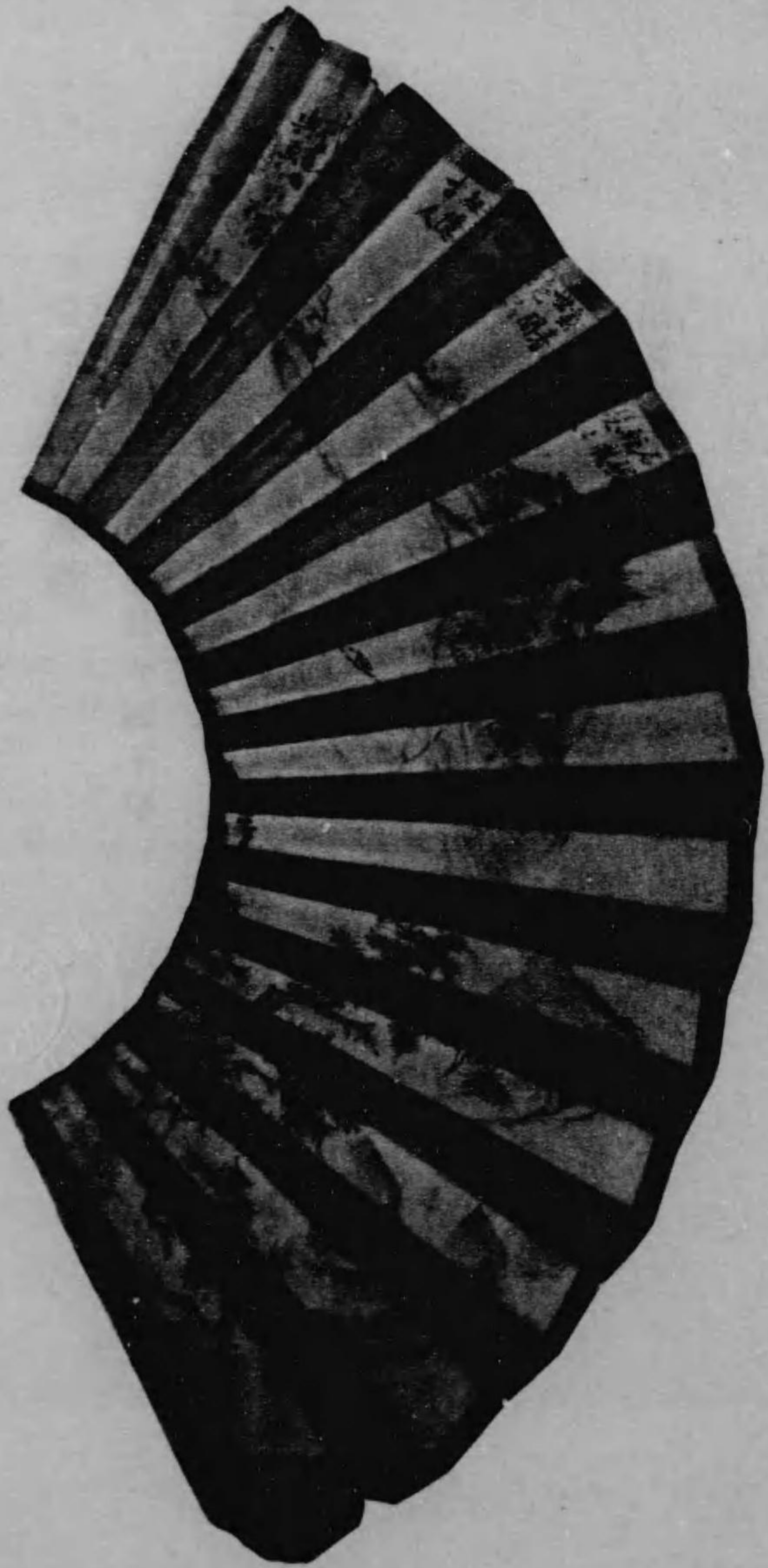
ニ而明十日右江口兔道より

歸り次第新茗相改伏見日の

人仕立爲持可申之趣引(二字不明)申入候

右用談如斯候此餘者

二九八



宇治圖扇面

後便立談ニ及頓首

五月九日

木米

桂陰君

(三)

昨日出口走之御狀到來

時刻不後茶事之鑑定者

不恐風雨兔道に遣

前晚一夜の兔路滯留

今日五ツ半時ニの歸京之

約束ニ而差遣候處於今歸不申

察所昨日夜來風雨

茶壺口切ニ而しめ受

次第也又の昨九日關東

第十七章 晚 年

木米

御茶壺發故賣出日限
有之や龜茶先日來
宇治在方方買請候得共
彼初眞白折鷹類者
關東御茶詰之餘類也
茶師仲間賣出日限
未定候ニ附此方便之仁
不歸候也參リ候仁茶事ニ而
至而疏者故無女東候
宇治ニ而相勤持歸候也
察不當候今晚明朝
之内使歸次第約束
達上可申候如此候頓首
六月十日

1109

木米

桂陰君

(四)

此比者貴芳御贈
被下難有拜誦仕候
梅雨未晴候無御障
御莊建御座被遊候や
珍重之御儀奉存候
然者先日者疏文
御返書被下難有
熟讀仕候今般者
登京漸時御事ニ而
御歸宅御忌慮之
御供事ニ而御開御入

第十七章 晚 年

11011

木 米

被遊奉察候乍併

御忌中無滯相濟

御安意御事奉存候

然者此比之御書而

交易之一件御聞届被下

忝奉謝候安南人形出

茶碗兩種御讓被下候段

千萬辱 木米生涯

珍愛仕候是ニ而交易之

一件相濟風韻一事*

窟場空破屋_也

一、洗仕候而得片玉分

然_レ吉右衛門様當

十四日前ニ者御上京之旨

其節之御狀有之

其砌右二碗之品

御携御上被下候與存候所

此御方_茂御用向出來ニ而

御上京延引ニ及

御通達有之外心之至奉存候

扱亦交易此方出物之外

風爐急須御所望

御申越被下拙陶候得共

不及代金進上之品_{木米}

用實意得意品を

燒立差上申候乍併

急須一事_ハ本窑燒立

物故今暫延引ニ及候

第十七章 晚 年

風爐一事者思召寄之
 繪圖を可遣候急燒立
 差上申候風爐當時裏竈ニ而
 燒申候急須東蹴揚竈故
 延引及候也右御承知
 可被下候然者此書狀着
 次第安南人形手茶碗
 兩種米吉様御渡被下
 急飛脚御登被下候様
 奉願候兩品之器
 左右ニ相置茶を吞吞
 於へ物品類一日をやく
 拵差上申候無遲滯品物
 御登被下義奉願候

扱又欄珂祕閣
 出來故飛脚差上申候
 御落掌奉願候
 扱又兎道より今日
 極品之茶被下當着仕候
 早々試其趣無之
 以茲見候處今年者
 時氣惡哉未得
 香味色之茶候
 少し斗奉贈候
 御試可被遊候此
 餘の後使御清談
 承度如此候頓首
 六月十五日

木米

木米

110*

殿村君

(五)

呈上一書申候大暑
 無御障御莊建御座
 被遊御座大歡之至奉存候
 今般者不斗參上仕拜
 鳳眼大慶不斜奉存候
 琵琶一事金子御渡
 被遣一落に及夏天
 雷雨一洗塵世野子大慶仕候
 扱又澱水ニ横舟
 清風煎茶事蘇軾
 漢武幽意一興奉謝候

猶又向明月萬謝申上候

煎茶具の急々御調進申上候

今朝安達氏ニ面會申候

萬事清談申候處(悦力)説絶入被申候

五條坂窟入之事

大承知に而私に嚴重

御渡候也無程殘

暑ニ及候御大切御凌

被遊度義奉希右禮

旁如此御座候頓首

七月七日

木米

郵厚明君

(六)

第十七章 晚年

110*

木 米

當二十三日者中元
 之御祝儀御翰被下
 難有拜誦仕候三伏
 初秋ニ及無雨暑氣
 甚無御障御莊建
 御座被遊候也大歡之
 至奉存候然者交易
 之急須漸一顆
 出來礬紅金花
 燒之茶銚也又風爐者
 八月五日迄ニ燒立差上
 申候京師盆後者
 日夜無雨風吹候ニ附
 町々火之用心觸ニ而

三〇八

少。し。之。烟。立。登。候。事。
 難。成。ニ。附。延。引。及。候
 御免可被下候乍併
 今十五日を過候得者
 桂花素馨十分之
 時節に及候扱又
 此比慈聖院禪師
 面會申候ニ附當八月廿六日
 御上京被遊御法會御勤
 之由申候處八月廿五日
 廿六日
 鴻池於慈聖院
 法事有之廿七日より
 後日者差控りへ無之由
 其御控もり可被遊候

第十七章 晩 年

二〇九

木米

扱此急須金色、燒立、古色、有之候間、其ま、差上申候、金色、光輝、

御望に候得者、研ト粉ヲ

指に付力にほかせみ、

被遊候得者、光澤、溫純、乍併、

きらくとして、不宜與奉存候

に附寄出之ま、差上申候也

猶萬事後便申上度頓首

七月廿七日

木米

殿厚明君

(七)

奉呈一翰候桂秋

佳節御安鉢御座

被遊珍重之御儀奉存候

誠初秋後者存外

御無禮仕御免可被下候野子

無停事に附宅替仕

七月下旬より此比に至

漸雜具片附申困入申候

御推察可被下候然者

其節者南紀國産

西瓜糖漬御惠被下忝

賞味絶入御禮申上候

扱又先君一周忌之

爲御志膏燭御贈被下

辱御禮申上候其比より

第十七章 晩年

木 米

靈前に手向申度奥存
松茸を吟味候得共
今年者如何事ら
不得之漸今日初而
得兩三顆輕少之
至ニ候得共進上度御次手
御靈前に御備奉願候
扱又兼而御約束之
煎茶具延引ニ及
兩三日。前當店に。轉。
轉相立申候間當十五六日
迄ニ風爐手製可差上候
京師各煎茶流行
乍併今年宇治茶之

三三

出來甚不宜五月

より今至醍醐甘露之

味與被存候茶無之茶友

打寄候へ。此。こ。あ。し。の。ま。に。候

其御地田。中。屋。先。比。江。戸。よ。り。

歸坂。申得古製之銅爐

持歸其節拙家に風爐の

網をこしらへニ參り御座候

君今月下旬御上京

之事折指其日を

相待申候猶萬々拜

尊顏清談承度

頓首頓首

九月四日

第十七章 晩 年

三三

木米

木米

村厚明君几下

(八)

花翰辱拜見仕候

如仰今日と秋鬱陶

之天氣候昨日と

御法會無滯相濟

大慶奉存候其上御馳走

相成忝御禮申上候今朝

早々御禮旁參上可申之所

早朝より大坂之仁被參

今ニ長談ニ及失禮申

候所御書面に預り恐入候

扱又今日の細雨終日

御他行如何と奉存候

立君若芳屋(芳カ)ニ候得共

御光駕被下候得者辱奉存候

正八ッ後御入來被下候得者

難有今朝參上此由

申上度之所客來ニ而

遅刻仕候猶萬事ハ

御面會御禮申上候頓首

九月三十日

(裏)

木米

桂陰君几下

(九)

昨日ハ御招被下候ニ附

不斗清水寺之青楓

第十七章 晩年

木 米

一覽仕其上清楚之

御料理被下難有奉謝候

今月南禪寺に御越被遊

御出掛御立寄被下候由

忝奉存候彼宇治竹田製

之煎茶未口切不申候

何とぞ御光來之上

一沸煎し試申度候

御入來之刻限何時ニ而

くるしから寸候間御立寄被下度

只煎茶試迄ニ而御かはい不申

菓子迄を不自由之事ニ候

又煎茶之小茶碗一種

御目ニ掛度品有之迄

青蓮院。御。養院。慈。院。駿。走

承。候。處。聖。院。走。安。達。氏。

御免可被下候。前上候。上候。

差。無。止。失。禮。申。候。

不。參。に。及。恐。入。候。持。病。

之。事。御。約。束。申。上。候。

昨。夕。南。禪。寺。行。

(十)

桂。陰。君。几。下。

木。米。

(三)

十月三日

承。耳。頓。首。

拜。鳳。眼。御。交。話。

御。座。候。後。刻。

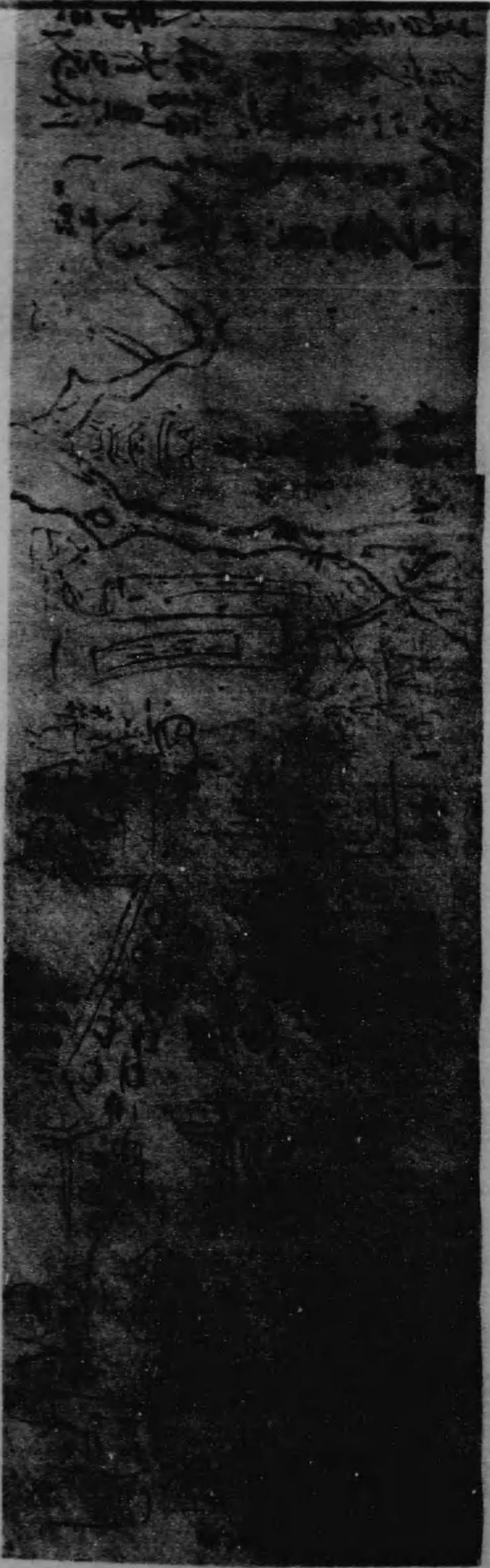
古。書。目。に。於。て。何。と。云。ふ。事。亦。有。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。

其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。

其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。

其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。

其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。其。書。目。別。に。記。載。せ。り。



廣

尺

木 米

一覽仕其上清楚之

御料理被下難有奉謝候

今月南禪寺に御越被遊

御出掛御立寄被下候由

忝奉存候彼宇治竹田製

之煎茶未口切不申候

何とぞ御光來之上

一沸煎し試申度候

御入來之刻限何時ニ而を

くるしから寸候間御立寄被下度

只煎茶試迄ニ而御かはい不申

菓子迄を不自由之事ニ候

又煎茶之小茶碗一種

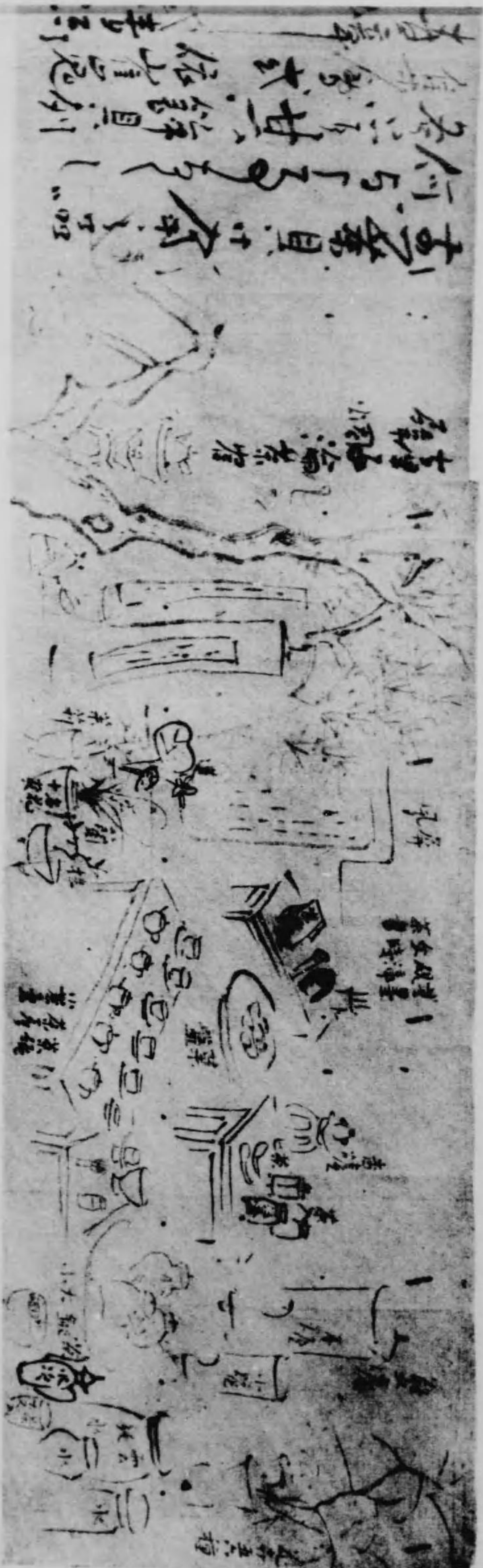
御目ニ掛度品有之迄

露光量違いの為重複撮影

木 米

二一六

一覽仕其上清楚之
 御料理被下難有奉謝候
 今月南禪寺に御越被遊
 御出掛御立寄被下候由
 忝奉存候彼宇治竹田製
 之煎茶未口切不申候
 何とぎ御光來之上
 一沸煎し試申度候
 御入來之刻限何時ニ而を
 くるしから寸候間御立寄被下度
 只煎茶試迄ニ而御かはい不申
 菓子迄を不自由之事ニ候
 又煎茶之小茶碗一種
 御目ニ掛度品有之迄



廣 尺

御座候尙後刻

拜鳳眼御立話

承耳頓首

十月三日

(裏に)

木米

桂陰君几下

(十)

昨夕南禪寺行

之事御約束申上候而

不參に及恐入候持病

差起無止失禮申上候

御免可被下候前晩安達氏ニ

承候處慈聖院馳走

青蓮院宮御葬儀

第十七章 晩年

木米

都合宜御拜見被遊候由
大慶奉存候扱又

昨日の御光駕忝奉謝候
甚不興ニ而愧入候

事に候御免可被下候
今日こ如何被遊候や

御間暇御入せ候得者
鴨、川、一、越、ニ、御、光、來、

奉願候右御斷
旁如斯候頓首頓首

十月四日
(裏に)

桂陰君几下
(十一)

木米

御使被下御狀拜讀仕候
時雨の御句御製先き
面白ニ絶入候扱又
兔道茶之事心易
御事に候

竹田ニ而初真

山上ニ而舞鶴

河村ニ而清風

今朝中立賣室町小川賀進方々

山上茶師の方之手紙

添書取ニ遣申候遣歸次第

御返事申上候

扱又浪花名産之

肉包一雙御惠被下

第十七章 晩年

木 米

賞味絶申候宜御禮
申上候頓首

十月四日

初真之茶少許

進上只今そくニ御入

御試被下度御願申候

村厚明君(裏に)几下 木米

(十二)

御不快ニ而今夕御下坂

御延引被遊候由

一昨晚御顔色不靈

風邪氣入不申與

不案(心)心に存候随分

御大切奉願候只今

御見舞參上可申與存

候處猶後刻

拜尊顔暫事

御立談承度奉存候

不知今日御歸郷と

存前、晚、彼、提、籠、入、

風、爐、昨、日、如、命、文、字、

鑄、申、夜、前、九、ツ、過、

再、竈、入、燒、立、御歸宅御持

被遊候間ニ合手都合

煎茶兎道書狀相届

をくを手明之御召遣御座候へ

宇治に被遣之程御頼申上候

明日おれそ私方より遣候人足

木米

有之一種、妙々、奇々、之、

茶、取出、シ、今朝參

候約束申候間參次第

掛目申候猶く^カしく^ハ

後刻拜眉之上

十月六日

木米

(裏に) 邸厚明君几下

(十三)

御快氣之由大慶之

至奉存候今日御下坂

之由被仰天氣十分

之^カ迦晴淀、八幡之邊

自然之紅葉船中

二三

一、沸之、茶、御試被遊

候與甚御うらやましく

奉存候野子事^ニ

昨日七ツ時分より風氣、

再、發、仕、前、晚、^ニ、大、苦、候、

今、朝、未、舟、^ニ、よ、い、候、よ、ふ、^ニ、而、

む、^ハ、^カ、^ク、^ル、^シ、^ク、候處只今者

南紀名産之小鯛鮮

御惠被下賞味仕候

宜御禮申上候少^ニ而茂

惡寒さ^リ候得者

後刻御見立申上候

を^シを^シ此^クを^シい^ハあ^シく候得^ハ

蒙御免不參仕候

第十七章 晩 年

二三

木米

左候への船中御平安
御歸宅奉希候猶

近日に拜紫眉御玄談

承度頓首

十月九日

(裏に)

木米

村厚明君几下

(十四)

貴翰辱拜讀仕候

如仰日々寒氣難耐候

昨日に御光來被下

難有次第に候乍併

何之無風情御事に候

其上御厚意之

御贈物辱奉萬謝候

三三四

扱又掛物之事御賞味被下

何之無子細物に而

愧入申候扱又

賣茶翁手製

之樂茶碗御見せ被下

至而見事歡樂仕候

極宗入作與相見に申

候程上出來也

又代料其價如何程

與申事不知茶碗

至而實成物に相見に申候

扱又浪華津の

御詠歌頗妙に而

幽意絶賞仕候扱又

第十七章 晩年

三三五

木米

二二六

盡七日及候ニ付

今日晚船御下坂可被遊與奉存候

寒氣之時節

御平安御歸郷奉願候

扱又御買取被下候品々

御使に御渡申上候

御落手奉願候

猶其内拜紫眉

御清談承奉萬謝候頓首

十一月十四日

殿村先生(裏に)几下 木米

(十五)

奉呈一書候寒氣

之時節向候無

御障御安躰御座

被遊候や珍重之御儀

奉存候先日は陶治之事

有馬候御啓引

御書面拜誦仕候

長造翁(カ)

仕込之事奉承知候

然者此比中々

御茶口切之御會御催

之由幽意清雅

之御趣致與推察絶入候

安達法印與同船ニ而

一夜泊推參寒林

茶寮具(列之)之珍器

第十七章 晩年

二二七

木 著

白雲翠濤之

高妙拜見仕申度與

法橋尊申候處野僕

未快老身瘦地

茗園脱去色香

か、か、し、き、事、候

此比他行不仕ニ附

交易之風爐出來

閏月三、四日迄ニ者

燒立差上申候也

冬至後一日ニハ爲長造陶器

相談古門前借座敷

致是ハ引移可申與

存候安達入道

眼光謝（木米當冬）

中三條密燒立可申與

日日せき立扱困入申候事ニ候

猶後便御清談承度頓首

十一月廿三日 木米

殿厚明君

（十六）

尊書披見候處

來命寒氣難凌候

無御障御安鉢御座

大歡不斜奉存候

然者御贈物共

御厚志難有御事候

殊ニ御地名産之

第十七章 晚 年

木 米

包糖並柚餅

御惠之美麗朋友

中四五人寒夜清談

及煎四五種之

翠茶御惠之

包糖 = 增其味

茶禮奇格妙致

及以是御厚意

謝千萬候扱又

御申附之陶器類

其半過出來

今半及候出來揚

年內中 = 者

無覺候得共來春正月

中旬後は窰焼 =

仕候手當仕候愚米

老身 = 及此四五年

以前與者苦絶入候

乍併當時者

細工中心樂得遊刃

之法或獨笑又獨

怒其日ハ暮申候

此比 = 至京師

煎茶一流流行

仕終夜朋友來灣 = 而

摘ハ茶談及候

扱又輕薄之

品候得共

木 米

初真銘煎茶

一壺進上申謝

寒氣御見舞候

此茶愚老社中

二而第一品候

煎之手段

水一瓶



蒸手段候

湯之度聞松風

音未烹此時投
 茶暫事莫次茶
 待茶葉沈瓶
 之底配合茶鍾
 得煎之度其味
 甘露者也

水者其御地二而

天王寺龜井水

清水增井清水

川水不申合候

扱年者無餘日

御座候寒氣大切

御凌被遊尙來

陽之御目出度拜

第十七章 晚 年

鳳眼御清談承度頓首

十二月十六日 木米

殿村桂陰君

第十八章 終焉

天保四年は来た。三年の生活は幸に殿村氏の手紙があつて明瞭になるけれども、四年の事は殆ど知る事が出来ぬ。殿村氏の手紙が三年十二月を打止めとして其後に及ばぬのは、後に散佚したのでなく、初めから無いのかも知れぬ。兎に角木米の病氣は四年に入つて本物になつたと思はねばならぬ。偶、小康を得る事があつても、筆執るに懶く、土埴ねるに意進まずといふ風であつたと思はれる。かくては長造の指導も覺束ないもので、例の殿村氏交易一件の風爐も果して出来上つたか危いものである。一月も過ぎ二月も過ぎた時木米の焦燥は名状し難いものがあつたてはなからうか。來春こそ花の咲く

頃、この考は昨年此方夢寐にも忘れなかつたのに、花は咲き花は散つても枕は上らぬ。三月竹田が上京した時、今この友ありこの花あるにと夢は屢、城北の野を駆け巡つた事であらう。

竹田今度の上京は三月から四月にかけての數十日であつたが、山陽は歿して在らず、木米は病んで元氣がない、彼は轉、人生の寂莫を感じた事であらう。『竹田莊師友畫錄』は前にも言ふ如く天保四年筆を擱いた竹田の著であるが、その中に同年四月二十九日本米と會見した事を明記して居る。木米は言つた。僕は死んで別に願ひもないけれども、遺骸の埋め方には註文がある。それは外でもない、年來自分が苦心して集めた支那そのほか異國の土があつた。その中にしまつてある。あれを鴨川の水で練り合せて大きな土剛子を作り、其中に自分の骸を入れて、三晝三夜粟田の窯で焼き上げ、それから何處か京北の一地點に埋めて欲しいものである。僕は其處で黙つて千年の後何者の知己かやつて來て僕を開いて見るのを待つて居るつもりであると。竹田は之に答へて何と言つたか知らぬけれども、如何にも木米らしい天來の奇想で、悲壯

な響がそこに在る。(ことしの春であつたが京都の陶人中新人を以て目さるる河井寛次郎君は東京に於ける始めての作品展示會に於て「たゞも私に土になりたいと思ふばかりです」といふ僅か一句の挨拶をして列席者を驚かした。何ぞ知らん此考は木米と相一致して居るのである。)木米のこの物語は、併し竹田の記に「嘗て」として最後の會見の天保四年の四月二十九日の事とは言つて居ない。けれども人が死に就て語り殊にその埋葬に就て語る如きは必ずやその肉體の衰へを知る時であらうからよし四月二十九日ではないとしても竹田今度の上京中の事であつたらうと想像せられる。然るに竹田が淀川を下つて西に去つてから漸く半月経つた時木米の病はあらたまつた。而して五月十五日新曆六月十一日月圓かに平安の京を照らす時、杜鵑華頂の空を掠めて、戌刻午後八時といふに木米は歿した。時に年六十七歳である。

われは木米の臨終に就ても何事も知らぬ。唯、想像によつて臨終の枕頭にはお來、周吉、いねの三子のほか、長造あり、お源ありお源は直次郎及後里の方へ歸つたといふその他或は雲華、安達入道、殿厚明、道八などのうち一二人ありもやしつると思ふの

みである。死後の營みに就ても亦何事もわからぬ。若し竹田にして京に在つたならば、木米の理想通りに破天荒の埋棺法を行つたかも知れぬけれども、此事は竹田の外誰も聞いた者も無かつたのか實行せられず、平凡に烏邊山の煙と化したのである。

木米の法名は祥雲院寛龍日映居士と命ぜられた。さうして木米自らかねて壽塔を建て、置いたといふ五條坂の上行寺に於て葬儀は營まれた。さうして上行寺の過去帳安永五年十二月に成れるものにはその十五日の條に

祥雲堂寛龍日映天保四年五月

木屋佐兵衛

と記入せられ遺族の護持した位牌木製黒漆塗、高一尺四分には、表に「祥雲院寛龍日映居士」裏に「祥天保四癸巳五月十五日戌刻寂」とあつて、表は「本實院貞光日彰信女」裏は「本文政七甲申十二月十七日」といふ妻お貞の法名忌日と並び刻せられて居る。人若し木米の墓に詣でんとならば洛東烏邊山を訪へ。すなはち電車東山線五條で下車し、西大谷本廟に沿うて烏邊山の坂を行くこと數丁、お俊傳兵衛の墓ある本壽寺を過ぎり、妙見宮の隣の花屋から左に折れて斜に數十歩す



墓の妻夫米木

木 米

二三八

れば、そこに青木家の三基の碑石を發見するであらう。向つて左は前に既に記したお貞の墓である。右は「青木祖先墓」と刻した自然石の石碑である。木の墓はその間に建つて、碑面に小竹の筆で大きく、

識字陶工木米之墓

と書し、裏に本文七行、百五字より成る左の碑銘が鐫られてある。

木米青木氏俗稱八十八縮爲米其名也

因自稱木米云字佐平號九々鱗其先尾

張人來住京師木米以善陶聞世自少壯

好儒雅之交爲當時諸老先生所愛中年

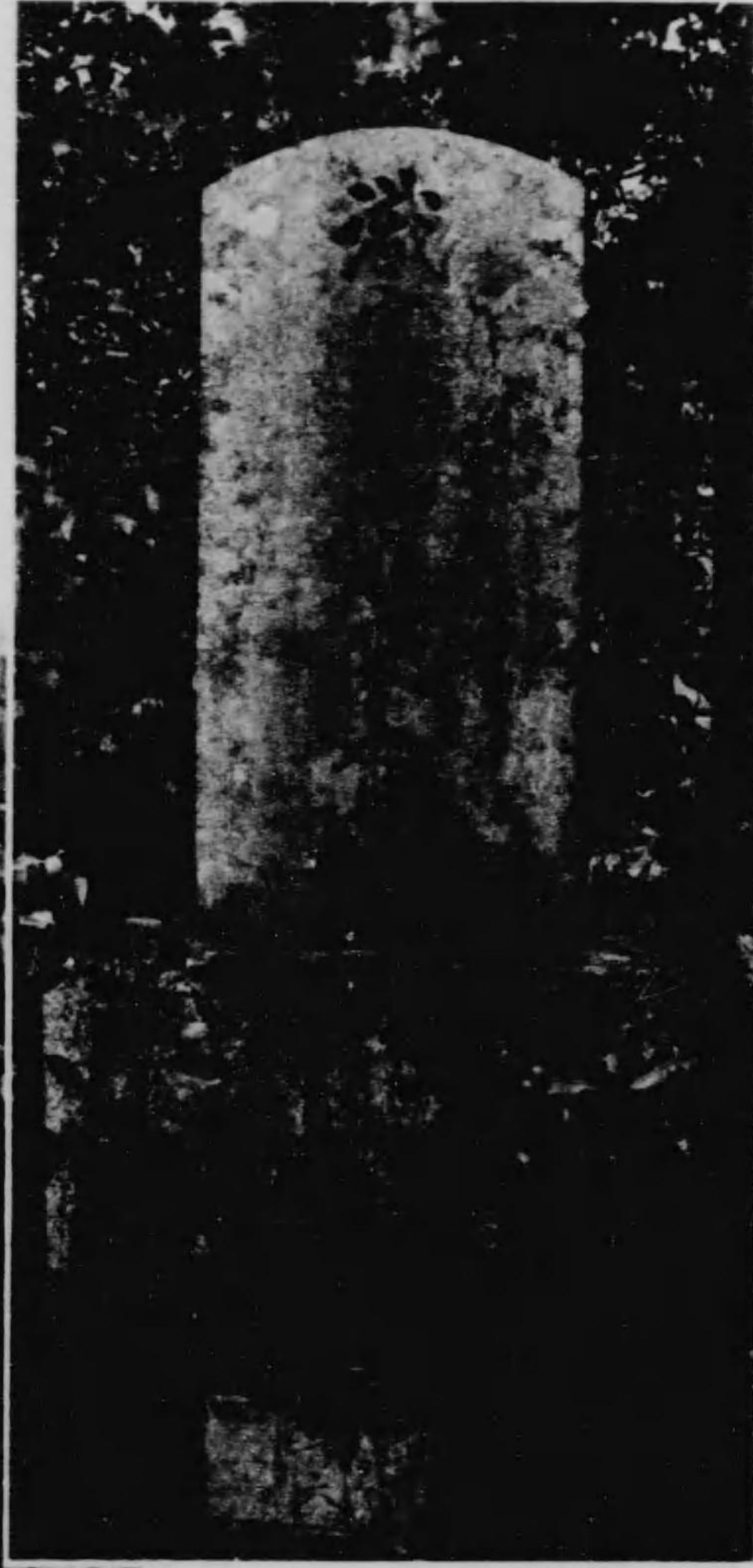
耳聾晚與山陽賴子成善子成稱其頗識

字天保癸巳五月十五日病歿年六十七

有遺孤名周吉時八歲

浪華筱崎弼撰并書

筆域幅二間半、奥行二間許。もと三つの墓は同じ鳥邊山の他の地點に在つた



墓の妻夫米木

木米

二三八

れば、そこに青木家の三基の碑石を發見するであらう。向つて左は前に既に記したお貞の墓である。右は青木祖先墓と刻した自然石の石碑である。木の墓はその間に建つて、碑面に小竹の筆で大きく、

識字陶工木米之墓

と書し、裏に本文七行、百五字より成る左の碑銘が鐫られてある。

木米青木氏俗稱八十八縮爲米其名也

因自稱木米云字佐平號九々鱗其先尾

張人來住京師木米以善陶聞世自少壯

好儒雅之交爲當時諸老先生所愛中年

耳聾晚與山陽賴子成善子成稱其頗識

字天保癸巳五月十五日病歿年六十七

有遺孤名周吉時八歲

浪華筱崎弼撰并書

塋域幅二間半、奥行二間許。もと三つの墓は同じ烏邊山の他の地點に在つた

のであるが、參詣の便を計つて近年秦藏六氏等が此處に移したのであるといふ。聞かまほしきは其際墓石の下に何物ありしかの一事である。木米の墓は總高四尺餘、文字面二尺七寸三分、その左側面に「妙法冬岳庵誠久日證居士天保十四年癸卯月十二月二十二日木米悴」と周吉の法名を刻したのは後年のことなることと言ふを須たぬ。若し夫れ青木祖先墓に至つては、木米の父佐兵衛が京都に移住すると間もなく建てたものかと思はれるが、惜しい事には表面の五文字の外には年紀も何も記してない。此墓に法名のないのは、青木家を京都へ持つて来たぬ。或は併し佐兵衛の法名もないから、強ち之のみには據つてこれら事の推定は出兼ねぬ。或は思ふ青木家の墓はまた外にもあつたのではないか。更に研究を要する。さらば之を建てた者は確かといふに、骨肉の位牌を自ら書刻して「米家一類」の佛をまつること疎かならぬ木米の事であれば、此墓も或は木米の作る所かと思はれぬでもないけれども、その碑石の選擇意匠は餘りに下俗であつて、木米らしくない。三墓の中ではやはりお貞の墓が最も勝れて居る。恐らく鳥邊山の恒河沙數にも等しき墓碯の中最も藝術的なものを求むれば、このお貞の墓であらう。

第十九章 子孫

世には千年の名家もあれば一代の名家もある。木米の場合は後者であつて、その遺族の末路は惨といへば餘りに惨である。

まづ當然周吉に就て記さねばならぬ。木米歿する時周吉は鳥邊山の碑にも見ゆる如く八歳の幼年者であつた。母なく父なき彼は姉(異母)のお來にのみ便らなければならなかつたと思はれるが、お來とても木米歿する時二十四歳或は二十六歳、其後他へ縁附いたのであれば終始周吉の傍にあつて扶育の任に當つたか覺東ないものである。妹のいねに至つては周吉よりも年少であつて、天保十一年に他界したから問題にならぬ。それでも周吉は生長して行つた。さうして天保六年周吉の名義で木米版『陶説』の公刊せられて居るのを見ると、この遺孤の爲に木米の遺友は何かと斡旋の勞を執ることを惜しまなかつたと思はれる。けれども周吉の守役として別に大に考へて見なけ

ればならぬのは眞葛長造である。木米が長造に結んだ最初の動機は如何にもあれ、一たびこれと相結んで直接に我道を彼に傳へること以外、一念胸奥に強くも閃く或るものがあつた筈である。木米は必ずやわれ歿するの後はわれ自らこれを指導する如く長造をして周吉を指導せしめんと欲したてはあるまいか。即ち長造の周吉に於けるは狩野興以の探幽兄弟に於けるが如きものである。懇しむべし、興以はよく探幽を指導し、探幽は興以の手引によつてその天分を發揮し、年甫めて十三京より江戸に下つて秀忠に見ゆるや海棠猫圖を畫いて祖父永徳の再來とほめられ、遂に狩野家中興の業を全うするに至つたが、わが周吉はその誕生に木米鶴を放つて命長かれと祈つた甲斐もなく、木米歿後十年、天保十四年十月二十二日年十八歳にして夭折したのである。大河内博士等によれば周吉は小雲と號したといふ。また故前田暢堂の談には、周吉は文山を師として粟田窯に賈物のみを作つて居たといふ事である。秦藏六氏直話けれども、われらはまだ此等の事に就て確證を得ない。

次にはお來の事を説かう。お來の事は比較的よく分つて居るやうで、實は

甚だ不明である。殊に困るのは木米の娘である所のお來の外に、今一人木米の家にお來といふ者があつたらしく云はれる事である。これは普通京都あたりでも言つて居る傳説であるけれども、中にも賀茂神光院の住職として名高かつた故和田智滿和上の舊藏品入札會(京都)に現はれた木米作染付小瓢の如き、これが材料として大に人を惑はせる。即ちこの小瓢は木米の姉の婚禮に當つて木米が知人に配つたもの一つといふことであつて、大雅堂定亮の手卷が添つて居るのである。

粟田窯青花磁直瓢式肩墜、堅一寸餘、周圍稱之、貯塗香亦可、上層描富士山旭日、下層描釣艇、有草體良以之之三字、是龔木米所製、良以之者龔米姉名、姉曾爲鴨東藝妓、後適浪華人某氏、龔米喜而多造之、贈親戚朋友、以祝其事、云、是其中之一、余祖父月峰辰亮爲竹馬友、因當時得之也、自當年至今日、殆百餘年矣、明治二十三年庚子春日、偶探篋底、視之久、口傳不記此事、今始記之、云、六明道士大雅堂定亮

之によれば姉の名はお來でなく良以之である。なるほど京都では木米の姉

(又は妹)は「らしい」と云つたといふ人もあれば、いや來葉であるといふ人もある。然らば木米の姉は例の美人といはれたお淺以外にまだ有ることが過去帳などによつて證明せられるかといふに、それは一人ともいふのが有る。元來木米は末子の一人息子で、姉は四人あつたのであるが、その中二人は寶曆の頃早死し、一人はお淺で寛政に歿し、残る一人がともて文化二年に歿して居る。ではこのどもの藝名が良以之であつたかといふ想像も生ずるのであるけれども、どうも覺束ない。一體木米の娘である所のお來が來治といつたらしく見える上に、一〇頁右の定亮の手卷なるものも、その執筆の年を明治二十三年庚寅とあるべきを見す々々庚子と誤るなど、果して定亮その人の執筆にかゝるものか怪しめば怪しい著者はまだ原本をのであるから、此處では一先木米の姉(又は妹)に「らしい」とする説は否定したら如何であらうか。たゞ藝妓の名などいふものは數代これを襲ぐ習慣は無論ある。されば木米の姉に良以之あつて木米の娘が更に同名を名乗るといふ事が全然有り得べからざる事ではない。現に霞城の「九々鱗」も來葉名はお來を木米の妹とし、この來葉

一たび三井に根引きせられたが、後に秋風立ちて暇をもらひ、しかも木米の窮乏は依然として甚だしいので、木米の娘お勝が二代目來葉として祇園町に出るやうに書いて居るのであるけれども、お勝はお來の養女でこそあれ、木米の娘ではない、さうして來葉の實名をお來として居るのは、偶々、お來以外に居る者のあつた事を否定して居るやうなものとも考へられる。尤も霞城はお勝又はお來をお勝と誤つたので、お勝の生れたのは二人の死した後であるから「九々鱗」のお勝は有り得ない。思ふに良以之なる者はお勝とお來とを搦き交せて一丸とした
 一個の空想的人物ではあるまいか。かゝる空想的人物を賣つて「陶説」の料は名人傳の脚色に當つて屢必要とせらるゝのであつて、木米の場合には全然空想的ではなく、その時代及び家族的の位置に於て實際と聊か異なるのみである。若夫來葉といふ人物に至つては木米と何等關係なきものではあるまいか。明治七年頃の書何有仙史の「鴨東新誌」を讀むに來葉の傳が見える。曰く「來葉者、鴨東名妓也、(中略)余友三溪子、嘗作其小傳、(中略)傳曰、貞信尼、原西京祇園教坊之歌妓也、其少也、色傾動一時、既而從良、良坐事獄死、即剃髮爲尼、時年僅十

七、人皆惜之、爾後守操如水、形影相弔、十年如一日、其誦經焚香之暇、詠和歌以自娛、又善畫詞、筆清麗超凡、(中略)尼初名來葉、今住于東山高臺寺傍云々。元來、來字は京妓の名として餘程古い歴史をもつといはれ、明治十一年版「都の花くらべ」にも來勇、來吉、小らい、來の、來榮などがあり、この中來吉はお來にゆかりある祇園の茶屋大和屋木米夫妻の位牌のある家にも居つたといふ事であるが、遙かに遠く馬琴の「羈旅漫錄」享和二に井筒らいの名の見えるのも面白い。

翻つて木米歿後のお來を見るに、木米歿後も尙ほ暫くは殿村氏の家に在つたが、其後京都に歸つて高野某に嫁した。高野氏は吳服商惠比須屋の別家であるといふが、惠比須屋も高野も今跡が絶えて詳しい事はわからぬ。お來に佐太郎といふ男兒後の小米があるのは恐らくこの高野の胤であらうと思はれる。ところがこの高野は文久二年九月お來五十四歳の頃歿した。つて居た位牌三基の中「廓譽了然禪定門文久二年九月六日」とあるのが、そこでお來は繩手通の赤萬膏藥屋に近いはこべ鹽はみが粉が本家松尾氏の厄介になることとなつた。この松尾氏は何かといふと、お來の養女お正しやうの生家である。或いはいふ、木米の妾おま

一體お來にはお正の外お勝といふ養女もあつた。お勝は木米在世當時八歳にしてお來に養はれたといふが、お正の方は木米歿後町内の頼みによつてお來が引受けたのであるといふ事である。然るに松尾氏が御所の御膳番であつた關係上後に京都を去つて東京に移る事になつた時、お來は取殘されて、今度はお勝の嫁した下村氏の家當吉氏の先代に矢張佐太郎を連れて厄介になることになつた。元來お來は頗る几帳面なまた贅澤な女性で、常に身に絹布を纏ひ、鐵漿を美しく死ぬる迄つけて、夏は下婢に絶えず團扇の風を送らせるといつた風であつたが、一面また非常に強情で、はじめは何としても下村氏に寄寓することを承知しなかつた。併し木米の遺物も一つ賣り二つ賣りして、貯蓄も今は全く無くなつたので、止むなく下村氏へやつて來たが、此時は新衣を調ふことがむづかしく、さりとて絹布以外のものは着る事を好まぬので、常に紋服を着て居たといふ事である。下村氏の先代は諸侯に金子を用達て裕福に暮らして居た島本某の子であつて、はやく蘭學を修め、京都に於て最も早く寫眞術を學んだ人であるといふが、此人がいろ／＼お來母子の爲に親

切を盡くした。さうしてお來は明治十二年六月二十一日同家に歿したのである。下村家の過去帳に「法室雷圓禪定尼、俗名高野來女、カツ養母」と記入せられて居る。さらばお來の持つて居た木米夫妻の位牌が下村家に無くて祇園の大和屋にある因縁は如何かといふに、下村氏の先代の娘即ち當吉氏の異母姉がそこへ養女に行つた關係によるのである。さうしてお勝も後にその隣家に引越して、明治三十一年七十六歳にして歿したといふ事である。

某女下村氏先妻

十一 女子大和屋を嗣ぐ

下村氏島本某子

十一 當吉氏下村家當主

養女かつ下村氏後妻

お來 養女お正松尾氏

實子 佐太郎(小米)

さて小米の事であるが、小米は兎も角も木米の孫である。幼名佐太郎のち

小米を以て通名とした。今日では小米こぎといふけれども、小米を知る人は或は佐太郎と呼び、或はかうべいといふ。かうべいは小米ならんといふ人もあるが、別に幸兵衛の文字あるなりといふ人もある。小米に關する記載は『陶磁考草』に最も詳しく見える。

○余明治十九年京都ニ行ク小米ヲ訪ヒ木米ノ遺事ヲ搜索セントス然ルニ小米業ヲ廢シタル由聞キ遂ニ果サズ其後眞葛香山ヲ加奈川太田ニ訪フ談木米ノ事ニ及ブ時ニ小米香山ノ工場ニアリ香山紹介シテ余ニ面セシム小米ハ木米ノ外孫其母ハ木米ノ女タリ小米云母ハ木米ノ事ヲ記憶シ毎ニ生ニ話示セリ當時生未ダ心ヲ此業ニ專ニセズ母歿スル已ニ十年今復タ知ルモノナシ其後小米東京ニ來リ余ガ家ヲ訪フコト兩三回然レドモ已ニ香山ノ工場ヲ出テ又依ルベキ人ナシ祖父ノ遺業ヲ再興スルノ力ニ乏シ惜イカナ

○小米又云生嘗テ石川縣ノ巡查トナリ金澤ニ在ルコト一年餘祖父ノ窯場ヲ問フニ知ルモノナシ余笑テ曰然リ子ノ祖父ノ金澤ニ來ル其當時ヲ知ル

モノ今已ニ亡シ余僅ニ之ヲ書籍ニ徵シテ其詳細ヲ得シノミ

お來の手にあまやかされた小米は柔弱懶惰、始末にむづかしい男であつたと思れる。『陶磁考草』の記によれば小米の香山に頼つたのは明治二十年頃二十八九歳の折であるが、これより先き小米は京都に於て夙く陶業に従つたのであつた。下村氏の先代はお來との關係上、如何にもして小米をして名家の後を興さしめたいものと、當時徳山侯の屋敷の蹴上げに缺處となつて居たのを買ひ求め、自らそこに移住すると共に、小米の爲に窯を築き、土捏師、轆轤師等を雇ひ入れて仕事を始めさせたのであるが、今の香山氏も語る如く、小米生來不器用で、其上仕事に身が入らず、下村氏も手古摺り果てた揚句に廢窯したといふ事である。香山氏の談に、小米は明治二十年頃我家に來る前、既に一度わが父の世話になつた事があるといはれるのは、蹴上げ時代の前か後かはつきりしない。さて香山を離れて暫く東京あたりをぶら／＼して居た小米は更に京都に立ち歸つた。さうして下賀茂あたりで暫く巡查を奉職して居たが、またそれを廢めて陶器師として五條坂へ降つて來ることになつた。眞清水藏六氏の口吻。

その事情は下賀茂の署長たりし人が風流の志ある所から、この名家の子孫に同情して、自ら斡旋の勞を執り、誰にとてなく、五條坂全體に小米を預つてもらふといふ事に捌きをしたのであつた。そこで小米は五條橋東三丁目十二番地に來り、昨日まで握つたサーベルを筥に代へ、最初は道八、次に清風氏(今の)次に藏六氏の指導を受けつゝ、妻と共に住んだが、その伎倆は一向に上達せず、相變らず怠け勝ちで、他人の作をわが作の如く装つて賣つて恥ぢず、借財も漸く嵩んで、信用全く地に落ち、遂に何人も小米を相手にする者がなくなつたといふ事である。道八氏の家人の話に、小米の比較的得意の時代はその御善羅に製陶し居た頃であつて、當時西瓜を送り越した事もあると語られたが、その何時の頃であるかは明瞭に記憶がないといふ。

小米の末路に就ては知る人が殆ど無い。われらは穿鑿を重ねて漸くこれを確かめたけれども、之を記載すべく餘りに悲惨なるを覺える。最後に、さらば小米はお來と同じく高野氏を名乗つたか又は青木氏を名乗つたかといふ問題が起るが、これは三年坂の陶器師青木青雲の遺族の物語によつて青木氏であつたらうと考へる。即ち小米は妻はあつたが子が無かつた。妻は小米より前に歿

た。そこで或日小米は青雲を訪ひ來つて同姓の好みによつて一人子供をもらひたいと申込み、且つ之によつて木米の後を空しうしたくないものであると語つたといふのである。

こゝに木米の子孫に就て記した序に、これまで説き洩らした血屬關係の人に關しても多少言及したのであるけれども、それは省いて、上行寺に傳ふる青木家の位牌と上行寺の過去帳に見える青木家關係の法名とを列記したいと思ふ。之はおのづから巻頭に掲げた青木家略系の註脚ともなり、また當來木米を研究してわれらの所説の誤れる點を正すべき人の參考資料ともなる筈である。參照 挿圖

まづ位牌は六基ある。うち一基はわれらの所謂繰出し位牌で、十三枚の札が收めてある。

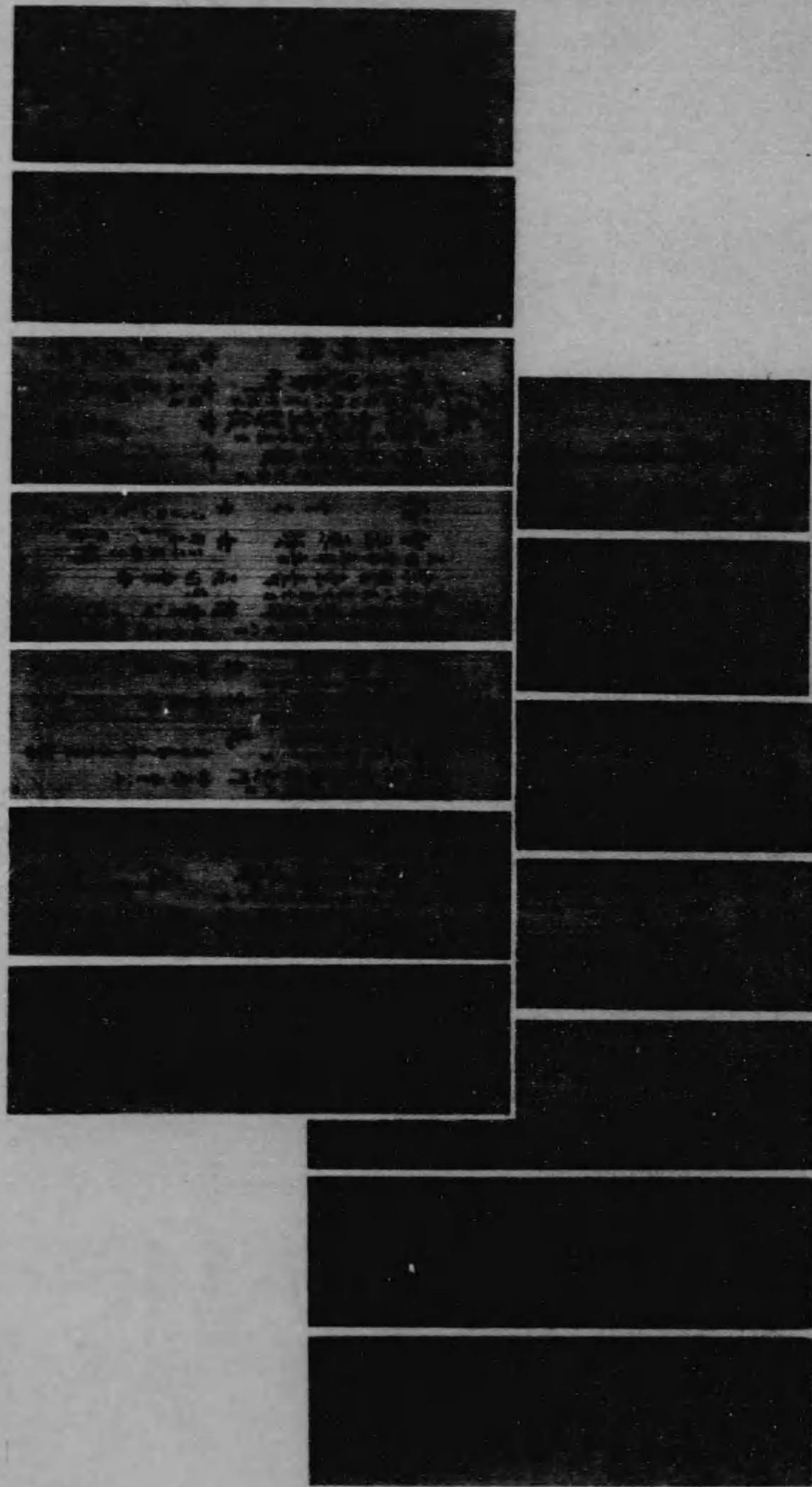
(表面)

(裏面)

(5) 妙法青木壽傳

青木氏先祖美野之國
青木傳左衛門

一妙法米家一類



牌位出線寺行上

木米

二五二

(ろ)

寶曆十一年辛巳六月七日
從眞院起應日感士
俗名青木定四郎
生木米祖父

妙法

寶曆五乙亥三月十二日
唯信妙壽尼

定四郎
先妻

三妙法米家一類

中興先祖 米家大切之佛

明和三年丙戌七月二日
得是院妙乘日起尼

定四郎
後妻

靈壽山房之實父實母

(は)

寶曆十庚辰四月八日
寂法靈覺禪定門

妙應實父

妙法

天明三年卯三月十日
感達院妙應尼

定四郎妻
生木米祖母

四妙法米家一類

妙應子
木米伯父

安永五丙申二月廿九日
隆應榮俊士

妙應子
木米伯父

(に)

明和二年乙酉二月十九日
春山覺應士

生木米母妙染日香之
實父「俗名いり」

五妙法米家一類

寶曆十庚辰正月廿八日
量譽宗壽僧

右二
實母

安永八己亥七月七日
宗譽榮壽尼

生木米母之姉
俗名さよ「日香」

天明八申五月五日
智岳惠須女

さよのいとと
俗名とよ

木 米

二五二

(ろ)

寶曆十一年辛巳六月七日
從眞院起應日感士

俗名青木定四郎
生木米祖父

妙法

唯 信 妙 壽 尼

定四郎
先妻

三妙法米家一類

中興先祖 米家大切之佛

明和三年丙戌七月二日
得是院妙乘日起 尼

定四郎
後妻

靈壽山房之實父 實母

(は)

寶曆十庚辰四月八日
寂法靈覺禪定門

妙應實父

天明三年卯三月十日
感達院妙應 尼

定四郎妾
生木米祖母

妙法

安永五丙申二月廿九日
隆 應 榮 俊 士

妙應子

明和二年乙酉二月十九日
春 山 覺 應 士

木米伯父

四妙法米家一類

寶曆十庚辰正月廿八日
量 譽 宗 壽 僧

妙應子

安永八己亥七月七日
宗 譽 榮 壽 尼

生木米母妙染日香之
實父 俗名いこ

(に)

天明八申五月五日
智 岳 惠 須 女

右二 實母

俗 せ 女

俗名いせと

五妙法米家一類



牌位出線寺行上

(ほ)

寶曆十庚辰十一月廿七日
妙利嬰孩女

生木米姉

妙法

寶曆十四甲申四月十三日
湛女妙空嬰孩女

生木米姉

寬政七乙卯八月廿九日

妙華院葬艸女

俗名 生木米姉
あさ

深達妙相女

俗名 生木米姉
むね

(へ)

享保十六辛亥十二月五日
忍譽要善

清缶寂意

京保廿乙卯五月九日

本了壽清

長缶智清

京保十九甲寅三月九日

須理妙善

詰月秋貞
法妙遊

寬政七年乙卯

秋色玄空童子

右四菩薩庄右衛門一類

(ち)

妙法

文政十二年丑十月廿九日
受幸妙持女

俗名 生木米妾
まさ 生周吉亥子二子母

文政乙丑十月八日

妙琪嬰孩

生木米妾まさ娘

(り)

良譽宗壽僧

第十九章 子孫

六妙法米家一類

七妙法米家一類
左兵衛とむらふるき人々

八妙法米家一類
あさ子

河内長兵衛
先代

(四) 宗譽 榮壽尼
曉寬政
 真父
 河内屋長兵衛
 同 みよ

(五) 曉山 淨光士
文政八年カノト未六月十五日
 貞母

(六) 淨月 清光尼
文政二年八月十二日
 喜
貞姉ムコ 喜兵衛

(七) 釋了
京和元西五月十二日
 清
貞姉りと

(八) 頓光 清圓
天保二年卯九月廿九日
 貞ッば
大坂米平没ス

(九) 祐心 居士
天保十五年辰六月廿九日没ス
 女

(十) 清教 信女
弘化四年未正月十二日生而死
 子 勝子

「米家一類」と裏面に記した七枚は悉く木米の自筆であるけれども、他の五枚は異筆も交り(わ)の如きに至つては木米の全く與り知らぬ所である。次に

(表面)

(裏面)

(一) 靈壽山房日染信士
寛政七年乙卯七月廿九日 父子青木八十八書納

(二) 蓮華水房日香信尼
甲子十月廿九日 同 丑正月二日

(三) 深達妙相信女

(四) 妙華院 薺草信女
八月廿九日 寛政七年乙卯年 青來納 八月十三日

(五) 秋色玄空童女

(六) 文政己丑十月八日没
 妙法 妙琪 嬰孩
文政己丑十月廿九日没

(七) 受幸妙持信女
木米娘文政己丑十月二生同月八日死 木米妾まさ同月二十九日死

(八) 感達院 妙應尼

(九) 靈壽山房日染士
天明三年卯三月十日 靈 寛政七年卯七月廿九日 蓮 文化元年子十月廿九日 妙 寛政七年卯八月廿九日

(十) 青木氏先祖代々諸精靈

(十一) 蓮華水房日香尼

(十二) 妙華院 薺草女

以上が普通の位牌で(一)から(四)まではその都度木米自身手を下して作つたもの

ので、黒漆の地に金文字を鐫つたその形はなか／＼に趣が深い。この中(五)の納を抜いて見ると、表に「平喜」及び「見」の文字があるので、嘗て此位牌を見た人が木米の家人の營んでゐた茶屋は平喜又は平喜見といつたのであらうといふ説をなしたけれども、これは位牌屋の覺書または符徴に過ぎぬのであつて、裏にはちやんと、なびて新門せん木屋おての文字も見えて居るのである。木米は家の商賣に就て笑ふべきは薪柴を商つて居たといふ説である。即ち「江湖快心録」に見ゆる寶山の物語であつて、「木米さんは元細手の三條下る處にいやしやりまして、舊は薪柴を賣てやしやつた様に承ります」といふのがそれである。思ふにこれは屋號の木屋を薪炭商と間違へたのであらう。

次に過去帳を探つて青木氏又は木屋とあるものを列記すれば實に左の三十六筆を得る。

- (三日)梅窓妙薰 安永九庚子正月 木ヤ内松野叟 立覺童子 文政三庚辰十月 木屋與兵衛孫
- (四日)慧順信女 天明八戊申五月 木屋岩女之姉
- (六日)本光院妙量 嘉永五子閏二月 木ヤ於源堂
- (七日)宗譽榮壽 安永八戊戌七月 木屋岩女實母 誠室妙意 天保十一庚子十二月 木屋周吉妹
- (八日)本正妙立 文政七甲申六月 木屋伊之助娘 妙琪嬰孩 文政十二己丑十月 木屋佐兵衛子

(十一日)感達院妙應 天明三癸卯三月十月也 (著者いふこれ伯母と祖母とを誤れるのみ) 泡玉水子 弘化四丁未正月 木屋勝女子 喜法

天明六丙午七月 木ヤ喜八堂 秋色玄空童子 寛政七乙卯八月 木ヤアサ子

(十四日)圓靜妙智嬰孩 文化十三丙子十一月 青木氏

(十五日)祥雲堂寬龍日映 天保四癸巳五月 木屋佐兵衛 涼晴嬰孩 天明五乙巳六月 木ヤ喜八子 本覺了圓 文化十癸酉六月 木屋直次郎子

(十七日)本覺院貞光日彰 文政七甲申十二月 木屋佐兵衛妻於テイ

(十八日)眞學宗意 文政十三寅九月 木屋伊之助

(十九日)圓室淨光水子 文化十二乙亥五月 青木氏

(二十日)玉夢水子 文政二己卯正月 木屋與兵衛子

(廿一日)光玉童子 文化六己巳四月 木ヤ直次郎子

(廿二日)妙薰 安永八亥五月 木屋イソエ 妙證 安永七戌八月 木屋シヨ 冬岳庵誠久日證 天保十四癸卯十月十八日 木屋周吉 堂

(廿四日)妙觀童女 文化九壬申十一月 木屋直次郎子

(廿六日)妙止 天明六丙午三月 木ヤ佐兵衛下女 智玉孩子 寛政十一己未六月 木ヤ直次郎子

(廿八日)圓道清法 文化十四丁丑三月 木ヤ庄兵衛

(廿九日)受幸妙持信女 文政十二己丑十月 木ヤ於マサ 妙華院薺草靈 寛政七乙卯八月 木ヤ佐兵衛娘淺堂 靈壽山房日染

寛政七乙卯七月 了竟 寛政十二庚申十二月 妙仙 享和二壬戌六月 蓮華水房日香 文化元甲子十一月木屋佐兵

木屋佐兵衛事 母へ 惠光童子 享和三癸亥五月 木ヤ直次良子

(晦日) 秋盡法知 寛政八丙辰九月 青木清藏事

思ふに木屋與兵衛といひ、同伊之助といふが如きは明かに米家に關係なきものである。しかも木や内松野夏などいふは或は『華頂要略』註にいふ所の遊女の名残などに考へられる。

さて上行寺であるが、此寺は當時五條坂橋東四丁目に在つてかなり立派な寺であつた。即ち二代目日蓮と稱せられた日經上人が開いた寺であつて、長慶十四年日經が鼻殺ぎの法難に遇つた爲 寺域千餘坪、妙満寺末の中本山格として、表向きには日秀が開山となつて居る。 寺末五十二を有し、今の妙満寺本堂もこの堂塔の一部を移したものと云ふ事であるが、維新後やうやく退轉して、大正元年寺末の妙祐寺、久遠寺と併せ上行山妙祐久遠寺としてその名のみを高辻烏丸に留むる事になつた。眞清水藏六氏の談によれば、氏の幼時上行寺には大きな松があつて化物が出るなど、いうて怖い所であつたといふが、その遺址は今の五條坂の陶器師耕山のあた

りである。ところで藏六氏の『陶寄』には尙ほ左の記事がある。

木米は陶器を以て自ら作して自家の墓を造り五條坂の上行寺に建つ。此墓は(黒鼠色の青磁にして形式は六角高さ一尺五六寸)木米の孫幸兵衛は僧の不在中に此墓を取り出し、古物商へ金拾圓にて賣渡したるものといふ説あり。古物商は神戸に持ちゆき洋人に賣り渡したるものと云ふ。該墓は現今米國ポストン博物館にありと云ふ。

随分奇抜な話で小米もこゝに至つて顔色はない。しかし幸か不幸かポストン博物館には此壽塔は無い。ポストンといふのは例の有名なるモールス氏の蒐集であつて、木米の作品はその中に三十點も集つて居るけれども、壽塔の事は見えぬ。念の爲に同館囑託富田幸次郎氏を介してモールス氏にたづねてもらつたけれども、今日までその所在は矢張不明である。紐育、ドレスデンなどにもないさうである。 そこで思ふに、形は六角で高さ一尺五六寸の青磁といふ點などが、かの欽古堂龜祐が文政十一年六月伏見街道の寺に建てたその壽塔と甚だ似通つて居る。木米壽塔の事は或はこの龜祐壽塔の訛傳ではないかとも想像せられるけれ

ども、ひとり『陶寄』の記すのみならず、此説は廣く世に行はれて居るから危みつとも記して置く。

以上十九章、われらは兎も角も木米の生涯を説いた。これから去つてその性行作品交友等の方面に觸れねばならぬ。これまでを前編と考へれば、これからさきは後編に入るのである。

第二十章 性 行

木米は如何なる風采の人であつたらうか。およそ人の風貌は、其角ならばてつぶり肥えて居るらしく、良寛なら瘦せぎすな心持がする如く大體の想像はつくものである。わが木米を想像するに肥え地ではなく、矢張瘦せた方であらう。丈は高くて肩は聳えて居るが、さりとて形容枯槁案山子の如きものではない。面は長いであらう。切れ長の眼には聰明の影が宿つて、これを蔽ふ眉は大村益次郎の銅像のやうに先が太くないとも限らぬ。鼻筋は通つて、口

はしまつて居る。五十を過ぎては豊かなる頬にも一二本は皺が出来たが、わけて廣い額には深いく線が四五本も刻まれて居る。これは何を語るかといへば若い頃からの刻苦をまざくと語るのである。一見武士のやうな嚴格さ、しかしその間には學者のやうな物懐かしさも幾分ある。それかと言つて野暮くさくなくて意氣な所がある。鈍重でなくて才子らしい所がある。

——多少の相違はあつても何人が想像しても木米といふ人物はまづかう言つた風の人物ではあるまいか。ところが斯かる風采其儘の肖像が高橋道八氏の家にあつて、それが木米の像であるといふから驚くのである。

此像の筆者は五明齋貞悦といふ人である。富岡鐵齋翁によれば此人は木米の甥であるといふ事であるが、詳しい傳はわからぬ。唯、その號によつて察するに浮世繪派の畫家ではなからうか。五と貞と附く浮世繪畫家には五波亭國貞、五湖亭貞景がある。畫も浮世繪風といへば言へぬ事もない。惜しい事には先代道八が像の上を切りぬいて、そこに鐵齋翁が健筆を揮つて烏邊山の墓碑銘を寫した大色紙を貼りつけて居る。これは此畫の假託ならぬかを疑はせて非常に不利である。しか

しその傳來をたづねれば小米の舊藏品であり、肖像そのものも如何にも木米その人を思はせるやうな所がある。思ひなしか此人物は成程豊らしいといふ心持さへする。もし此人物が脇差のやうに帯にさして居る魚形の或物、矢立といふ説もあるが木米の所持品として有名なものでてもあることが證據立てられる日が来るならば、それは寔に面白い事であらう。

木米の先天的の肉體的特徴については何も記載がない。しかも後天的のものとしては豊であつたことが明かである。名詮自稱木米は豊米と號して居る。木米の豊は勝手な豊で都合のよい時には聞える豊であり、勝手の悪い時には聞えぬ豊であるといふ説もあるが、木米の豊は窯の火加減を計る爲に耳を直接に窯につける爲に鼓膜の異状を來たしたのであつて、決して方便の豊ではなかつた。今日の陶工に此事を物語ると皆眼を圓くしていふ、窯に耳をつけるなどといふ事は出来るものでない、出来てもそれで火加減のわかるものではない、さればこそ色見などいふものも用意してあるのであると。併し木米は確かに火候を耳によつても測つたのであつて、此事は山陽が「陶説」

の序に明記して居る。

人の爲しがたしとする事を平氣ですることは天才の一特徴であるが、これと同時に刻苦も天才の一特徴である。山陽の言葉を借れば苦心殫精であつて、世人の所謂名人氣質といふ言葉の中には多量にこの意味が含まれてゐる。木米を批評した者は同時代の人としてはまづ山陽、竹田を推さねばならぬが、竹田は主として趣味の人としての木米を見、山陽は努力の人としての木米を力説しようとして居る。これは寔に面白い對比であつて、吾を天才といふは當らぬ、刻苦する者といふ人こそ吾を知る者であると言つた山陽は、木米を見るにも矢張この立場を忘れて居ないのである。木米の刻苦の實例はいろいろの事柄に見出すことが出来るであらうけれども、山陽の「古今書籍一字有關於陶、輒録而念之」と言つた言葉をさながら實證するものとしては宮川香山氏の家に傳へる木米の手録を挙げねばなるまい。香山氏の家には木米の手録はすべて四五冊もあるといふ事であるが、われらの見得たのはその中の一冊だけである。これは片面八行の野紙奇數頁に「米家圖書」の四文字をあらはす。を三十餘枚も綴つ

木米

二六四

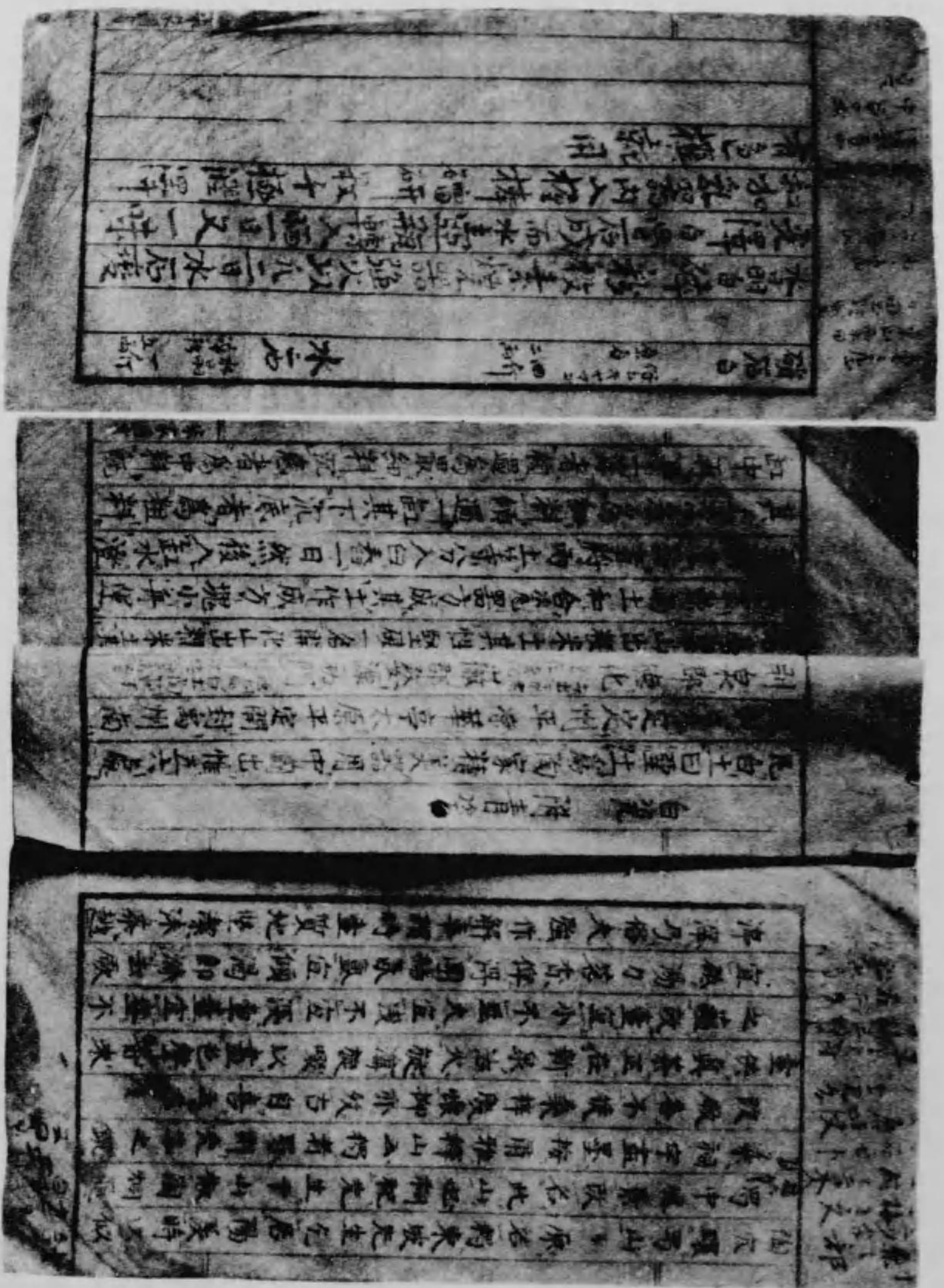
た唐本仕立の冊子参照であつて、見るから木米の匂ひのするものである。内容は檀几叢書をはじめ、天工開物、佩文齋書畫譜、物理小識等の抄録で、斯ういふものも讀んだのかとまづ驚かれる。中には出所を示さぬ断章もあり、また孤艇豈圖辭、日東云々の例の祥瑞傳資料なども見えて居る。而して木米が如何に眞劍な態度をもつてこれらの抄録をやつたかは通卷一筆苟くもせぬ筆の運びにも窺はれるが、滌拭テギシヨクの文字の左右にソソギシヨクの音訓を附し、また「濫」に頭註して「汎濫也、水延漫也」「説文」汎也、濡上及下也、又清也、淫也、染也など書いて居るにも思ひやられるであらう。山陽に據れば木米は龍威祕書の「陶説」を讀んで始めて陶に興味を覺えたのではなく、夙く陶に興味を覺えて種々此種の抄録を續けて居る中に「陶説」に邂逅したのである。われらには此抄録が何時頃のものであるかはつきりと見當がつかぬ。併し卷末の方に「時丙寅云云の樂書のあるのを見れば、恐らく此抄録は文化三年を下らぬものであるのではなからうか。否、卷頭のあたりはその書風といひ、音訓註釋などの附け具合といひ、正に「陶説」を得た前後の筆寫ではないかと思ふのである。樂書は「時丙寅」云々

録 手 米 木

木 米

二六四

た唐本仕立の冊子参挿圖であつて、見るから木米の匂ひのするものである。内容は檀几叢書をはじめ、天工開物、佩文齋書畫譜、物理小識等の抄録で、斯ういふものも讀んだのかとまづ驚かれる。中には出所を示さぬ断章もあり、また、孤艇豈圖辭、日東云々の例の祥瑞傳資料なども見えて居る。而して木米が如何に眞劍な態度をもつてこれらの抄録をやつたかは、通卷一筆苟くもせぬ筆の運びにも窺はれるが、滌拭ソテギシヨフの文字の左右にソテギシヨフの音訓を附し、また「濫」に頭註して「汎濫也、水延漫也」「説文」汎也、濡上及下也、又清也、淫也、染也など書いて居るにも思ひやられるであらう。山陽に據れば、木米は龍威祕書の『陶説』を讀んで始めて陶に興味を覺えたのではなく、夙く陶に興味を覺えて種々此種の抄録を續けて居る中に『陶説』に邂逅したのである。われらには此抄録が何時頃のものであるかはつきりと見當がつかぬ。併し卷末の方に「時丙寅」云云の樂書のあるのを見れば、恐らく此抄録は文化三年を下らぬものであるのではなからうか。否、卷頭のあたりはその書風といひ、音訓註釋などの附け具合といひ、正に『陶説』を得た前後の筆寫ではないかと思ふのである。樂書「時丙寅」云々



録 手 米 木

の近所に「眞葛窟」「眞葛翁」などいふのもあり、一見眞葛(宮川)家の人が書いたものであるやうにも見えるけれども、右「時丙寅」の文字は「卷中」「物理小識」を寫すあたりの文字と餘程よく似て居るから、矢張丙寅は文化三年であつて、慶應二年ではあるまいと思ふ。斯くてこの冊子は木米の書體の變遷を窺ふにも必要であり、われらも此意味に於て挿圖として前中後の三箇所を示して置いたのであるが、尙ほこの冊子が木米研究上非常に價値あるは通卷隨處に木米が藥石の調合法を書きつけて居る點である。木米の陶法書としては曩に馬宋のそれを假に紹介したが、あれは實は木米陶法書の影であつて、本體はこゝに在るのである。蓋し木米は「陶說」を得て後もこれらの抄録を常に座右にし、その餘白を利用して藥石調合の臺本ともしたのであつて、その書體よりいへば、餘程後年のものまで入つて居るやうに思はれる。われらは今これを全部紹介するの自由を持たぬ。唯、一二例を挙げると、

赤	畫	五 夕	二 夕五分
紅	梅	三 五分	一 夕七分五リ
			合 五 夕二分五リ
日之石		貳 夕五分	一 夕二分五リ
			同 三 夕七分五リ
硝		四 夕	二十 夕
			同 六 十 夕

木米

二六六

鉛	五匁	二匁五分	同	七匁五分
黄	一匁七分	八分五リ	同	二匁六分

また

白高麗磁土 長兵衛法

白川石 鴨上産

水寒 俗云寒水

白蠟 備州産石

磁土原石頗妙也

など書かれて居るのであつて、その數はかなり夥しく、或る部分は改削に改削を加へ、また量目の外「荒スリよろし」「九月朔日調合」「久法排色」「宜シ」「ツヨ不用」「先色見之内」「色見之上勘」など註記したのも見える。たゞ恐れるのはこれらの薬法の中間かと思はる。宮川家に藏する他の數冊の手録もやはり此一冊のやうに薬法が記されて居るか否かを知らぬけれども、此一冊だけでも木米陶法書として甚だ貴重せねばならぬ。鹽田力藏翁の見解に従へば、木米が天草石即ち石英素面岩を大坂の砥石屋に發見して、これを磁器の原料として採用したのは一大功績であるといふ事であるが、この天草石に就ての記載も偶然この冊子の

中に見出される。

透明密透明釉

天艸石

磨研屋用 砥白石云

五兩

柞灰

天艸白砥石能赤質取精白選其宜得火中爐入燒之一日以頗大白色成又舂碎爲粉水干乾初雷棒轟細粉用

また木米は彩釉に鉛溶材を用ひたから、曹達を用ひた永樂保全の如き紫や緑のあの愉快な光澤は木米の作には見られないとは河井寛次郎氏の話であるが、成程卷中鉛の文字の多いのに今更の如く驚かれる。

必要は發明の母といふやうに、刻苦經營その道に進むことを心掛けて止まねば、普通の手段では得られさうもない事も、意外の方法で容易に目的を達する場合のあるものである。こゝにをかしい話は木米が乞食を利用して陶片を集めたといふ話である。陶の物たるやまことに破碎し易いものである。しかし破片としてはまたこの位耐久力をもつものも少い。木米はこゝに着眼して、さもなくば容易に見ることを得ない幾多の標本を坐ながら集めよう

と考へ附いたのである。固より天下の名器珍寶といはれる程の陶器は、たとひ破碎するも原則として之を擲つ事はないから、此種のものの手に入ることには豫想せられぬ。けれども普通の標本は得られるであらう、殊に京都は千年の都であるから、また意外の獲物もあるかも知れぬ。そこで木米は日々乞食を八方に放つた。これらの乞食は夕方になると木屋の門前に集り來つて市をなすのが例で、木米はその齋らし來つた陶片を一々手づから受取つて勞を痛ひもし偶、大に見るべきものがあれば法外の謝禮を與へてこれを賞したといふのである。故二代三浦竹泉は最も深く木米に私淑した一人であつた。ひとり二代ばかりでなく初代もまた木米に傾倒してはやくその蒐集に心掛けたので、木米の製作遺品の集まるもの數十點に達し、恐らくモール、ス氏の蒐集に比しても遜色はないであらうと思はれる。ところがその中の一つ異彩を放つものとして多くの桐の小箱がある。この小箱の内容こそ木米が竹田に物語つて、あの中に包まれて粟田の窯で焼かれないと言つた藥石のはしくれてあるが、その中に棒狀、螺線狀等いろ／＼の形をした小さな硝子片を集め

た箱が一つある。われらは之を観ると、この乞食の話と思ひ出すのである。これらの硝子片は多分やはり乞食の拾ひ來つたものではなからうかと想像するのである。

小箱に就ては序ながら今少し詳しく説明する必要があるであらう。まづ箱は三十箇ある。これを箱の形によつて分類すると三種あつて、第一種は高さ三寸五厘、幅二寸七分、厚さ二寸五分三厘で、これが六箇あり、第二種は高二寸七分、幅二寸四分三厘、厚さ一寸七分五厘で、十一箇あり、第三種は厚さのみ第二種と違つて一寸六分五厘あり、これが十三箇あるのである。何れも蓋は挿蓋で、革の鈕が着いて居る。藥石の名稱は紙片を貼して書きつけたのもあれば、打ちつけに素地に記したのもある。今、藥石の名稱の明かなのを列記して見ると、

黄南京綠釉、香合釉 嘉熙回青色濃、宜窯蘇泥勃青色淡、(左側)乾坤、(第一種)榮

紅、黄南京黃釉、交趾紫香合釉、交趾薄黃香合、(以上第一種) 崑剛贊、金白、白硝、石青硝、石礬

紅、白繪、黑畫、金紫、紫、吳州、金、黑、吳州、日岡、極末石、黑、吳子、(以上第二種) 紫、與、黃、(云々) 南京土

黄瀬白土、信樂木化土、交趾(云々)、定彩(五分唐大坂、和泉屋久右衛門) 南京土 神樂木化土、南京土(食お)

イス灰一番、交趾もへき合白粉二箱之内、神樂石(外に第三種中に不)などであつて、箱の中には或は粉狀、或は粒狀、色さまざまの藥石が少しづつ、残つて、中には黃瀬土や南京土の如く四角な塊に木米の刻て大きな文字が入つて、殆ど原狀その儘で残つて居るものもある。此等のものを見るも木米といふ人物は決して一部の世人の想像する如く磊落粗放酒を蒙つてひとり快とする如き流亞てはなく、却つて反對に思慮縝密すべての事物を組織的に處理せんとした事を思はねばならぬ。下村氏の談によれば、お來所持品持ちものは大坂殿村氏への中に木米の日記があつた。これは木米が主として製陶の事を書きつけたものであつて、窯火の具合を徹宵眠らずに、何の刻には斯ういふ色で燃えて居たといふ様子を一々繪具で描いた所もあつたといふ事である。惜しいことに此日記は下村家が柳馬場にある頃、御所やけて焼けた。なほ此外下村家には色見板百枚ばかりや急須の型などいろ／＼あつたが、これは明治のはじめ京都府勸業課の需に應じてすべて提出し、しかも提出者へは還されず、その儘悉く散佚して終つたといふ事である。

思慮縝密なる者はまた自重の念に強いのが例である。木米の陶を造るや容易にこれを手離さうとはしなかつた。傳へていふ木米一たび窯を開いて新器を出すや、これを一時には見ない。毎夜少しづつ、卓上に竝べて酒を飲みながら鑑賞する。此時が年中に於て木米の最も幸福な時である。酒は必ずしもいけるといふ方ではなかつたが、常に之を食卓に置くの習はしてあつて、少しく酔うて陶然たるに至つて止むのである。卓上に並べられた器は一つ一つ製作者自身の峻嚴なる批評眼にかけられる。風火の窯、火弱ければ窺み強ければ償るで、抑、土を取るより一品の成るまでの工力すべて七十二度を要する一三四頁参照といふ陶成の最後の過程(窯入れ)は、こゝぞ成敗利鈍の岐るゝ所、溜火溜緊火を通ずる一晝夜の辛勞、半はわが力を持ち、半は風化仙の冥護に俟ちしもの、今茲にその美醜を明々地に露呈するのである。木米は一箇の完全なる器を得る爲には三器四器五器を作り、彼此比較し、急須の如きは一々湯を注ぎ、火に架け、口洩りなきかなど檢して、唯一器のみを留めて、他は悉く庭前に抛つて犠牲として惜しまぬのであつた。嘗て僧萬里周九が『梅花無盡藏』を讀む

に、畫聖雪舟が畫を作る有様を述べて居る。曰く、雪舟畫を作るに先ちて半酌の酒を飲み、稍微醺を呈するの時、快く尺八を吹き、國歌を咏じ、唐詩を吟じ、筆を吮ひ、紙に臨むといふのである。いま木米は既に工を竣つて觀賞者の位置に立たうとして居るのであるけれども、その態度を想へばまた此文を聯想せざるを得ない。木米の箱書には自ら「此雖窳變者余得意製也」など書いたものがある。これは永樂和全が「大内山に陶窯を始めてつくれるそが中に此はちの形ちことなればすつべきものをあながちに人のもとめければかくなむしける、中々にさわらずもあれ初みゆき手をふるごとに見ぐるしきものを」とこまつて箱書して居るのとは違つて、なか／＼鼻息の荒いところがある。和全も無がある蓋し木米はこの場合窳變に積極的價值を見出したのである。木米は如何なる場合でも自信のないものを投出すことはない。それ故に木米の作は有れば即ち強いもので、世間如何に多く巧なる賈物があつてもその珠玉なるか魚目なるか一見にして區別がつく筈である。或人の話に、木米は家人に對して怒るといふことはなかつた、しかし自ら抛つた作品の偶、壞れずにあるの

を家人が拾つて人手に渡したのを發見した時だけは烈火の如く怒つたといふのも強ち虚傳ではないであらう。これらの逸話は本統に今の人達に藥にして飲ませたい。木米は賣る爲に作つたのではなかつた。鐵齋翁は木米のえらい所は賣れぬものを作つた所にあると言はれる。木米の作品を買はうとする骨董屋はこれが何程といふのではない、次の間から挨拶をして、そつと包み金を置いて行くのであつたとは下村氏の談である。

それなれば木米は裕福かといへば決してさうでなかつた。むしろ貧乏を以て有名な位のものである。竹田がはじめて大和橋のその居を訪ふや、甚だ狹窄なるに眼をとめた。龍威祕書を求むれば「囊橐一たび空し」と陶説の序の序のてある。まだ見たことはないけれども借金の證文もあるといふ事である。しかし貧乏とよき藝術とは屢、仲のよかつた例を貽して居る。俾南田は死後葬式さへ出來ぬ程の人であつたが、その畫は梁楷以後果して幾人あるかと思ふほど活氣があり潤澤があり品位がある。木米もまた程度はともあれ同じ例に引いて差支ないであらう。さうして貧乏と贅澤とが兩立するのも人世の

興味ある現象である。貧に甘んずるものは慾がない、時に黄金を得るも之を見ること土芥のやうであるから、富貴も知らぬ贅を盡す事が出来るのである。木米が大名などに招かれて行く時は供人の二三人も引連れ、やうだいぶつて出かけたといふ、その様子は知らぬが、彼の日常白羽二重を着て居たのは誰も知る話である。しかも娘が今始めてしめた廣帯の端を切らせて繪を畫く程の男であるから、白羽二重の土まみれなのは言ふ迄もない事である。贅澤はまた食物の上にも現はれる。四季折々の初物、土地々々の名産、これらは木米の最も喜ぶ所で、何事にも製作慾の手傳ふ彼はとう／＼自分の創意で菓子まで作らせねば止まぬのであつた。金澤の宮城野は既に擧げた。然るにこゝに小石元瑞に與へた尺牘富岡織齋翁藏の如き、また頗る珍とすべきものである。

爵陶之天色ニ候先以

御安躰御座大歡之

至ニ奉存候一昨夕者

不斗推參仕候御馳走ニ

あはり難有次第ニ候

其上先つらしき

舞曲拜見いゝし御案内之通

聾お諷おなど承

事おは近年無お之候

且亦尊君の威盛ならては

難得事ニ候へこと

感絶入申候養心々々

奉萬謝候隨而

龜末之肉抱進上

申度百持上候半數五十

尊君御納被下半數五十

片山氏に被進被下度御願申上候

召上被下物ニ而も無之候得共僕

木 米

二七六

おをひ付て心易菓子やに
申談米家一流のはんちうに候

御笑納被下候得者忝仕合候

扱亦其砌尊(増力)申上候

龜の水(一字不明)滴(一字不明)備

御(一字不明)申候御心ほりせニ

被遊るく候何レニ而を

一向不苦候猶萬

事拜紫眉御法談

承度頓首

十一月十日

(裏に)

木米

小元瑞先生

几下

しかし木米が貪り食つたのは口腹の慾を充たすべきこれら物質的の食物

よりも、實は精神の糧となり、やがてはわが製作の滋養となるべき更に貴重な
或物であつた筈である。或物とは古名器である。特に支那の古名器である。
木米は號して古器觀といつたが、これは甚だ意味あることのやうに思はれる。
木米が手づからこれらの古名器を寫したものに『古器觀』と題す圖録がある。
これは幾冊かあつたものと見えて、今諸方に散在して居る。われらの經眼し
たものの中最も完備してゐるのは嘗て京都市長たりし故雨森菊太郎氏の藏
本であつて、全二冊、一は表紙に「古器觀手摹十有七圖」とあり、一は「古器觀手摹十
有八圖」とあつて、前者は西洋陶器即ちいはゆる和蘭陀を主として幾分祥瑞物
が交はつて居り、圖は此冊より示した挿後者は専ら青磁を集めたものである。用
紙は唐紙を用ひて、高き九寸一分、幅六寸輪廓の小口に「米家藏書」の四字を刻出した所は
『陶說』や宮川氏所藏の手録と全く同じのみである。まづ驚くのは木米の
仕事の如何にも忠實な點である。挿圖に示した一例にも知らるゝ如く、形と
いひ紋様といひ勞を厭はず微細な點まで寫して、各圖それ〴〵淡彩を施し、原
様髣髴として眼前にある心地がする。青磁には人形手(髣手)の鉢を始めとし

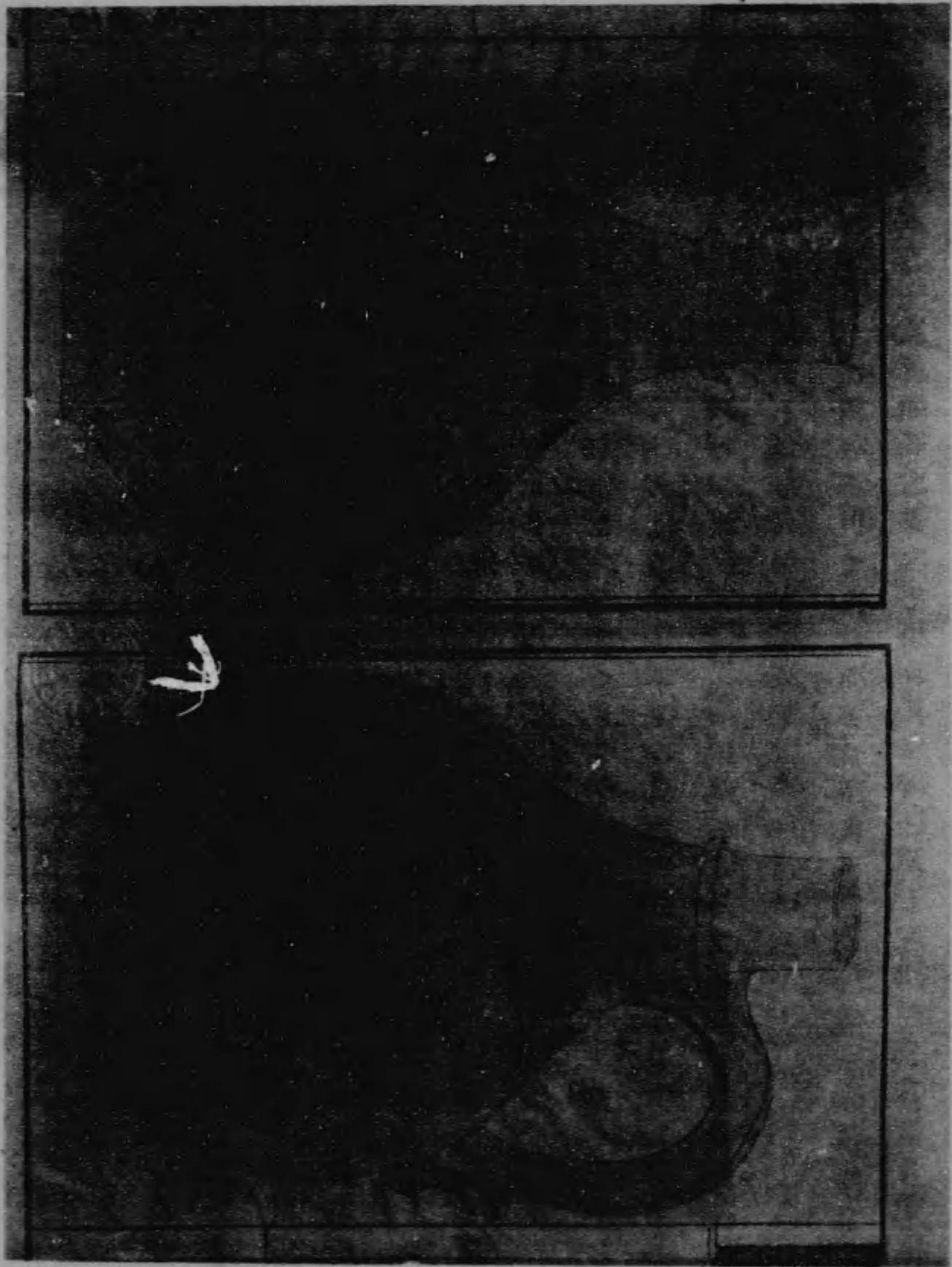
木米

二七八

木米の陶磁に現はれるものが幾つかあり「金府」銘の春日山青磁にさながらな沈紋の鉢など見えるも面白い。和蘭陀の方では何はあれ乾山うつしに屢見する獨樂手の水指はまづ懐かしいが風景平皿を幾枚か寫してMとBとを結合したマークに1684の年紀を添へた高臺内の銘を特に興ありげに二つも寫して居るのはやあ木米がローマ字を書いて居るというて子供ならずも手を拍ちたくなる。このマークはホッソンのマーク集によれば和蘭デルフ しかも祥寫山水箇茶碗は四圖まであつて木米の筆致を知るの一標範である。さらばこれらの圖録は何時頃作られたかといふに雨森氏の二帖には何の手がゝりもないけれども嘗て鳩居堂に在つた赤繪の一帖装幀等全く雨森氏のものといふには左の記があつたのである。轉寫であるから誤なきを保し難い。

古器觀序

古昔棄公好畫龍、而真龍遂出矣。余有好古之癖、凡古今有器玩物件、無一不好、亦無一不藏于家。適有一二之奇品、而不得藏于家、則圖而藏之于巾箱。每晴日、雨夕一展而觀之、則胸中之凝慮頓滌、宛如飛僊于九天。於是乎、四方之士、得一器、則使



古器觀圖錄

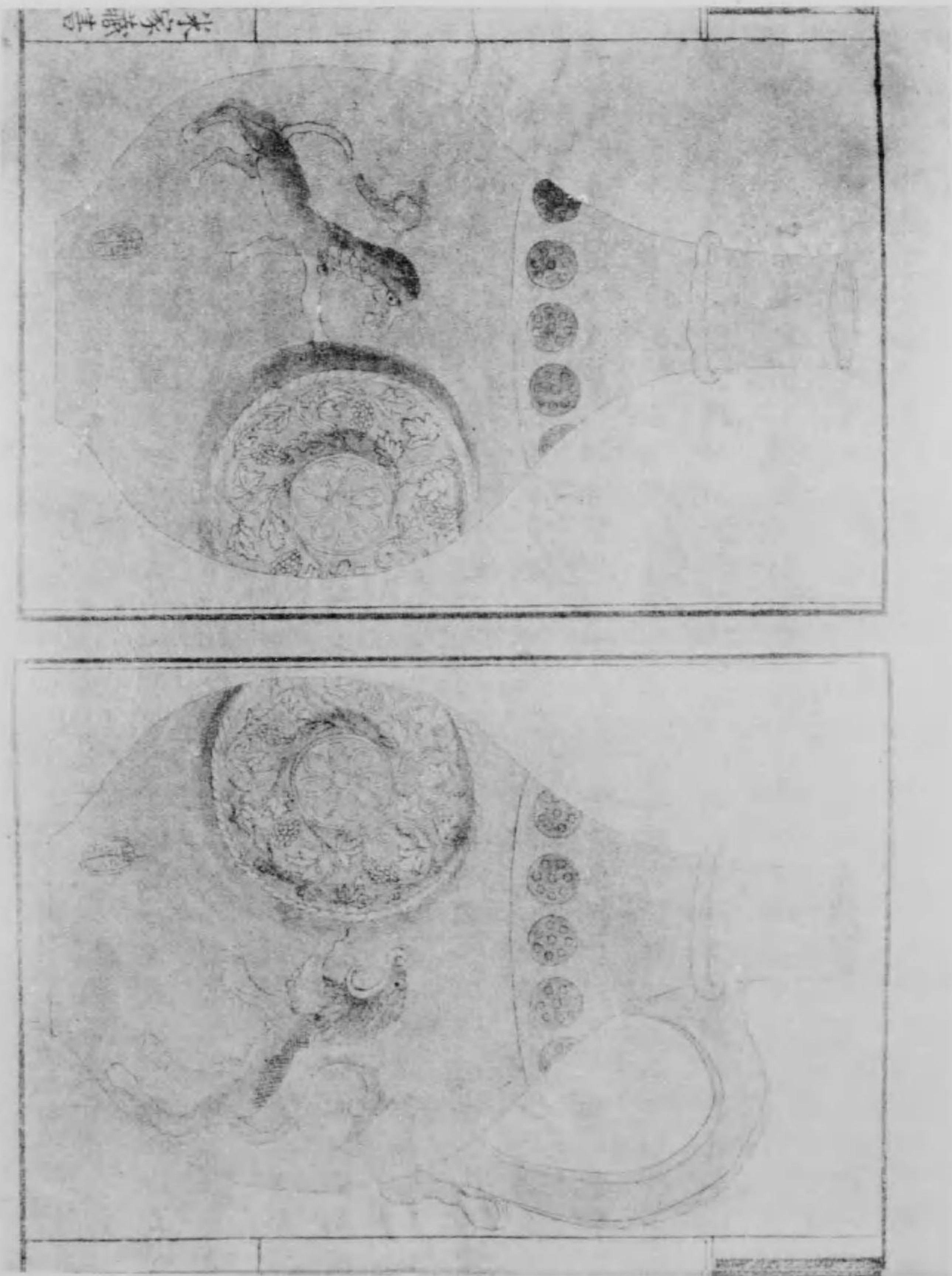
本 米

二七八

本米の陶磁に現はれるものが幾つかあり、金府銘の春日山青磁にさながらな沈紋の鉢など見えるも面白い。和蘭陀の方では、何はあれ、乾山うつしに屢見する獨樂手の水指はまづ懐かしいが、風景平皿を幾枚か寫してMとBとを結合したマークに1652の年紀を添へた高臺内の銘を特に興ありげに二つも寫して居るのは、やあ本米がローマ字を書いて居るというて子供ならずも手を拍ちたくなる。このマークはホアソンのマーク集によれば和蘭デヤフトのそれらしく思はれる。1652はわか真享元年である。しかも祥寫山水箇茶碗は四圖まであつて、本米の筆致を知るの一標範である。さらばこれらの圖録は何時頃作られたかといふに、雨森氏の二帖には何の手がゝりもないけれども、嘗て鳩居堂に在つた赤繪の一帖装頓等全く雨森氏二帖二帖と同じといふには左の記があつたのである。傳寫であるから誤なきを保し難い。

古器觀序

古昔棄公好畫龍、而眞龍遂出矣。余有好古之癖、凡古今有器玩物件、無一不好、亦無一不藏于家。適有一二之奇品、而不得藏于家、則圖而藏之于巾箱。每晴日、雨夕一展而觀之、則胸中之凝慮頓滌、宛如飛僊于九天。於是乎、四方之士、得一器、則使



古器觀圖錄

余鑑定之。余又隨而圖之。鑑之。遂得有真奇物而藏于家。則余之喜幾許乎。余也非好圖也。好真也。然圖亦不可舍也。好而不舍。則自有真者始而來焉。是余之所以有此冊子也。是爲序。戊辰初秋。平安河東華陰陶戶青來木米識。

これに由つて之を觀れば圖録『古器觀』の始められたのは文化五年木米金澤に在る頃である。若し此記にして木米の眞蹟たるに相違なくば、これ非常に興味ある事である。思ふに木米は金澤に於て古名器に接するの機會が多く、しかも所謂眞物は之を得る事が出来ぬので、こゝに欣然思ひ立つて此帖を作つたのであらう。而して古器觀の題號は『古器觀藏』の印を加州侯から頂戴したといふ説と都合よく始めて結び附くやうにも考へられて來る。たゞ併しながら之は輕卒には斷定が出来ぬのである。果して戊辰初秋金澤にある時木米がこの序を作つたとするならば、これだけの長落款を書きながら、何故金澤に於てといふ意味を書かぬのであらうか。或は從來の説では戊辰の冬木米尙ほ金澤に居つたといふけれども、實は初秋頃に京都に歸つて居たといふか。或は又金澤に在るにはあつたけれども之を記さなかつたといふか。

今われらは何れとも判断を下すに躊躇するのである。

『古器観』を説けば、従つて宮川香山氏の家に保存する土型どがたの事を述べねばならぬ。彼と此とは車の兩輪であつて、何れの一を缺くも木米の車は動かぬのである。土型とは何かといふに、陶土を以つて作つた母型である。本書の挿圖一六四頁と一六五頁との間に挿むもの、最下位をみよの中、「臺布袋香合土型」として示したものは即ちその一つであつて、宮川家には此種の土型、嚴密にいへば種型をも含むが、尙ほ三百箇もあるといふ香山氏の直話である。木米の土型の一部はかの『陶説』の板木と共に遠州灘で失はれたのであるが、宮川家にあるもののみにては三百箇に達し、しかも三浦竹泉氏の十箇種型を始め諸所に一つ二つ宛散在するのを見れば、木米時代の全數は夥しい數に上つて居たのであらう。香山氏の談によれば、遠州灘で失つたのは重に交趾の型であつたが、尙ほ現存するものの中にも交趾はあり、其他古染付、祥瑞等古來日本に渡つた香合の形は大抵揃つて居るとは盛なものである。木米はこれらの母型に多くはその名稱、型どつた年月乃至小感想などを書き又は鐫りつけて居るのであつて、例へば「交趾蝦

蟻」交趾成字石榴香子、脱元様、古器観藏、吳州周茂叔香子、依元様作歐、交趾香子、趁珠龍者、形皆同、但邊之香草、或有不同物、此型也、摸其一種之香草、古器観藏、交趾牡丹香子、大小不一、此型名中牡丹、脱元様、古器観藏、など是である。嗚呼この氣根よ、この氣根こそ木米をして彼の大を成さしめた所以の一つであつて、またその作品の典據確實卓然として時流を描く所以である。

木米は才子であるけれども才を恃まず、一たび『陶説』を得るや、あらゆる「多能」の桎梏を脱して、一意陶に慕進した所に彼のえらさがある。さうして恐らく彼は生涯學生で通して未だ曾て自ら大家とはならなかつたのであらう。傳へていふ、木米嘗て山陽に對ひ、後世或は學者にして君の學を凌駕する者あらんも、陶工にして余の學に及ぶ者は絶無であらうと言つたといふのであるが、これらは齊東野人の語であつて、木米を眞に知らぬからこそ斯かる事も言ひ出すのである。山陽は『陶説』の序に於て、翁木米を指すは陶工に非ずと言ひ、全く對等の資格を以て之に對し、ひとり山陽のみならず、竹田といひ、雲華といひ、識者は悉くこの心持を以て彼を待つたのであるけれども、尙且木米は身を

終るまで「陶工」を以て自ら稱し自ら署して居るのである。既に自ら信ずる所ありと雖も謙讓の徳を失はぬ者、如何んぞまた人を罵らんやである。世の中には木米が「上奥殿候書」に仁清は陶車を能くするも釉曇りて光なく、乾山は西洋器の釉法を摸して成らず、僅かに坏鉢を作り得たるのみと言つたのを見て、仁乾二家を罵倒したとする者があるけれども、これ大なる誤であつて、木米は唯、この場合古來の陶器の大勢を説いたに過ぎぬのである。例之今日日進月歩の醫學の眼を以て往昔蘭法醫のなす所を見れば誰か彼等の幼稚なるを憐まざらんやである。しかも彼等の功績は千載青史を飾つて居る。歴史を研究する者は此點を忘れてはならぬ、木米固より之を知る。さればこそ木米はその後に續けて「雖然此等數人皆可稱名工」と書いて居るのである。併し人に對して謙遜なるも自ら衷に高く持して居たことは言ふまでもない。その「陶工」といふ中にも實は非常な自信と誇とある事はわかつて居る。「眞の陶工」の意味に於てこの文字を用ひて居るのである事は容易に想像せられる。

木米は死して識字陶工といはれた。識字の文字は鐵齋翁によれば韓退之

から出て、大學士の意味であり、おほよそ學者の尊稱としてこれ以上の尊稱はないといふ事である。これは偶、鐵齋翁が如何に木米に傾倒せられるかを語つて愉快であるけれども、小竹が果してこの意味に於て此文字を用ひたかはおぼつかない。蓋し小竹の執筆した墓背の銘には「晚與山陽賴子成善、子成稱其頗識字」とあつて、恰かも表に用ひた識字の意味を註釋した形である。葛西因是も自刻「陶說」の序に同じ程の意味で夙く識字の文字を用ひて居る。一體此時代の人は同じ事柄を書けば必ず前に人の言つた事を引合ひに出す癖(禮式)があるから、「陶說」原本の序(支那人の)因是の序、木米の「上奥殿候書」、山陽の刻陶說序、また後に出た竹泉版「陶說」の近藤元粹の序、これらを對照すると、一種の趣こつてなかく面白。今小竹も必ずしも因是に暗示を得たとは考へられぬ。けれども木米は詩文こそ餘り作らなかつたけれども、博覽強記、漢文の如きも或る程度まで自由に記し得た事は上來掲げ來つたいろくのものに就て見ただけでも知る事が出来る。蓋し木米には著しい支那癖がある。殆ど半分支那人になつたかと思ふ程支那癖がある。之は彼の時代(環境)及び生ひ立ち(修養)を見れば當然の事であるけれども、しかも尋常人の到らんと欲して遂に到り得ぬ境地まで進んだのは偉とすべきである。彼は日本に生れたけれども、殆ど支那の空氣の中に住んだ骨

まで支那式に出来上つた。こゝが餘程面白い所である。木米には著しい好古癖がある。山陽も翁嗜古士と一句にして巧に木米の全性癖を説明して居る。併し彼が眞頭骨から支那化した事を言はねば、未だ木米を評し得たりとはし難いのである。竹田は木米の風貌を評して、身服綺紈、手搗泥土、望之風標昂然、阮履稽鍊、不是過也といひ、更に人物を評しては、話雜諧謔、且笑且說、忽實忽虛、不可思議、予謂大雅春星諸老役後、殆六十年、當時人物典型、猶存而可觀者、唯翁一人耳、とうまい事を言つたが、この文字と文字との間には見えはせぬけれども、木米が古味あり風韻ある士であるといふ以外、寶曆以後文人社會を風靡したあの面白い一種グロテスクな支那趣味、あそこに根ざし、あそこに培はれた一箇大なる餘蘖である事を語つて居るのである。木米は單に氣のきいた輕薄才子の如くいふ人も多いけれども、われらを以て見れば、才人は才人でも決して小才子ではなく、或る程度までぬうとした、超然とした、よい意味でいふ横着な、剛愎な人間であつたらうと思ふのである。彼は傳によれば支那の人物としては特に蘇東坡に私淑したといふが、これは茶といふ方から言つても關係が

深く、或はさうかも知れぬ。

第二十一章 作品

その人を見ればその作品はわかり、その作品を見ればその人がわかる。いまわれらはその人物を見てさて作品を見ようとするのである。彼は時に必要に迫られて仁清の如き國風をも摸したけれども、まづ一生を支那陶磁器の摸倣に捧げたといつて差支ない。その仁清寫といふが如きものも仁清になり切らずに却つて交趾の如きものになつて居る場合が多い。蓋し彼はみづからその陶磁論「上奥殿侯書」に書いて居るやうに仁清の釉は發達の道程に在るものと信じて居る。あの鈍い光に床しい面白味があるとすよりも、幼稚な未熟のものと解しようとして居る。木米は一體に磁器に力を盡くし、陶器は餘り顧みない、殊に樂に至つては殆ど作らなかつたとは世人の一般に信ずる所であるが、此點に於ては確かに一種の偏見に陥つてゐたのではないかと

思はれる。併し一方に屈する者は一方に伸びねばならぬ。前にも言つた如く木米がかゝる偏見をさへ抱いて、脇目も振らずに一意邁進磁器の研究に没頭したのは非常な強みであつた。すべて藝は勉むるに精しく、一步進まなければ即ち退くのであるから、木米がその研究を或る範圍に局限し、その趣味から言つても然らざるを得ないのであるが、加ふるに不斷の努力によつて勇往精進したのは寔に賢といはねばならぬ。

木米が陶人として名を揚げたのは前に述べた如く享和の初である。即ち彼が専門に陶に入つて漸く五六年後の事であるから、さすがの兼葎堂も舌を巻いた事であらう。一體木米をして大をなさしめたのは兼葎堂などの力が與つて力があるのである。佛教では四恩といふものを立てるが、實際師の恩ほど難有いものはない。師は必ずしも贅を執らして入門しなくても道を教へる者は皆師である。ところが兼葎堂は享和二年に歿した。しかし此年は既に木米が紀州に招かれた翌年であつて、兼葎堂の歿したのが、木米を始めて上手として世上に紹介したその『煎茶早指南』の序文の成つた時と同じ年同

じ月であるのも一奇である。

一體木米に對する世評如何といふに、いろ／＼のものにその名を見る事が出来る。但し曲亭馬琴は『煎茶早指南』の出た年の夏京都に遊んだが、京の陶は粟田口よろし、清水はおとれり、白河橋に松風亭といふ店あり、大坂兼葎堂ごのみのこんろさうす等を製す、又一軒旭峯といふ店あり、宇治の通圓が店にてひさぐ茶碗を製す、この二軒器物をかきしもの多しといふて、木米に觸れぬが、木米は竹田によれば、骨董家略千金猶不可得て、店など出して居る筈もないから、江戸からお上りさんなる馬琴の知る由もないのである。『煎茶早指南』の記載は、前に掲げたのは急須のみに就ての評で、尙ほ奥に、高翁（著者いふ、高遊外即ち實茶翁）の時分、急燒こんろ茶わんをやき出すに、其名を得たるものは、建仁寺町三文字屋七兵衛と清水の邊に住す梅林金三なり、今其形をうつして焼出すもの、清水の六兵衛、同嘉助、左兵衛等尤上作なり、六兵衛、嘉助、近比故人になりて、今の嘉助又妙作也、左兵衛は唐物をうつすに妙を得たるものなり、煎茶置用の陶器を専らにひさぐものは、旭峯、松風店なり」とも書かれて居る。越えて文化三年龜田鶴山

が上京した時如何に評判が高かつたかは、平安窯戸巨擘青木來字木米者其聲名傾都下〔箕柳祠碑文〕の文字に見えて居る。「平安人物志」は當代名家の氏名を列記し、今日のフースファーに相當するもの、明和五年大雅、芙蓉等を載せて第一冊を出し、爾後嘉永まで十冊を出したが、文政五年始めて良工の目を置いて陶器師を載するや唯、ひとり木米を載せて、毛久米〔稱八十八條白川橋〕木舍佐平〔號繩米新門前繩手東〕とし、次の文政十三年の卷には仁阿彌道八、櫻久太、宮川長造と共に、木佐平〔號繩米新門前繩手東〕木舍左平と載せ、また次の天保五年はその歿後なるに拘はらず此儘に据え置いて居るのは、板刻を改むる暇が無かつたのであらう。この外、近世名譽陶工の筆頭として、木平通稱佐兵衛又號豐平〔南蠻摸をよくす又染付ものなどこと〕に妙なり中興の名人なりと記して居るのは清談樓主人の「新撰煎茶一覽」〔弘化四年版〕であつて、東園の「煎茶要覽」〔嘉永四年版〕も略、これを踏襲して同じ題目の最初に、木平〔左兵衛號〕南蠻摸をよくす又は染付もの妙なり名人なりと書き、且つ二重楕圓木米印をも掲げて居るのである。われらの寡聞なる尙ほ此外に記載ありやなしやを知らぬ。さて此次に例の田内梅軒の「陶器考」〔安政二年版〕は來るのである

が斯う並べて見ると記事としてはやはり「陶器考」が一番面白い。しかも最も興味の深いのは山陽の刻陶説序竹田の「竹田莊師友畫録」の「木米老人」の一文でなければならぬ。けれどもこれらは後の樂としてこゝには載せず、われらをして直ちに木米の作品を論ぜしめよ。

木米の作品は如何いふ種類のものがあるかといふと、まづ大河内博士は型物、南蠻寫、素燒(型物)、交趾寫、青磁、染附物、朝鮮寫、古赤繪寫と擧げ、且つ金澤での作品に倣明五彩窯があるとして居られ、奥田誠一氏はこれから朝鮮寫、倣明五彩窯を引去つたものに、更に紅毛燒、泥燒、樂燒(殆ど無し)の三つを加へて居られる。兩氏共克明に木米の作品を考へてこれにて遺漏なしといふ所まで煎じ詰めた上に發表せられたものではあるまいが、誰が見てもまづ之て木米の種類の大體は盡きて居ると思はれる。若し此外にあつてもそれは稀に存して殆ど無い種類のものであつて、右の十一二種さへ明かにすれば、それ一通りは卒業である。そこでわれらも二氏の後へに尾いて一つ々の種類を列記する。

南蠻寫は木米作中の最も得意なものの一つである。普通多いのは急須で

ある。木米の急須は倒に立つとはよく人の言ふ所であるが、手を軸にして立て、見るに、正に言の如く安全に立つやうである。挿圖参照。但し斯かることを
あつて、恐らく好事家の
筆で、恐らく好家
筆で、恐らく好家
筆で、恐らく好家これは如何いふ譯であるかといふと手の所て全體の中
心がちやんと取れて居るからである。一體木米の作る南蠻急須はその形か
らいふと賣茶形と稱するもので、賣茶翁所藏唐製茶瓶圖、今藏在兼葭堂」として
『清風瑣言』に載せられて居るのが原本となつて居る。賣茶翁は傳によれば自
分が死んで後、人を誤つてはよくないといふので生前茶具を焼き棄てたとい
ふけれども、尙ほ若干のものが兼葭堂あたりに残つて、兼葭堂の筆に成る『賣茶
翁茶具圖録』なるものもあるのである。賣茶形急須の第一の約束は手と口と
が直角に附いて居る事である、即ち急須の全體の圓を四つに割り、その相隣り
した二方に手と口とが附けてある。打見た感じが餘程行儀正しい。大坂の
花月庵は賣茶の遺志に従つて花月庵流の方式を定めた人であるが、今の老人
の話によると、この手と口とはその附き際が肩の同じ高さの所にあるのが本
式であるさうである。木米の急須は確かにこの約束にかなつて居る。作行



南蠻寫急須

きから言つても、轆轤は愉快にまはり、筥は無駄がない。土が心地よくしまつて居て、茶を花月庵式に注ぐ時左手で鈕を軽く引き上げて露を切るにかちりと好ましい音がする。「清風瑣言」には賣茶形の外に鶉居珍玩と標した秋成所藏の南蠻製瓶の圖が載せてあるが、これは普通の芋頭の形で、賣茶形のやうな勢がない。賣茶形の勢は主として腰以下の削げて居るのに歸因する。木米の轆轤の師といはれる久太の銘あるものは秋成形が普通のやうに見えるが、之は胴の輪廓の曲線に微妙な働きがないだけに、作り易い代りに、また平凡である。

南蠻にやゝ似たもので木米の急須に多いのは焼べめ(素焼)である。これは大河内博士も言はるゝ如く型物が多い。形は一番多いのは上部が八角形で腰以下の圓いものである。すべて型物は型一つさへあれば凡工にも真似は出来るのであるから、世間往々贋物がある。その中でも焼べめはむづかしい釉の加減も入らず、殆ど贋物の多いのに堪へないのである。

交趾寫は如何。これは急須のみならず、煎茶碗、香合その他いろくゝのもの

に應用せられて居る。而してこれも型物である。木米の仕事の中では交趾は餘程重要な位置を占めて居て、器物も形も變化が多く一つ観ればまた一つ新しい心地がする。永樂保全是紫に成功し、木米は黄に異彩を放つとは一般に言はるゝ所であるが、此説は確かに當つて居る。一體永樂も木米も等しく紀州侯に招かれたので、われらの頭は彼を言へば此を聯想し、此を語れば直ぐ彼を引合ひに出さうとする傾きがあるが、これは共に交趾釉に成功したといふ點からもさうなるのである。永樂と木米との釉の溶材の比較に就ては前に人の説を紹介して置いたが、頁參照二六七二者の交趾釉は硬と軟明と暗と清と濁と濃と淡と厚と薄とと種々の點に於てかなりの相違があるやうである。尤も何事も一概には言へぬけれども、大體に於てこの反對語の中前のものが永樂で後のものが木米の特性であるのは言ふまでもない。それならば永樂の方が上手かといふに夫も遽かに決め難い。永樂は『平安人物志』でも嘉永に至つて初めてその名を載する如く木米とは一時代後の人であるから、こゝにも面白い對比がある。木米はまた木米でその生涯を幾つかの時代に分たねば

ならぬが、大體から言へばまだ、その時代は永樂の時代に比して竹田の所謂大雅蕪村の遺韻の残つて居る時代であり、その作の時代精神、その作を圍繞する雰圍氣に於て既に或る相違がある。木米の古味は單に溶材の關係などばかりを以ては論じ切れぬかも知らぬ。何の二三十年がといふ、併し日露の役後國民の志操の向上した時誰が今日の社會の墮落を豫想し得たか。木米の交趾の急須で最も多いのは荒磯である。而して全體に黄釉をかけたものもある。しかし之は無節制に得意の釉色を用ひたのでない事は、一方に紫釉のみを用ひた靈芝紋のものなどあるのでわかる。われらを以て見れば紫もまた面白くなくはない。香合は如何にもかはゆい。また木米の作には蔓附きの素焼の土瓶に型物の鳥などを押付けて交趾釉をかけたしやれたものなども見える。

素焼といへば奥田氏の所謂泥焼を早く書くべきであつた。泥焼は察する所白泥の風爐などを指すのであらう。これも少いやうで澤山あるものである。われらの茲に挿圖としたのは花月庵所藏の逸品であつて、箱書に「風爐有

上小篆題字識文印、風門中雨過青天雲破圖、文政庚寅臘月十九日、幕明末陽美造製爲花月庵茶伯木米とある。そもく花月庵は何人ぞといふに、彼は大坂の人、姓は田中、名は元長、菊井館と號した。元來釀酒を業とし、宅中にある名水、華之清水を改稱して菊の清水といひ、菊之井といふ銘酒を賣り出したが、性風流の志篤く、香川景樹に和歌を學んで賀壽といひ、禪は黃檗聞中に參して毛孔といひ、別に賣茶の遺風を慕つて花月庵茶式を樹て、天保三年江戸に遊んで篤胤詩佛、文晁等と交り、綾瀬川の邊に茶庭を設けて同好の士を會し、木米の殿村氏宛の狀に古銅の風爐を持歸る事を記すは此時(一九〇頁、二一三頁參照)此風爐今も花月庵に傳はり、虎、火、食、鳥、魚を爪とする木米の網(さな)は頗る特色がある。木米の箱書にいふ、古銅風爐、八卦曲水星宿識文、新埴埴以爲體製、米。同九年一條家の召に應じて京に上り階下に茶具を荷うて式をなし鶴翁の號を頂戴した。嘗て禹域西湖の水を得るや、木米に壺を造らせ、これを藏封して澱川青灣に沈め、永く浪花の人をしてその流を汲ましむるの意を寓し、歌うていふ、

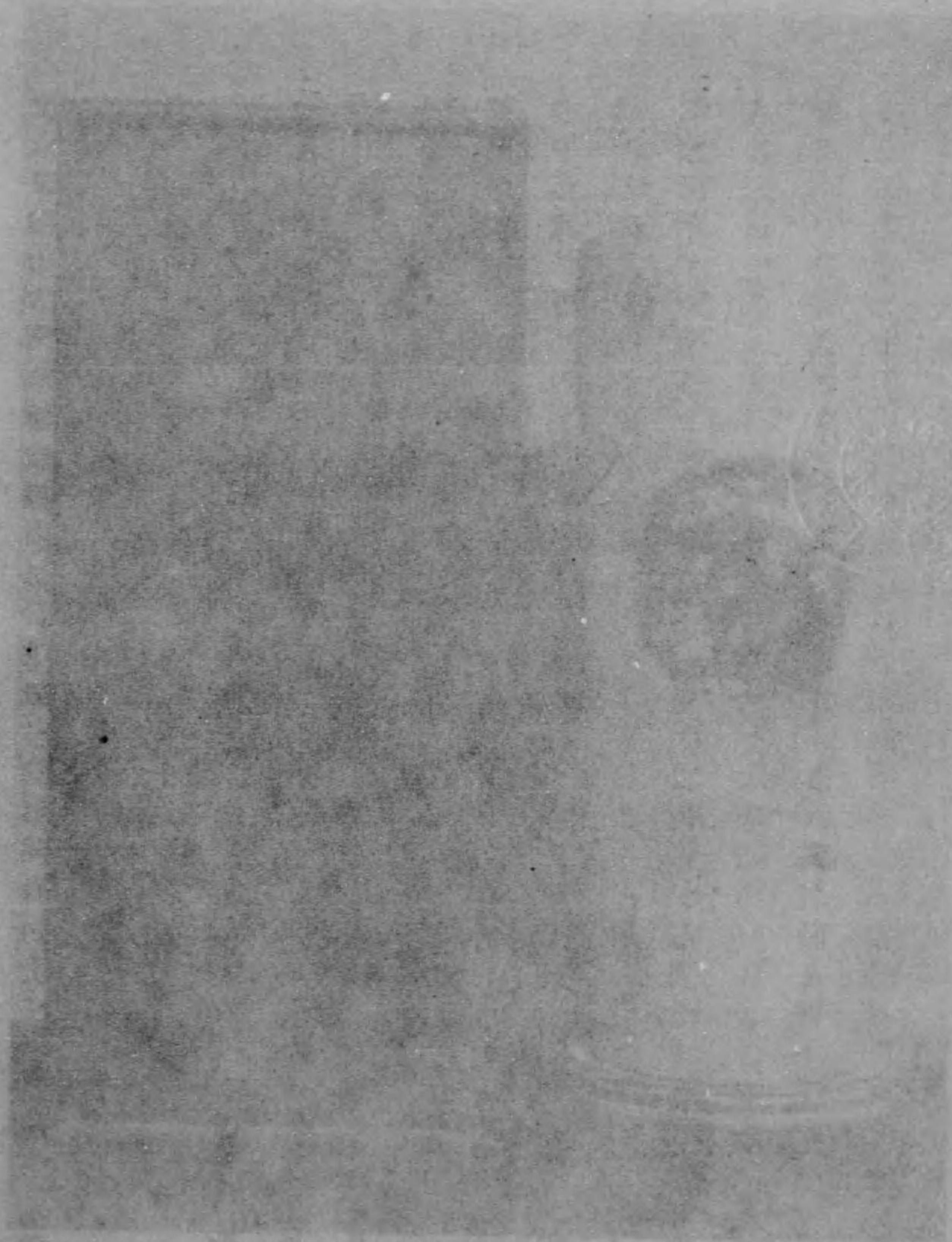
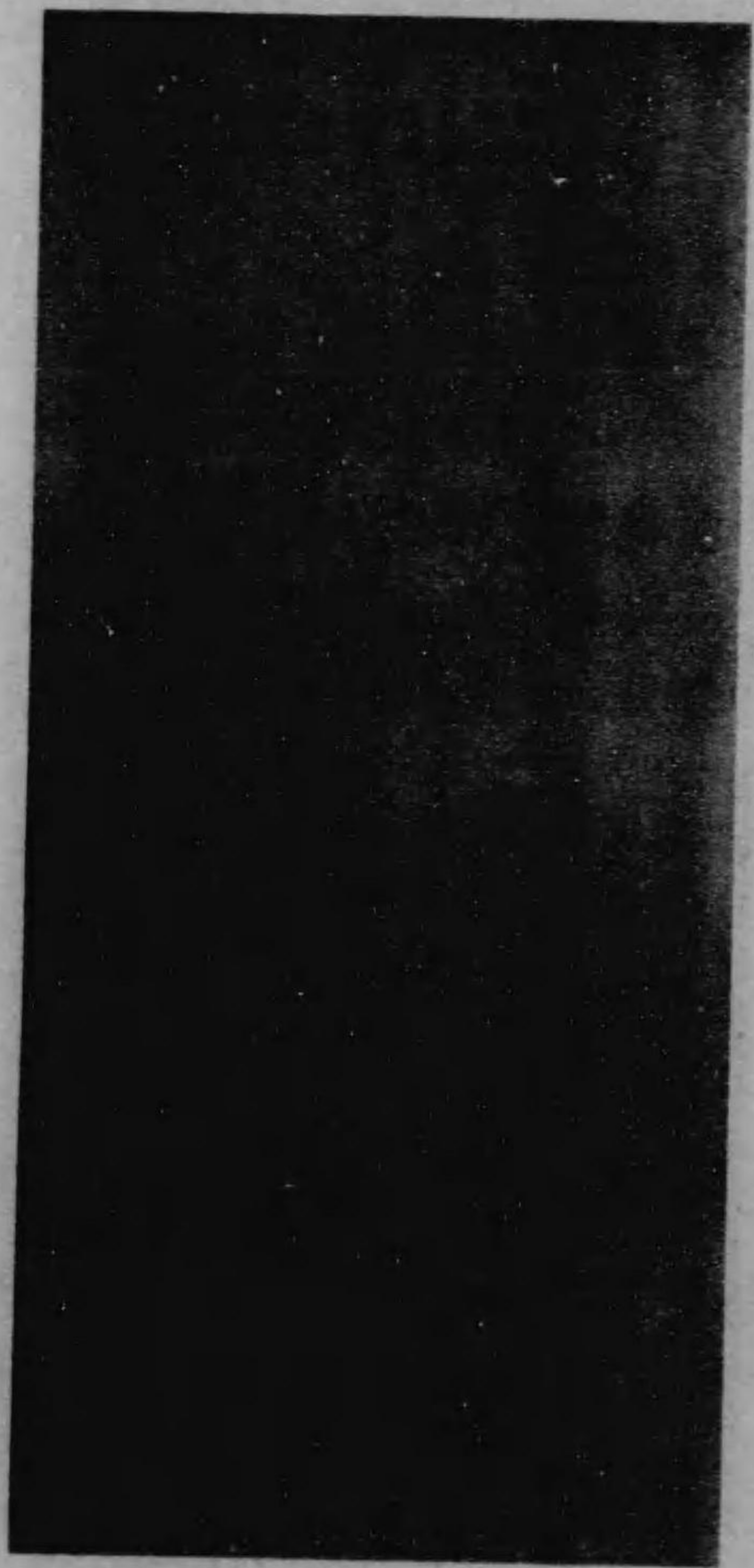
稀仁得天宇都世之西乃湖乃水越長柄仁汲也風流士

また茶臼山の南邦福寺境内に急須塚を設け、同好の士をして急須の破れたる



白 泥 風 爐

嵐山行樂圖



嵐山行樂圖

露光量違いの為重複撮影



嵐 山 行 樂 圖

を納めしめたとは『浪華人物誌』の記すところである。平安の陶工はいたくこの浪花の茶伯と相結んだ。故三浦竹泉は木米の遺作の多きは殿村氏、花月庵、伏見の築山氏、天下この三家を推したものであると言つたが、築山氏は今は悉くこれを失つたので、殿花兩家の光輝は一層なるを覺える。

楓林紅葉之暮煎茶

幽韻之時節候愈御莊

建御座珍重奉^(カ)存候先比者

花書到來拜見辱奉^(カ)存候

青花象形香合蓋有罇

御登し被成く^(カ)しくは

竹新主人に傳言申上候

御聞召可被下候然^(カ)

此了汝陶窑聊燒立

葉茶入雙壺出來

是をくゞしくは

竹島主人ニ申上候扱又

先達御尋之大徳寺古銅

風爐持主寺は眞珠院

遠からぬうち得

紫眉御清談承度頓首

十一月十八日 木米

花月堂雅伯

手紙も色々あるがそれよりも面白いのは、大坂島之内九之助橋田中屋新右衛門様 正月二十二日ちん相濟 木屋佐兵衛の包紙さへ其儘残つて居る嵐山行樂の一軸である。挿圖参照、賦記に「乙酉(文政八)春仲浪茶花伯與平安陶工向貝川激湍瀾茶于花間雲中圖爲花月華米」とある。向貝川は大堰川、右手の橋上を行くは茶家人。われらの示された陶器はすべて十餘點であつたが、その中御木寫しの小碗を取つて老人はいふ、風流の士は多く後生を思はぬ、しかるに木米はさうでなかつた、見られよ、これこそ木米が何時しか作つて置いた茶の子茶碗であつて、

木米歿後、來縁の下より取出し、五つ宛組んでは親しかりし家に配つたのであると。何ぞ知らん、これこそ木米が天保三年豊公遺物展観の記念の年をあてこみ、北野の森に煎茶百烹を催さんとて一たび焼き損じ、二たび焼き得て、しかも遂に志を果さなかつた悲しい形見の品ではあるまいか。

話は前に戻つて、雨過青天青雲破の風爐を見るに、高さ一尺二寸、口徑四寸一分、厚さ四分、その技巧の洗練せられて居ることは宛ら唐山製そのものを見る心地がする。爐座には「粟田豊米」の印がある。一六四頁に面する挿圖に見え、印影は即ち之を寫したのである。面白いのは風門に取付けた二箇の人物である。公西園寺にも似た黒衣の風流才子が紅衣の佳人と行く圖であつて、肩にかたげた傘に雨過青天雲破の意はあるのであらう。これはこれ木米の諧謔の一面を示すものである。

白泥の風爐にはいろいろの形がある。最も多いのは風門に梅月を透刻する梅月爐であらう。中程で重ねる子母爐もある。廬同の詩などを鐫り附けたのもあれば、畫を刻したのもある。竹田の書畫を刻したのは世間往々あり、固より人の甚だ珍重するもので、その一例をいへば、栗を畫き芋を畫いて「草閣

茅樓不似城、山光滿郭晚來晴、今宵共酌一瓢酒、剝栗煨芋語月」と題するが如きものである。文政十年頃から前の竹田の書はその以後の如く戦筆的でないのであるが、風爐に見る竹田は前者の方が多いやうである。さらば木米の作った風爐は何處か特殊の用意があるかといふに、三ツの爪の一つが特別に幅廣くしてある事と、網（さな）の穴が上の方で小さく下の方で大きい事などであらう。爪を一つ幅廣くしたのは其處に急須の手をかける爲（熱くならぬ）であつて、穴の下廣がりなのは火の落ち易い爲らしい。爐座にも随分意匠を凝らしたものがあつて、着色のものも少くない。

染付（白磁青華）は第十四章に説いた如く、木米殆ど京都に於ける第一先達の一人らしく見える。染付の面白味はその器の形よりも繪様にあるのであるから、作家が畫技に長ずる時最もよくその性能を發揮する事が出来る。木米は陶工といふけれども、畫を以ても當時一方に雄を稱するに足る伎倆を備へてゐたのであるから、染付の愉快なのは當然である。文政十二年の箱書ありとわれらの前に説いた作品は、一六四頁に面する插圖中に掲げた屏風箱の香

合であるが、この一例に見るも山陽の「每摹一古瓷、輒逼其真、雖老骨董不能辨」といふ吾人を誣（いつ）ひざるを思ふのである。木米の吳須の色は鼠が、つて頗る落ちついて居る。眞清水藏六氏によれば木米の染付に最もよく似て居るのは瀬戸の治兵衛で、治兵衛の作品は屢、木米の印（おぼ）落として取扱はれるといふ事であるが、われらはまだ治兵衛の如何なるものかを知らぬ。染付の作品で多いのは香合をはじめ、茶巾筒、湯呑、盃、葉茶壺、急須、煎茶碗の類かと思はれる。香合、葉茶壺などは澤山見ることが得ないが、煎茶碗は頗る多く残つて居る。それには五客もあり、七客もある。七客は即ち廬同七碗であつて、内底の二重線七寶の中に、「一碗喉潤」「二碗破悶」「三碗搜枯腸」「四碗發輕汗」「五碗肌骨清」「六碗通仙靈」「七碗喫不得」の句が一句づゝ書かれて居るのである。これは當時甚だしく煎茶家の間に喜ばれたものと見えて、煎茶碗の中でも特に多いやうに思はれる。一體木米は煎茶器の中でも茶碗は就中興味を託した、礬紅には勿論見るべきものがあるが、染付中にも驚くべき佳作がある。嘗てわれらが備中で見たものは、轆轤を應用して碗の外面にぬらりと太い波狀線を引き、之

を土坡に見立て、その間隙を樓閣人物で埋めたのであつたが、木米の所謂元様の有無は別問題として、その輕妙の筆致、放膽の氣分、今忘れんとして忘れ得ない。蓋し茶碗は抹茶にもせよ煎茶にもせよわれ／＼が直接に之を口にするのであるから、其處に言ふべからざる親しみがあつた、作家もまた従つて之に力を盡くす傾向があるといふ心理學者の説明もある。木米の煎茶碗で多い形は鍾しやうである。これは盃の如く丈が低くなく、しかも甌の如く尻が膨れて居ない。手執るに易く、目見るに安らかである。木米の箱書に「茶鍾五層、唐宋元明茶詩文以鑿紅燒成、陶工木米」白瓷鮮紅茶詩茶鍾五層、木米造など見える。今その普通の場合の寸法を記して見ると、高さ一寸六分、口径二寸二分といふ所らしい。高臺は高さ二分、徑一寸位がきまりのやうであるが、これも高さ三分以上のがある。木米のは花月庵流であるから高臺が高い(拭ひ易き爲)とは屢、聞く言葉である。木米は染付は普通の場合ただ「青花」とのみ箱書付をして居るが、また「白磁青花」と記す場合もある。

木米の青磁は既に説く所によつて明かなる如く頗る有名なものである。多くは七官風であるが、また東京帝室博物館の人形手の如き柔かな感じのものもある。

併し多くは七官風の強い感じのものであつて、高臺は鈍作りとでも評したい位。一體が非常な厚作であるから、重いことはまた石のやうである。南蠻や白泥や白磁のものの中には驚くべき薄作があつて、手に取上げて見て想像よりもまた更に輕いのに二度びつくりすることが屢、あるが、青磁の方は想像よりもまた重いのに驚く事が多いのである。「陶器考」には木米が銘印を用ふること遅く、賈物師となつたのは惜むべきであると言つて居る。此評は木米の作品の多くが銘印をもつて居るに見て甚だ奇異の感を與へるのであるが、青磁のみは幾分無印のものが多いのではないかといふ疑がある。これは二代竹泉も言つて居たことであつた。然らば木米はどういふ動機から青磁には餘り銘印を用ひなかつたか。(一)十分得意の作が出来ぬので名を惜んだこと、若し果して然らば銘印あるものは多く後年のものといふ事になる(二)賈物を作る目的。しかし(二)はわれらは否定したい。たゞ今世間で木米の作として信じて居るものの中には實は木米ならぬものもあるのではないか。或は支那製もあるかも知れぬ。かう考へて來ると例の穎川の評なるものも

幾分意味があるやうにも考へられて来る。

さて赤繪であるが、これは割合に少いやうである。木米が穎川の弟子ならば、今少し穎川風の赤繪を作りさうなものであると言つて、この理由から穎川師事説を否定しようとする人もある位である。穎川風もあるにはあり、殊に百兒手、百老手等に至つては著名なものであるやうであるが、不幸にしてわれらは餘り之に接する機會を得ぬ。若し夫れ礬紅を以て煎茶碗に茶詩を書いたものに至つては到底自餘の陶工の企て及ぶべからざる氣格を備へ、木米作中最も見るべきものの一つとする。一六四頁に面する挿圖に收めたものはその日既望日華頂峯下新門前木屋米とあり、一つは丁亥年秋八月既望日華頂峯下新門前木屋米とある。

大河内博士の所謂朝鮮寫は三島手や御本うつしなどの事であらう。三島の手法を胡椒入に應用したものの如きは愛すべき表現をもつが、併しこれらは奥田氏の擧げられた紅毛焼と共にその數は甚だ多くない。然るに同じく多くないものとして尙ほ擧げることの出来るのは、金襴手、仁清寫、宋胡錄などである。木米の金襴手は地の赤釉を轆轤でかけるに、其層が極めて薄いに拘

はず、極めて濃い色をもつて居る。否、幾分黒ずんでさへ居て、永樂の如く美しいものでなく、しかもその中に極めて氣品の高いものがある。仁清寫は共箱のものもあり、その書風より見て文政以後の作なるもあるが、少しく立歸つてわれらの挿圖九〇頁に面するものとした金澤時代のものを説明して置かねばならぬ。即ちこれは眞龍院の御好みよつて作つたものの控へ九〇頁であつて、春日山窯木米製茶碗、眞龍院様御使用ノ茶碗木米へ被仰付其節此分控ニ燒候ヲ同人ヨリ曾祖父純藏へ相贈候品ト申傳候、龜田伊右衛門の添書がある。まづ注意すべきは高臺の外面に見える「文化戊辰春正月於加陽新窑製」の十三文字である。この文字の書風は春日山の製品に見ゆる「金城」や「金府新製」にほぼ共通な點がある。一〇〇頁、一四一頁の記事及び一〇六頁に面する挿圖参照而して豫て「加陽製」の印あるものは木米時代の春日山製品であらうと見當をつけて居たのであつたが、今こゝに「加陽新窑」の文字の見えるのも愉快である。「加陽製」の印ある作としては金澤それは仁清寫梅繪香合である。此茶碗は今前田家の藏となつて居る。作としてはまづ形の落ちつきある點、轆轤や土の仁清その儘なる點、繪付の巧みなる點等を數へて、

此時代既に此技あるかと賞すべきであるが、しかもその繪様釉藥等に何となく唐物臭あるは興味ある點であつて、七寶つなぎの金箔の置き方などの馬宋の陶法書を振返らしむるも面白い。この茶碗を拜見したのは最近の事である。宋胡録の優作はわれら之を大分中尾氏に見た。われらの殊に敬服するのは把手や口作りの如何にも巧妙な事である。(これは和蘭陀うつし、南蠻うつしの急須等に就ても言へることであるが)大河内博士は急須の蓋摘みのうまいことを指摘して、一寸つまんで見たくなるといはれたが、われらはまたその口作や把手を見ると、有機的に生きて居るといふ感じを起すのである。この口は現に氣脈が通つて植物の芽の如く生長しつゝあるのだといふ感じを起すのである。東京有尾氏の和蘭陀寫の急須は手が殊によく、關節の動く蟹の手を見る心地がする。しかも一見比例を失する程大きくて、あの木米獨特の怪奇の味を多量に出して居る。——生きて居る、これはあらゆる木米の作品を通ずる大特色である。

木米終

附錄

刻陶說序

賴山陽

周世宗時有請竇器樣者世宗批曰雨過青天雲破處這般顏色作將來是英雄語也因此思之凡百之工宜直以造化爲師青天雲破何處不可觀何必規々異那人手跡哉雖然欲摸天雲不可徒手得是法之所以不容不講也古者銅玉髹漆皆有方說唯陶法散見諸書未有專籍清朱琰陶說罔羅古今至爲明備我木米翁梓而行之其益世用弘矣翁嗜古士非陶工也少小好賞鑑古器時或摹之嘗嘆曰吾欲雕玉々不可多得欲造銅器不能及吾身見其生古色乃遂有志埏埴之工以爲嚴竇忌竇邈矣當足利

氏時、有若瀨戶四郎、擬乎建而不能成者也、及豐臣氏時、有若伊勢五郎、學於饒而厯得其青花者也、輒近則有若仁清、若乾山、皆撫西洋、而仁清曇色少澤、乾山徒成坯體而已、大抵前輩、速乎成名、不復刻意釉法、故其說不傳、後人無從按之也、於是苦心殫精、至親察火候、附耳于窯、夕炸得聲、故凡古今書籍、一字有關於陶、輒錄而念之、最後得此于龍威祕書中、祕書卷帙重大、當時舶來無多、翁特爲欲觀此月、購取全函、囊橐一空、自是枕籍鑽研、妻孥竊罵不顧也、翁之陶、殆奄有前人、每摹一古瓷、輒逼其真、雖老骨董不能辨、以此擅名一時、資於此書爲多、而不自祕、出其糟粕、以利益世人、可以知其存心、而校訂之精、出於實驗、非佗人可比也、翁請余序之、余最嗜焉於此、且受而涉閱之、曰、此書、本自說古、及說今者、今倒置之、又盛稱康熙以來饒窯之良、是在彼中人、不得

不爾耳、余意謂、覺羅氏、以胡羯主中原、陶之精雅、必不能及宋明、彼柴汝定哥、竝係中土、而今無聞焉、獨有饒州、僅存古樣於東南一隅、則世宗所謂青天、亦爲腥羶所熏蒸、樣之所本、旣已非古也、縱令學古釉法、終不能得其真色、必矣、我

日出處、光華清明、况會此熙昭之時、琰之所稱、人心優裕、武力緩閑、地產物華、應運而起者、將不在彼而在此、余已於翁乎見之、故言此、以勉讀者、使自奮其志、不徒恃其法、非獨陶法爲然也、文政丁亥長至、三十六峰外史賴襄撰竝書、

木米

田能村竹田

木米老人、名八十八、號木屋、因自稱木米、京人、居于鴨東大和橋北、予初訪其居、甚狹窄、架鴨水上、流水浚潺、響于屋下、手汲其水、